

放射線の健康影響に係る研究調査事業 令和3年度年次報告書（詳細版）

研究課題名	メンタルモデル比較を用いた放射線リスク情報の提供と対話方法の提案
研究期間	令和3年4月1日～令和4年2月28日

	氏名	所属機関・職名
主任研究者	小杉素子	静岡大学・特任准教授

	氏名	所属機関・職名
研究協力者	桑垣玲子	一般財団法人電力中央研究所社会経済研究所・主任研究員
研究協力者	土屋智子	一般社団法人複合リスク学際研究・協働ネットワークリスクコミュニケーション・理事
研究協力者	菖蒲順子	国立研究開発法人日本原子力研究開発機構核燃料サイクル工学研究所・副主幹
研究協力者	小野田眞	国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所・客員研究員
研究協力者	笠井清美	*元放医研
研究協力者	竹田宜人	北海道大学・客員教授
研究協力者	中村博文	国立研究開発法人日本原子力研究開発機構核燃料サイクル工学研究所・室長
研究協力者	原田眞理	玉川大学・教授
研究協力者	村上道夫	大阪大学・特任教授

研究要旨	<p>専門家モデルの枠組みに基づく半構造化インタビューの発話を、放射線影響に対する不安の高低で分けて整理した。放射性物質名や物性を述べる人はほぼいないが、風で流れた物質の汚染状況が多様であることは不安の高低によらず理解していた。土の汚染による農作物への影響やそれを食べることによる被ばく、除染についても経験知がある。小児甲状腺がん等に関する知識がある一方、将来何か影響があるかもしれないという漠然としたイメージもある。不安低群のみで、主に食べ物の選択や調理法で影響を避ける対策について多くの知識があった。</p>
キーワード	リスクコミュニケーション、放射線リスク、健康影響、情報提供、インタビュー調査

I 研究目的

東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、福島原子力事故）では、多くの人々が放射線による健康や環境への影響に対して強い不安を感じた。その不安に対応するために事故直後から様々な専門家や機関から情報提供が行われた。しかしその多くは放射線の健康影響に対する一般的な知識に関するものであり、人々の不安や懸念に十分応えたものとは言い難く、現在に至っても人々の不安が払しょくされたとは言い難い。例えば、朝日新聞社と福島放送が2018年2月に福島県民を対象として実施した世論調査（電話調査）¹⁾では、回答者の66%が放射性物質に対して不安を感じている（「大いに（21%）」+「ある程度（45%）」）ことが報道されている。

人が不安を感じる要因として、情報の不足があげられる。自分の置かれた環境や取るべき行動が分からない状況では人は不安を感じるため、不足する情報を補うための噂や流言、多数者の行動への同調などが生じることが社会心理学の知見から分かっている。したがって、人々の不安を解消するための効果的な情報提供やコミュニケーション活動のためには、人々にとって不足している情報内容とは何かを見極めることが重要である。しかし、これまでの放射線リスクに関する情報提供は、科学的知識を擁する専門家の認識に基づき、専門家が必要と考える知識を中心としたものに偏っており、一般市民が求めていることはなにかという点はほとんど配慮されてこなかった。

本研究は、上述の問題を解決するため、専門家と情報の受け手との知識や認識の構造（メンタルモデル）の違いを明らかにした上で、人々が自分の置かれている状況を理解し、自らのリスクに関する自己決定を支援するための情報提供方策を提案する。事故から10年が経過し、現在も放射線リスクに対する関心や不安が高く情報収集を積極的に行っている人、日常生活においては放射線のリスクにはもうほとんど関心のない人など、住民の関心や不安の程度や知識量には違いが存在していると考えられる。そこで、放射線の健康リスクの専門家と、不安が高かったり情報を求めていたりする福島県民（不安の高低で2群を想定）の3種類のメンタルモデルを作成する。専門家モデルと受け手モデルの比較から、どちらかのモデルに欠如している情報内容を明らかにし、受け手が求めているが現在の情報提供資料には不足している内容や受け手の誤解を抽出し、受け手の2モデル間の比較からは、放射線リスクに関する知識や理解のロジック、現在の不安や懸念の内容の相違を明らかにする。これらの知見をもとに、受け手それぞれの特徴に適した情報提供の改善案を提案する。

環境省では、放射線の健康影響に対する不安に対処するため事故直後から様々なコミュニケーション活動を行ってきたが、今後もリスクコミュニケーション事業を継続する上では、専門家が“市民が放射線リスクを理解するために必要”と考える情報だけでなく、受け手が必要としている内容を丁寧に調査し、把握して取り組むことが重要と考える。本研究は、専門家の科学的知見を基礎としながらも、受け手側が保有する知識や認識、求める情報を踏まえた情報作成の手法（メンタルモデル・アプローチ）を用い、専門家の視点からは無関係とみなされる要素や周辺知識など、市民にとっては重要でも既存の資料には抜け落ちている要素、市民なりの理解の仕方（ロジック）に沿った形での説明や情報の提示順序などを明らかにする。

II 研究方法

3年の研究期間における具体的な実施項目は、①専門家メンタルモデルの作成、②受け手メンタルモデルの作成、③両モデルの比較による専門家と受け手のメンタルモデルの相違の抽出、④相

違点を踏まえた提供情報案の作成及び評価、⑤リスクコミュニケーション方策の提案、の5つから成っている。研究期間の1年目である2020年度は①専門家メンタルモデルを作成する。令和2年度は放射線リスクに関わる複数の分野の専門家へのインタビューから1枚の専門家メンタルモデル(図1)を作成した²⁾。

令和3年度は、情報提供資料の想定読者として、2011年3月の事故当時福島県に在住していた人を対象に、専門家のメンタルモデルをベースとした半構造化インタビュー調査を実施し、受け手のメンタルモデルを2種類作成した。

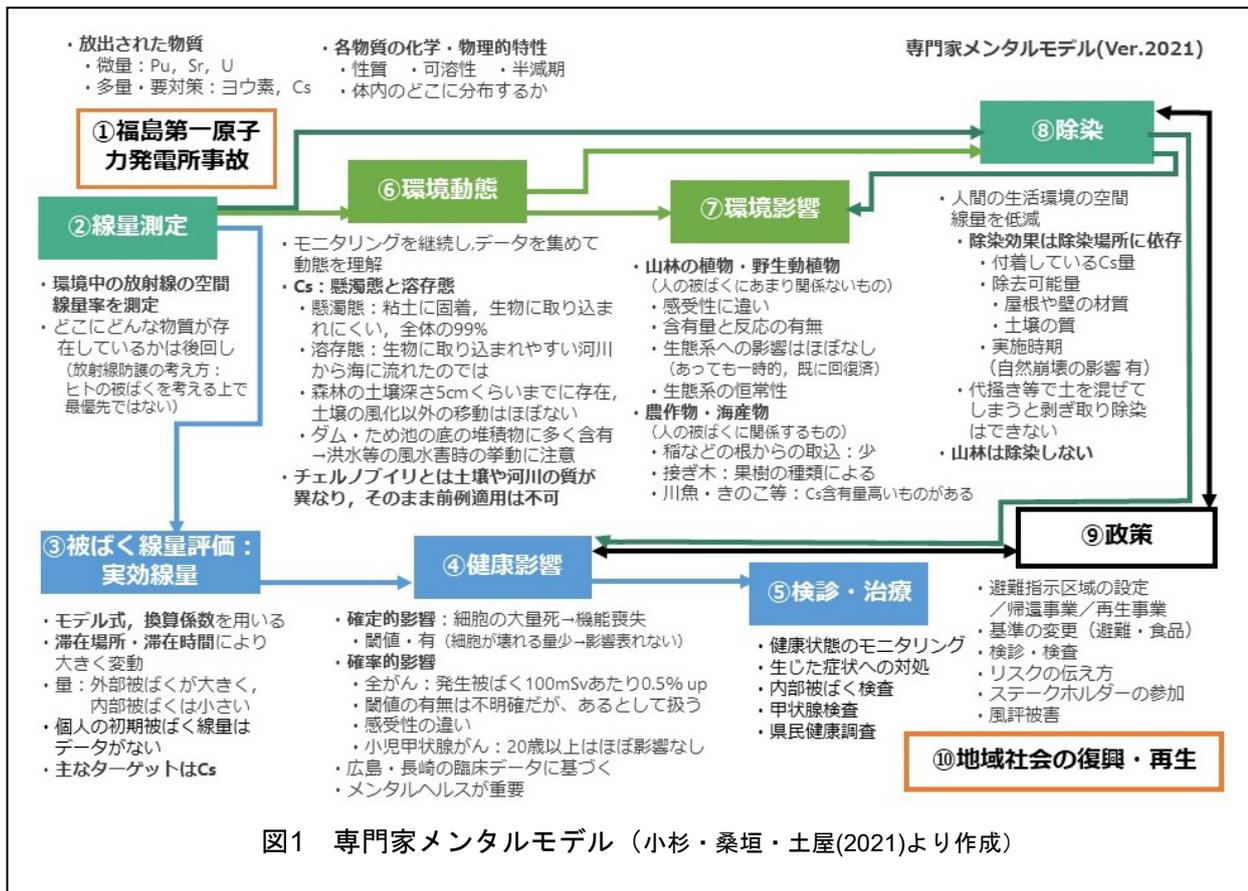


図1 専門家メンタルモデル (小杉・桑垣・土屋(2021)より作成)

1) メンタルモデル・アプローチ

本研究では、メンタルモデル・アプローチという手法³⁾を用いて、放射線の健康リスクに関する専門家の知識構造と情報の受け手の知識構造を比較し、提供する情報内容を抽出する。メンタルモデル・アプローチは、2001年に米国カーネギー・メロン大学の研究者らが考案した手法であり、様々なリスクに関する実証研究が行われている。この手法では、専門家と受け手の知識構造を図化することで、受け手に不足している情報だけでなく、その情報を理解した上での意思決定やリスク管理を行うために必要な関連情報やロジックが何かを示すことができる。また、市民は知りたがっているが、専門家は提供すべきではないと考えていたり、当該リスクとは関係ないと認識している内容や、市民のロジックに沿った説明の仕方等、情報提供の際に専門家が心がけるべき留意点も示すことが可能である⁴⁾。

2) 受け手インタビューの設計

①対象者の設定

本研究における受け手インタビューは、情報提供資料の読者（受け手）として主に福島県民を想定する。人々が福島県で生活する中で放射線リスクについて不安や疑問を感じた場合や、報道等なにかの切っ掛けでより詳しく知りたくなった場合に手に取ってもらうことを想定している。ただし、福島県外の人を排除するものではない。

②半構造化インタビュー

メンタルモデル・アプローチでは、専門家の認知構造（専門家モデル）の枠組みを下敷きとして、受け手モデルを作成する。そのため、専門家モデルにおいて重要な知識カテゴリについて、受け手がどのような知識を持っているのか、理解の仕方をしているのかは全てのインタビュー対象者に尋ねる必要がある。そこで、震災当日から現在までの放射線リスクに関する知識や経験についての自由な発話を妨げないよう留意しつつ、全ての対象者に必ず問いかける質問を以下の通り設定した。インタビュアーは、最初に 2011 年 3 月 11 日（震災当日）の被災状況、情報収集、ご自身や家族の行動について尋ねた後、これらの問いかけを行った。また、知識についての発話があった場合、その知識について「それはいつ頃、なにからお知りになりましたか」と更問いを行った。

詳細は、巻末資料にあるインタビューフローと書記用フォーマットを参照いただきたい。

③倫理的配慮

受け手インタビューは、東日本大震災や福島原発事故の被災状況や避難等について、当時の経験や思考、感情を想起してもらうものであるため、心理面での侵襲可能性を考慮し、インタビューでの言葉遣いやフロー等について研究班でよく検討し、臨床（カウンセリング）を専門とする研究協力者（玉川大学・原田教授）の指導を受けた。また、インタビュー調査は、主任研究者が所属する静岡大学の倫理規定に則って設計し、学内の倫理審査委員会にて学長承認を受けた（登録番号 21-9）。インタビュー実施に直接関わるメンバー3名（小杉、土屋、桑垣）は、事前に e-APRIN の「人を対象とした研究に関する倫理研修」を修了した。

表1 半構造化インタビュー設問

- 事故で出た放射性物質／放射能について、どんなことをご存じですか
- 放射線／放射能の健康影響について、どんなことをご存じですか
- 甲状腺検査について、どんなことをご存じですか
- 放射線／放射能の影響について（人間の健康以外に自然環境に関して）、どんなことをご存じですか
- 除染について、どんなことをご存じですか
- 放射線／放射能に関する基準について、どんなことをご存じですか
- 原子力や放射線にかかわる他の事故などについて、参考にした情報はありますか
- 今後の地域の復興や生活について、なにかお考えのことや、気になることはありますか
 - *もし、自発的な発話があったら
 - 風評被害、いじめ、副次的な影響について
 - トリチウム排水、廃炉、廃棄物について

④データの取り扱い

インタビューはオンライン実施においては動画、対面実施においては録音データとして記録を残した。動画および音声データは、外部機関に個人名等の個人情報を取り除いたテキストデータに変換を委託し、契約の際に個人情報保護およびデータ保管期間等について、当該機関と静岡大学の規定に沿うように内容を確認した。

3) 受け手インタビュー調査の概要

専門家モデルの枠組みに基づく半構造化インタビューで、福島第一原子力発電所の事故発生から現在に至るまでの知識や経験、メディアや対人で得た情報などについて話を聞いた。研究班のメンバーがインタビュアーと書記を務め、所要時間は90分であった。実施時期は、7月－12月である。新型コロナウイルス感染症の予防のため、オンライン実施が42件、対面での実施が4件となった。

対象者は、26名が調査会社ネオマーケティングのモニター、22名が研究班のメンバーの紹介で、合計48名、そのうち夫婦2名一組ときょうだい2名一組でのインタビュー参加があり、インタビュー件数としては46件となった。ただし、夫婦は家族としてひとつの発話データとして扱い、きょうだいは片方が婚姻のため事故当時県外居住からの移住者であるため、2名の個別データとして扱うため、分析対象データは47名である。原則としては事故当時福島県在住者を対象とするインタビュー調査であるが、移住者はメンタルモデル・アプローチで想定する情報提供資料の読者とみなして良いと判断し、分析対象とした。

対象者の属性内訳は以下の通りである（夫婦のデータは夫が代表して事前質問紙に回答したため、妻の属性は含まれていない）。事故当時の居住地域は、浜通り（14名）、中通り（24名）、会津（8名）、県外（1名）。性別は、男性24名、女性23名。年齢は、20代（10名）、30代（12名）、40代（10名）、50代（6名）、60代（9名）。平均年齢は42.2歳である。

4) 分析手法

①分析用データセットの作成

まず、インタビューのテキストデータ（発話データ）は、内容をインタビュアーと書記が確認してデータのクリーニングを行った。次に、発話データと事前質問紙の属性情報を統合し、分析用データセットを作成した。属性情報とは、「2011年3月11日時点での居住地（浜通り・中通り・会津）」「性別」「年齢」「現住所（都道府県）」「福島第一原発事故による影響に対する事故当時の関心」「福島第一原発事故による影響に対する現在の関心」「放射線の影響についての事故当時の不安」「放射線の影響についての現在の不安」の8項目である。

②テキストマイニングによるインタビュー対象者のセグメンテーション

発話データを、ひとつの話題（「地震」「健康調査」など）のまとまりを分析対象の1ユニットとして、発話内容の違いによりインタビュー対象者を2群に分けた。発話内容は、性別や当時の居住地域によってもそれぞれ傾向が異なるが、今後の情報提供につながる想定読者の特徴としては、放射線影響に対する現在の不安に焦点を当てた。

2群の差異をより明確にするため、「放射線の影響についての現在の不安」の回答「とてもある」10件とそれ以外37件（「まったくない」「あまりない」「ややある」）の2群に分けた。現在も不安が「とてもある」と回答した人々は、事故当時の不安も「とてもある」と回答しており、事故当時から不安が解消されずにいる人々と考えられ、以降「不安継続群」と呼ぶ（表2）。それ以外の人々でも、当時の不安は「とてもある」と回答する人の割合が最も大きく、事故後の時間経過の中で一定程度不安が解消されたと考えられるため、以降は「不安解消群」と呼ぶ。

表2 不安継続群と不安解消群の内訳

放射線の影響に対する現在の不安	事故当時の不安			
	まったくない (0名)	あまりない (3名)	ややある (9名)	とてもある (33名)
とてもある (10名)	0	0	0	10
ややある (17名)	0	3	3	11
あまりない (17名)	0	1	5	11
まったくない (3名)	0	0	1	1

現在の不安が「全くない」回答者の1名の「当時の不安」は欠損値

KHCoderを用いて、各群の頻出語20語を表3に示す。名詞20語の中身は不安解消群と継続群で大きく異なる訳ではないが、順位は多少入れ替わっている⁵⁾。例えば“放射能”“放射線”はどちらの群でも上位20語に入っているが、不安継続群では放射能が2位、放射線が12位に対し、不安解消群では同5位と8位となっている。“学校”は不安解消群では15番目にあるが、不安継続群では20番以内には入っていない。

表3 頻出語上位20語

不安継続群 (使用抽出語数=2,640)		不安解消群 (使用抽出語数=2,013)	
抽出語		抽出語	
感じ	132	感じ	381
放射能	126	自分	373
情報	99	情報	289
自分	88	原発	237
原発	82	放射能	220
事故	68	テレビ	204
テレビ	62	事故	189
状況	55	放射線	185
地域	50	子供	154
地震	49	地震	147
被害	45	状況	132
放射線	45	ニュース	126
子供	40	最初	116
周り	38	被害	116
ニュース	37	学校	109
数値	31	震災	99
地元	31	周り	98
津波	30	数値	97
最初	28	場所	96
コロナ	27	状態	94

出現語を、原子力発電所事故や健康影響等のテーマ毎にグルーピングし（表 4）、出現割合を、2群で比較した結果を表 5 に示す。傾向として、②放射線リスク、④健康影響、⑧被ばく・暴露に関わる言及割合は不安継続群の方が不安解消群よりも多く、⑨感情については逆に不安解消群の言及割合が多い。

表4 出現語のグルーピング

①福島第一原子力発電所事故：福島第一、原発事故、原子力発電所事故、爆発、事故
②放射線リスク：放射線、放射能、放射性物質、出る、放出、流れる、風向き
③線量：測定、測る、計測、線量、放射線の値、空間線量、数値、シーベルト、ミリシーベルト、マイクロシーベルト、Sv、mSv
④健康影響：甲状腺、甲状腺がん、がん、血液、白血病、免疫、体に影響、健康被害、健康影響、身体に害、健康への影響、健康に影響、体調、病気、遺伝子、DNA、放射線、放射能、影響、受ける、被害、害、風向き、20年度、将来
⑤検査・健診：ホールボディ、ホールボディカウンター、WBC、甲状腺検査、県民健康調査、人間ドック、健康診断、甲状腺の検査、検査
⑥食べ物・飲み物：食べ物、井戸水、水、米、コメ、キノコ、きのこ、コシアブラ、山菜、竹の子、タケノコ、桃、サクランボ、さくらんぼ、福島産、福島県産、魚
⑦他の事故：チェルノブイリ、広島、長崎、茨城、東海村、スリーマイル、原爆、第五福竜丸、ビキニ、JCO
⑧被ばく・暴露：被ばく、ひばく、あびる、浴びる、受ける、うける、放射能、放射線、放射性物質、着く、つく、付く、暴露
⑨感情：不安、怖い、汚れ、汚い、嫌、いや
⑩子供：赤ちゃん、若い子、妊娠、出産、孫、子供、こども、子ども

表5 不安の高低による出現語グループの違い

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	合計
不安	107	259	109	261	51	47	38	225	43	45	627
継続	(17.1)	(41.3)	(17.4)	(41.6)	(8.1)	(7.5)	(6.1)	(35.9)	(6.9)	(7.2)	
不安	339	741	364	727	151	164	100	593	217	183	2013
解消	(16.8)	(36.8)	(18.1)	(36.1)	(7.5)	(8.2)	(5.0)	(29.5)	(10.8)	(9.1)	
合計	446	1000	473	988	202	211	138	818	260	228	2640
χ^2 値	.01	3.92*	.12	5.97*	.19	.19	.94	8.94**	7.85**	1.98	

() は各群の全グループ出現数における各グループの出現数

* p<.05, **p<.01, ***p<.001

頻出上位 60 語と現在の不安の高低（とてもある（不安継続群）／ない（不安解消群））の共起ネットワークを図 2 に示す。両群に共通の語が多くある一方で、「不安解消群」には“放射線”“知る”“住む”が、「不安継続群」では“地震”“検査”“受ける”“被害”などの語が特徴的に関連していることが示された。同様の共起ネットワークを、不安の高低で対象者を 2 群に分けて行った結果を図 3 に示す。「不安解消群」では“放射線”“放射能”“影響”や“情報”“テレビ”“状況”などがそれぞれひとつの話題の発話中に共起しているのに対し、「不安継続群」では、“放射能”“影響”“避難”“情報”が共に語られ、“放射線”は“高い”“線量”などと共に語られることが多いという特徴があることが分かる。

上記のように、現在の放射線影響に対する不安の有無により発話における傾向が異なることから、インタビュー対象者を「不安継続群」と「不安解消群」に分けて 2 パターンの受け手メンタルモデルを作成することとした。「不安継続群」と「不安解消群」の基本的属性は表 6 の通りであ

る。

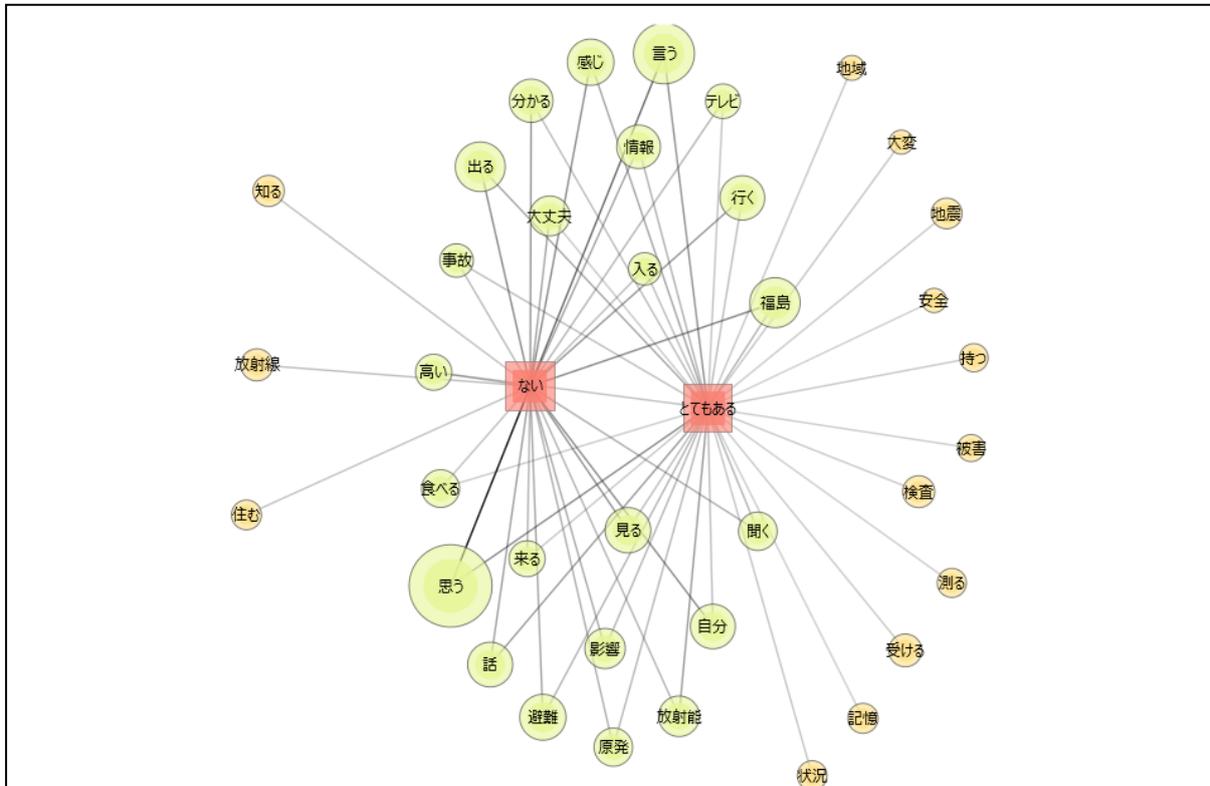


図2 不安の有無と頻出語の共起ネットワーク

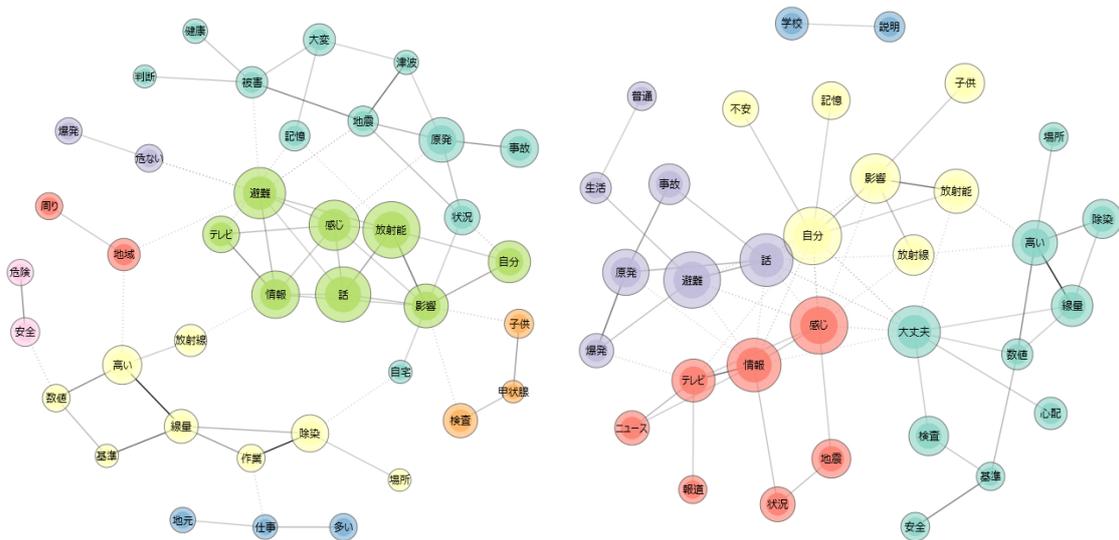


図3 不安の有無による2群の頻出語共起ネットワーク(左:不安継続群/右:不安解消群)

表6 各群の対象者の属性

	不安継続群 (n=10)	不安解消群 (n=37)
平均年齢	50.7 歳	39.9 歳
性別	男性 7 / 女性 3	男性 17 名 / 女性 20 名
当時の居住地	浜通り 2 / 中通り 5 / 会津 3	浜通り 12 / 中通り 19 / 会津 5 / 県外 1
現在の居住地	福島県内 5 / 県外 5	福島県内 26 / 県外 11

III 研究結果

インタビュー対象者を不安解消群と継続群に分け、それぞれの発話内容を3名のコーダーによりテキスト分析した。本研究が採用するメンタルモデル・アプローチでは、発話データのうち知識（①テキストや専門家から学ぶ内容、②自分の体験や他者の経験を直接聞くことにより得た内容、③第三者からの噂や伝聞、誤解や間違い、科学的に不正確な内容を含む）に焦点を当て、先行して作成した専門家モデルのキーとなる知識カテゴリを用いて整理する。ただし、専門家モデルに含まれない知識や、知識カテゴリ間のつながりが専門家モデルと異なる場合、原則として発話データの流れを保持する形で整理する。

ここでは、専門家モデルの知識カテゴリをベースとして、おおよそ「発生源」「線量測定」「環境動態・環境影響」「健康影響」「検診・治療」「除染」「政策」の9つにカテゴリ分けして、不安解消群と継続群の知識を整理した。3名のコーダーがそれぞれ2～3カテゴリについて一次分類をし、その後3名で分類を確認し、適宜修正しながら知識図にまとめた。語数が多いため、不安解消群および継続群の全体図は巻末資料を参照いただきたい。

以下では、まず不安解消群と不安継続群のメンタルモデルの特徴を、知識カテゴリ毎に整理して報告する。次に、今後の情報提供方を検討する上で様々な示唆を得られると考えられる、情報提供や風評被害、政策に関する発話内容を整理する。最後に、次年度調査設計の基礎となる受け手モデルと専門家モデルの特徴の比較について報告する。

1) 不安解消群と不安継続群の特徴

ここでは、インタビュー対象者を不安解消群と不安継続群に分けて作成した2種類のメンタルモデルについて、知識カテゴリごとに今後検証する仮説として特徴的な点を考察する。詳細な相違は表にまとめて巻末資料とした。本文では、該当するメンタルモデル図を示しながら主な相違について報告する。

①知識カテゴリ：爆発（専門家モデル：①発生源である福島第一原子力発電所事故）

専門家モデルでは、原子力発電所事故とそこから放出された物質というまとまりで知識カテゴリを形成しているが、その内容に該当するものが受け手モデルでは「爆発」と「物質」というキーワードで構成されている。知識カテゴリの相当する受け手メンタルモデルを図4に示す。図の左側が不安継続群、右側が不安解消群の内容である。

事故当時はとても不安があったと事前調査に回答した人が多かった（46名中33名が「とてもある」、9名が「ややある」と回答）ことから分かるように、爆発後の事故進展や避難に対しては不安継続群と不安解消群とで同じような不安に関する発話が多い。原子力発電書の爆発する映像をテレビニュースで見たことや、その後の避難指示に関する情報、「直ちに影響はありません」と

いう政府の記者会見については、両群で言及されている。他方で、放出された物質についての知識の発話の種類は差がみられる。「セシウム」「ヨウ素」「半減期」などの知識は共通しているが、それらに関する更に詳細な知識（科学的に正確でない内容を含む）は、不安解消群において多い。不安解消群のサンプルが継続群よりも多いために発話内容のバラエティも不安解消群が多くなっており、その影響は排除できない。しかし一方で、この差が、事故直後の制約がある状態で得た情報内容がその後更新されたかどうか（実際に、自分で調べようとはしてないという発話もあった）によって生じた可能性も考えられる。

②知識カテゴリ：放射線量（専門家モデル：②線量測定、③被ばく線量評価：実効線量）

専門家モデルにおいては、知識カテゴリの②と③はそれぞれ独立した知識のまとまりとして存在するが、受け手インタビューではこれらは放射線量に関するひとつのまとまりとして発話されており、受け手モデルもそれが反映されている。図5に不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の該当箇所を示す。図の読み方は、図4と同様である。

不安継続群と不安解消群では、圧倒的に、自身の経験的に得た知識に関する発話の量と種類に違いがみられる（図5の右側の黄色地のノードの多さ）。「シーベルト」「モニタリングポスト」「空間線量」「放射線治療」「CT」などは両群に共通して言及されているが、自分で線量計を用いて「天井の方が床より高い」「排水溝や雨樋が高い」などの経験による知識は、不安解消群で多く言及されている。

健康に関するリスクコミュニケーションでは、自ら経験したり能動的に得たりした知識は受動的なものよりリスクを低く認知するとされており、この経験の違いが不安解消に寄与した可能性は高い。ただし、不安解消群には福島県内の浜通り・中通りの居住者が多く含まれており、この違いが、不安解消群のサンプル数の多さや居住地等によるバイアスを除いても検証が可能かどうかは定量的な確認が必要である。

また両群において、放射線量の数値が示されても、「それが高いのか低いのか判断基準がない、分からない」という数値の意味の理解が困難であったことが言及されており、今後の情報提供においても検討すべき指摘である。

③知識カテゴリ：健康影響・調査（専門家モデル：④健康影響、⑤検診・治療）

専門家モデルにおいては、知識カテゴリの④と⑤はそれぞれ独立した知識のまとまりとして存在するが、受け手インタビューではこれらは健康影響に関するひとつのまとまりとして発話されており、受け手モデルにもそれが反映されている。図6に不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の該当箇所を示す。

どちらの群においても、知識カテゴリの基本的な構成要素は同じであり、「漠然と何か身体への悪影響がある」「子供の方が影響を受けやすい」「甲状腺」「がん」「白血病」「線量が高いと死ぬ」に関する知識の発話を得られた。それぞれについての詳細な知識は不安解消群の方が多いものの、健康影響について、どちらかのみ特有の専門知識がある、あるいは伝聞による誤った知識を持っているという偏りはみられない。

また両群で、甲状腺にたまりやすい、長い間かけて発症するなどの知識が、体内に「蓄積される」という知識と結びついて、健康影響への懸念を強めていると考えられる発話もみられた。逆に、「排出される」という発話もあり、放射性物質を減らす、排せつをよくする食べ物をとるなど

の自分でできる対策につながっていた。この発話は不安解消群に多く¹、健康管理に対する自己効力感を高めた可能性がある。両者の違いの検証は不安解消の1つの示唆となり得る。

¹ 不安継続群でも、「味噌汁とか塩分を取ると体外に排出されるから大丈夫」という専門家の説明を聞いたことがあるという発話があったものの、自分で対策として実践したというものではなかった。

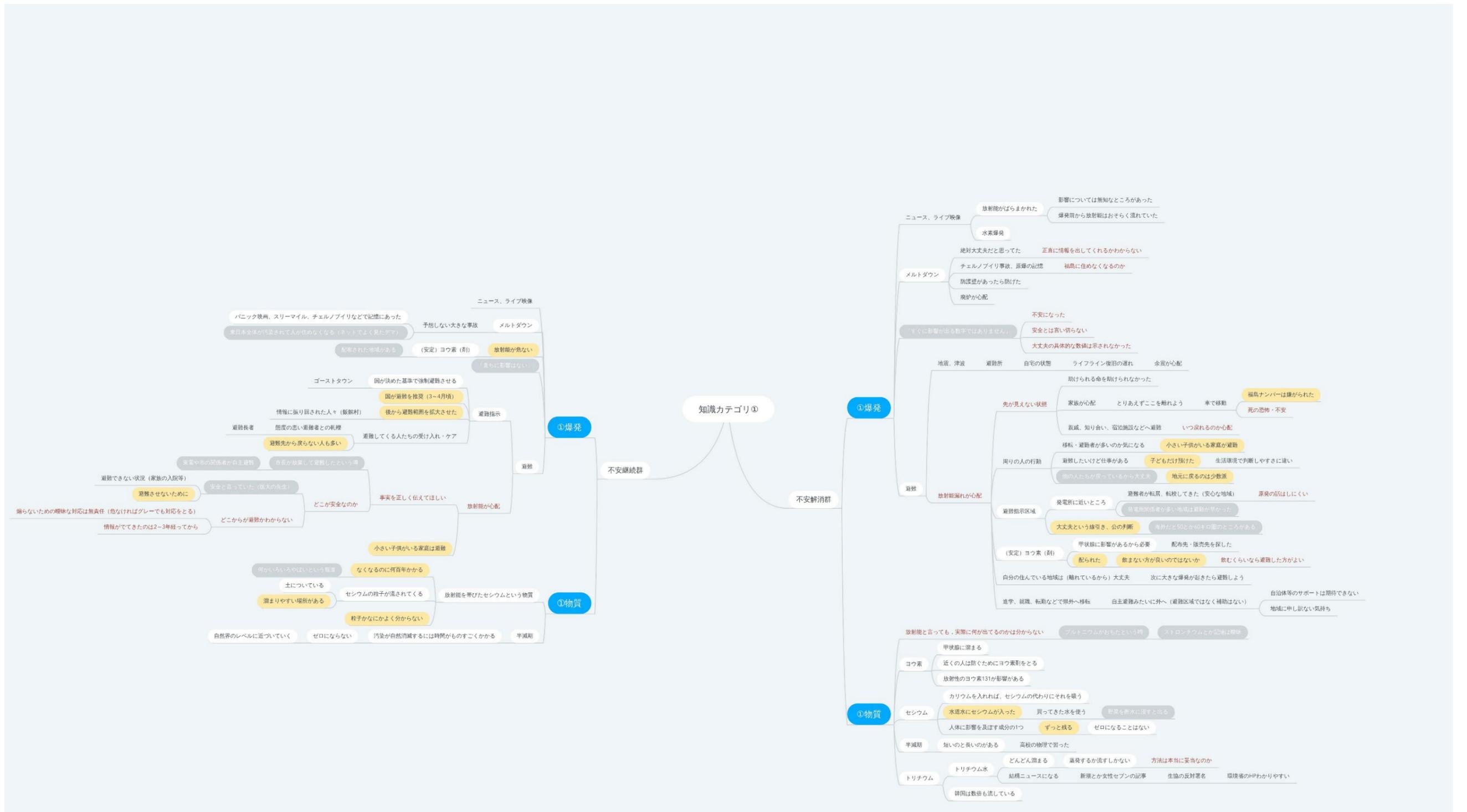


図4 不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の知識カテゴリ[爆発]

*図中の青地に白抜き文字のノードが知識カテゴリのキーワードを意味する

*白地に黒文字は、専門家やニュースメディア等から得た知識、黄色地に黒文字は自分が経験した・経験した他者から直接見聞きした知識、灰地に白抜き文字は、伝聞や噂、赤文字は、情報提供に対する不満や課題についての発話

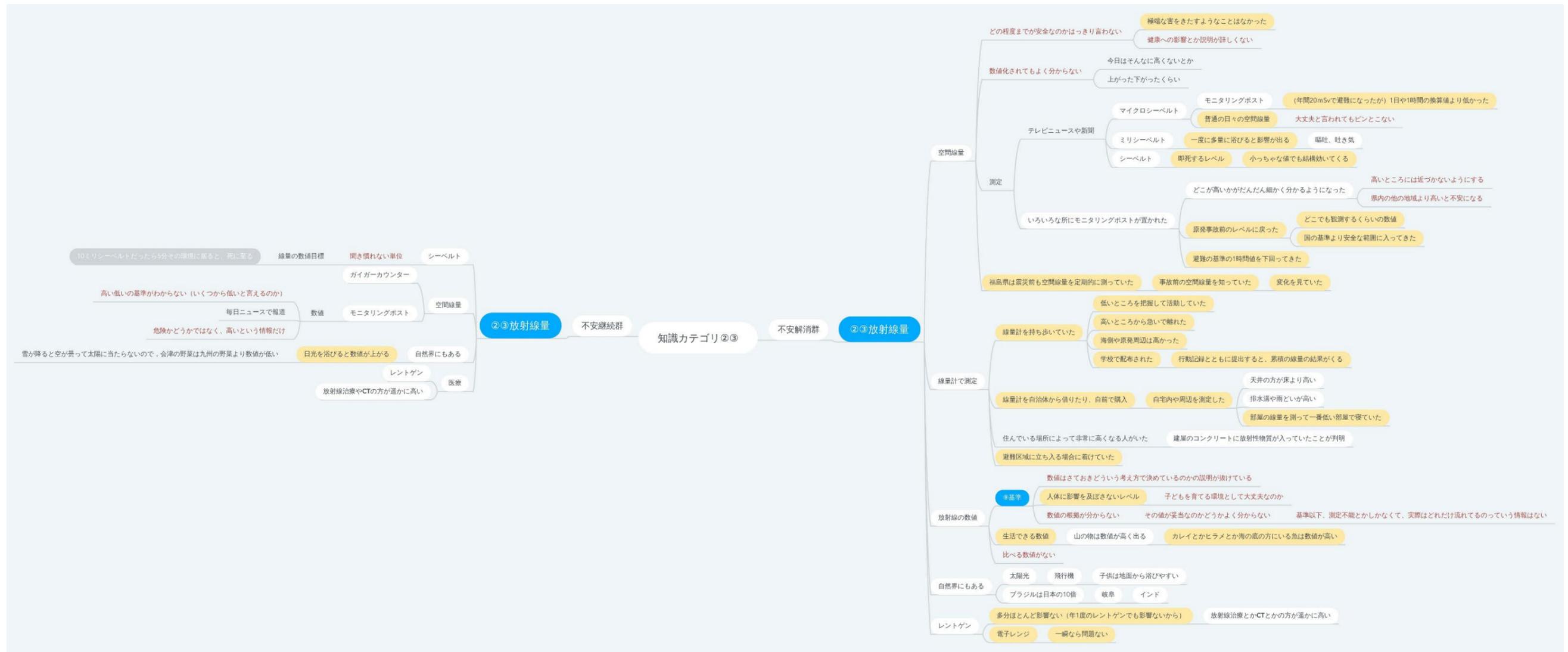


図5 不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の知識カテゴリ[放射線量]

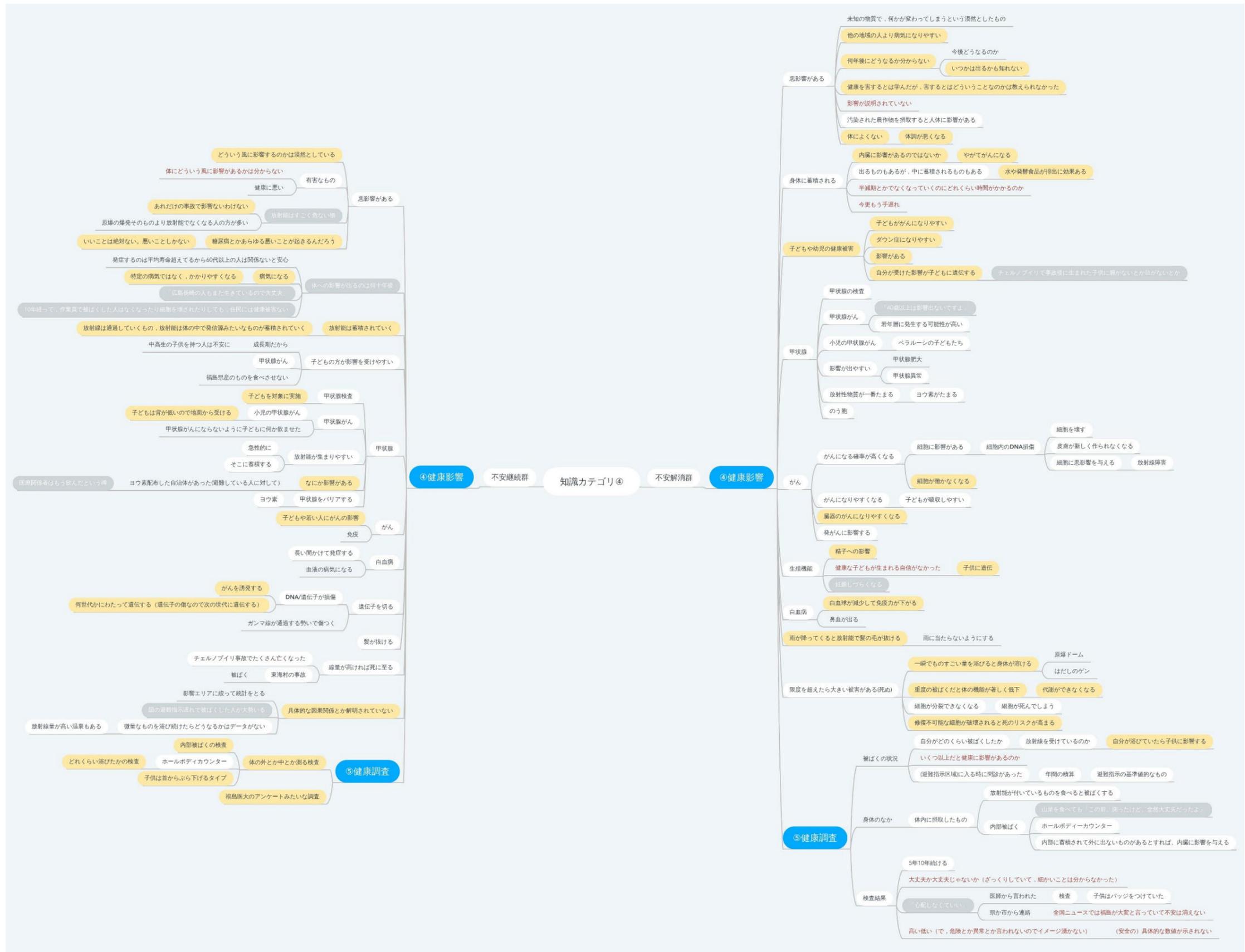


図6 不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の知識カテゴリ[健康影響・調査]

健康調査に関して、甲状腺検査や内部被ばく検査については両群で多数の発話があったものの、不安解消群では検査結果に多く言及していた。不安解消群では、医師や自治体から「心配しなくていい」と言われ安心につながったというものもあったが、必ずしもそれだけではなく、ざっくりした説明で細かいことはわからなかったなど検査結果の説明を受けても不安は消えないという発話もあった。

④知識カテゴリ：放射能の広がり（専門家モデル：⑥環境動態、⑦環境影響）

専門家モデルでは、事故により放出された放射性物質が物質ごとに環境中にどのように移動するのか、それが山林や河川、人の居住する地域、海などの環境にどのように存在し、影響を及ぼすのかが⑥環境動態と⑦環境影響として、それぞれまとまった知識のカテゴリとして存在する。一方受け手モデルでは、事故により放出された放射能が風に乗って広がり、それが山や河や農地や海に落ちて生活環境に入り、土に付いたり空気中に漂ったりしているものが、人の身体に付いたり食べ物にくっついて体内に入ったりする、というひとまとまりの知識構造になっている。受け手モデルの該当する部分を図7に示す。

どちらの群においても、知識カテゴリの基本的な構成要素は同じであり、「風に乗って拡散した」「風向き」「空気中に漂っている」「水道水」「土に付いている」「農作物への影響」「海の汚染」に関する知識の発話を得られた。それぞれについての詳細な知識は不安解消群の方が多く、風に乗った放射能が「流れ」たり「たまった」り、雨により放射能が高くなったり低くなったりしたことを自分で計測して確認している。水道水については「井戸水は安心という説明があった」、空気中に漂っている放射能について「山が防いでくれる（風に乗った放射能が町に流れてくる手前にある山で落ちたため）」、キノコや山菜の線量は高いが「毎日食べなければ良い」等の言及があった。不安継続群の方が言及の多い内容もあり、「今も発電所から（放射能が）出続けている」「被ばくしても目に見えない」「窓を閉めても放射能が入ってくる」、といった空気中の放射能に関する言及が多い。

不安継続群と不安解消群では、汚染された食品を口にすることによる被ばく、体内への蓄積について、基本的な知識は共通しているが、健康影響の知識カテゴリで既述したように、汚染された食品について「取り入れる量を減らす」「排出をよくする」ために実践をしたという発話が不安解消群に特徴的であった。不安解消群では個人としてできる対策について「自分で判断して食べる」「子どもには食べさせない」「ジャガイモの皮を厚くむく」「アユの内臓は食べない」「生魚は食べない」等の多様な発話があった（図7の右下ピンクの囲み）。

不安解消群には、避難指示が出ていた区域に帰還した人や、自主避難から戻った人も多く含まれており、生活の中で自ら調べたり工夫したり、行政や市民活動団体からの支援や情報提供を多く経験している。他方、不安継続群には対策を取る必要を感じない環境で生活してきた人々も含まれており、特に10年の間に進学や就職などで県外に出た人は情報量が少なく、個人で出来る対策や福島県産の農産物の検査結果などについての知識が更新されにくかった（本人に情報取得の余裕がなかったことと、地元情報が届きにくくなることの両方が言及された）。また、事故当時、学齢期だった若い世代は、状況を十分に理解ができておらず、学校でも原子力発電所事故や対策への説明や教育を受けていないケースも多かった。これらの情報更新や経験の機会の多少の違いが、2群間の知識量と内容の違いに反映されていると考えられる。

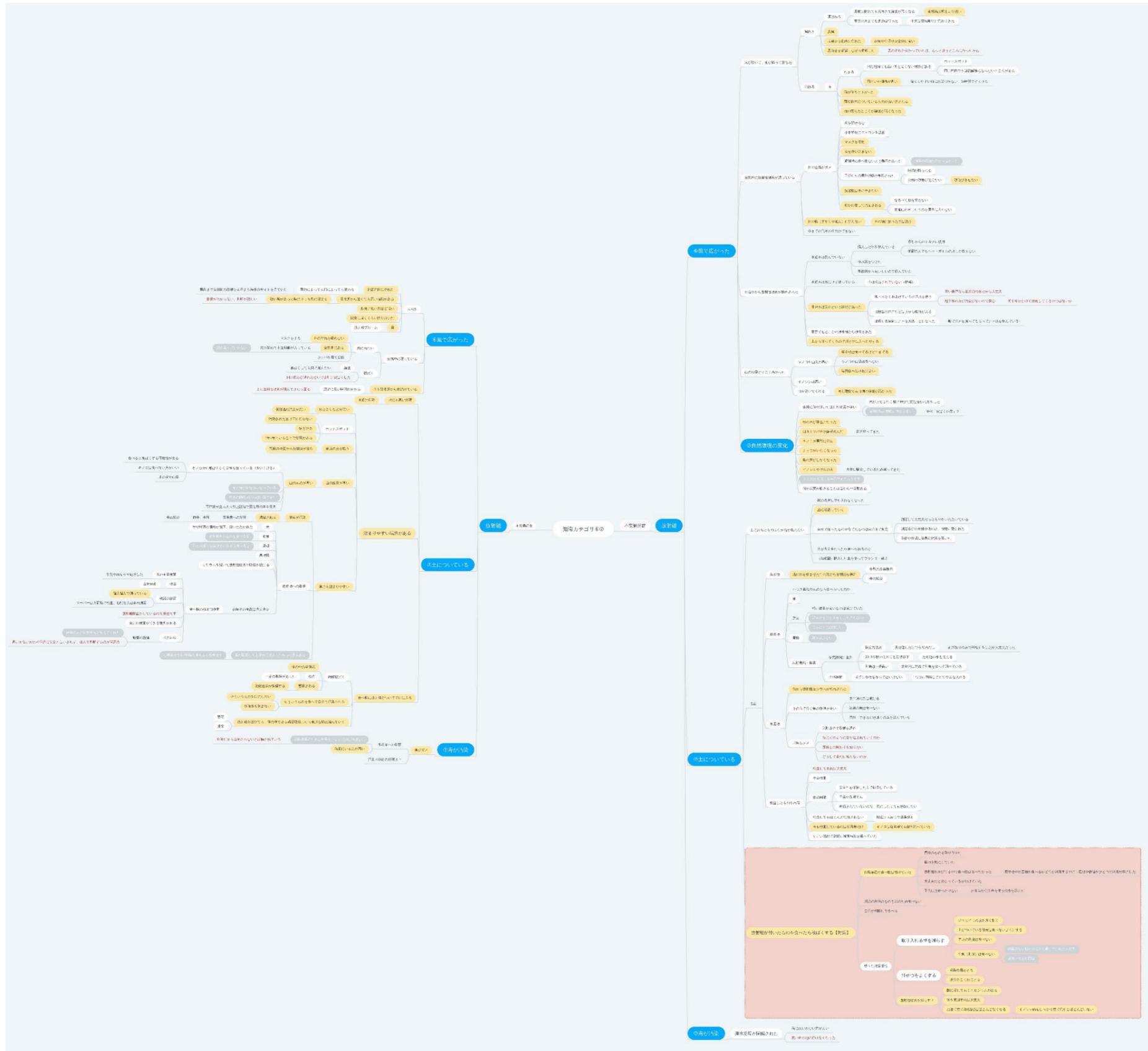


図7 不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の知識カテゴリ[放射能の広がり]

④知識カテゴリ：除染（専門家モデル：⑧除染）

除染については、専門家モデルと同様、受け手モデルでも除染の方法と効果についての知識がまとまりとして整理できた。該当する受け手モデルを図8に示す。

除染対象地域や方法については、不安解消群と継続群でほとんど違いはなく、「洗浄」「土の剥ぎ取り」「除染土の仮置き」「中間貯蔵施設」「未実施の場所」等の知識が言及された。2群間で違いが見られるのは、除染方法の詳しさと除染の効果についての知識であり、不安解消群は事故後生活の中で自宅や職場の除染を経験している人、農業を継続・再開する人が複数名含まれているため、田畑の除染方法や除染の効果について経験値が多いことによる。不安継続群では、除染の効果について言及がなかった。

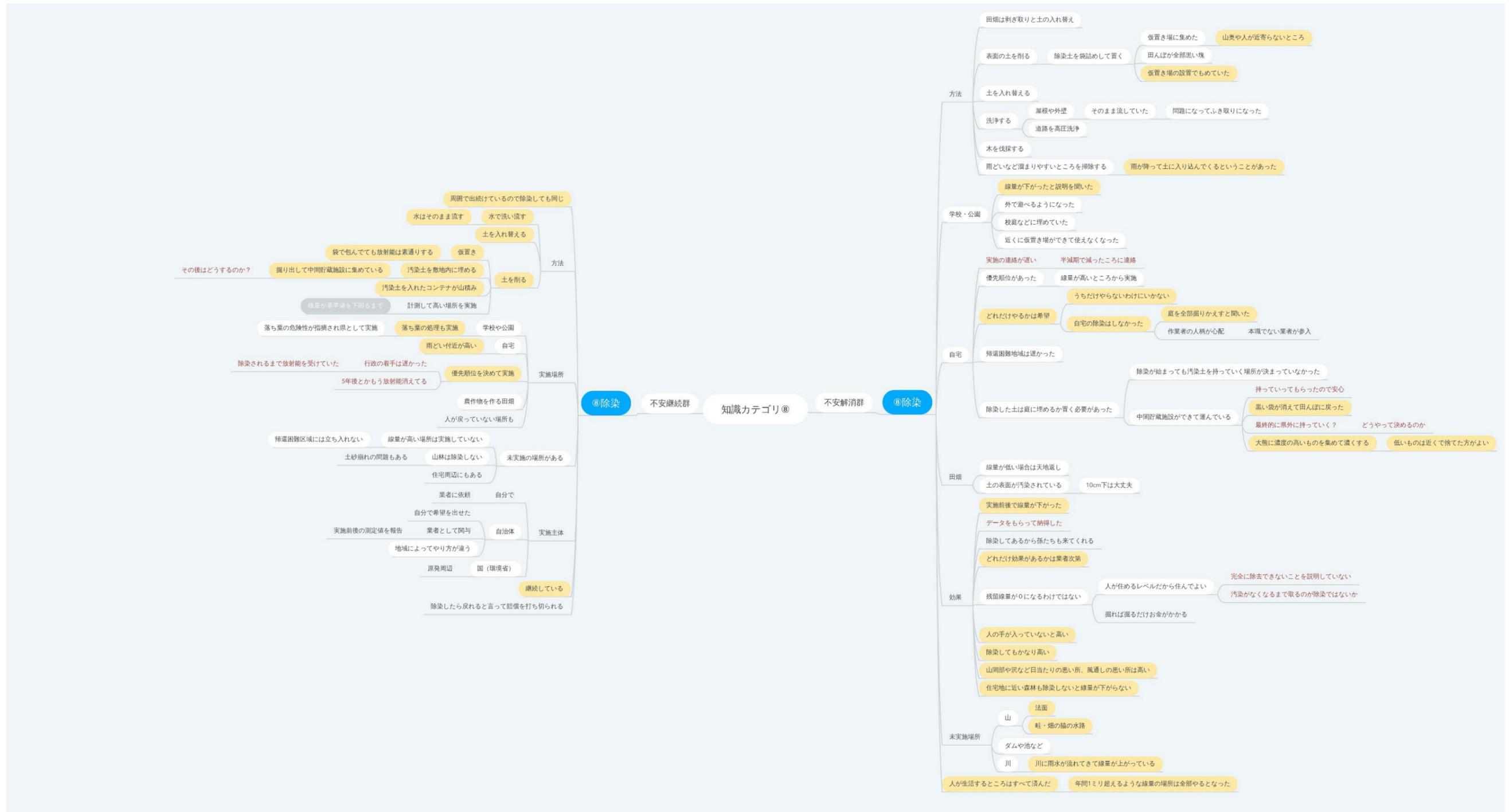


図8 不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の知識カテゴリ[除染]

⑤知識カテゴリ：基準値（専門家モデル：該当なし）

基準値については、専門家モデルでは知識カテゴリとして独立して存在していない。これは、専門家モデルを作成するためのインタビューにおいて、放射線防護、実効線量、環境動態、健康影響の各専門分野でそれぞれの専門家の視点から関連の強い基準値のみについて言及され、基準値についての専門家インタビューでは、政策や各カテゴリの知識なしでは説明・理解が困難であり、専門家の知識要素として基準値だけで独立したひとつのまとまりとならなかったためである（2020年度報告書詳細版）。

受け手モデルでは、発話の整理から、人々が日常生活の様々な場面で「基準（値）」に接し、その都度「安全だという基準」「住んでよい／よくない」「出荷してよい／よくない」を分ける指標として大まかに理解していることが示されたため、ひとつの知識カテゴリとして構成した。該当する受け手モデルの箇所を図9に示す。

図9に示す通り、不安継続群と比較して、不安解消群で言及される知識、特に経験知が多い。避難、除染、農作物の出荷に基準値（数値）があり、単位が複数あることは両群で共通して認識されている。基準値を超えると避難や出荷停止などの措置がとられるため、それ以下であれば大丈夫だという数値だと理解されている。詳細・具体的な知識は不安解消群で多く言及されており、「食べ物や行って良い場所の基準」「基準値以下と言っても含まれている」「1年間に換算すると健康影響は直ちに生じないレベル」「それでも高い・通常だったらあり得ないレベル」「かなり安全側に見ている」「国際的に厳しい基準」「避難区域に設定されていないということは大丈夫」など、様々な知識が述べられている。

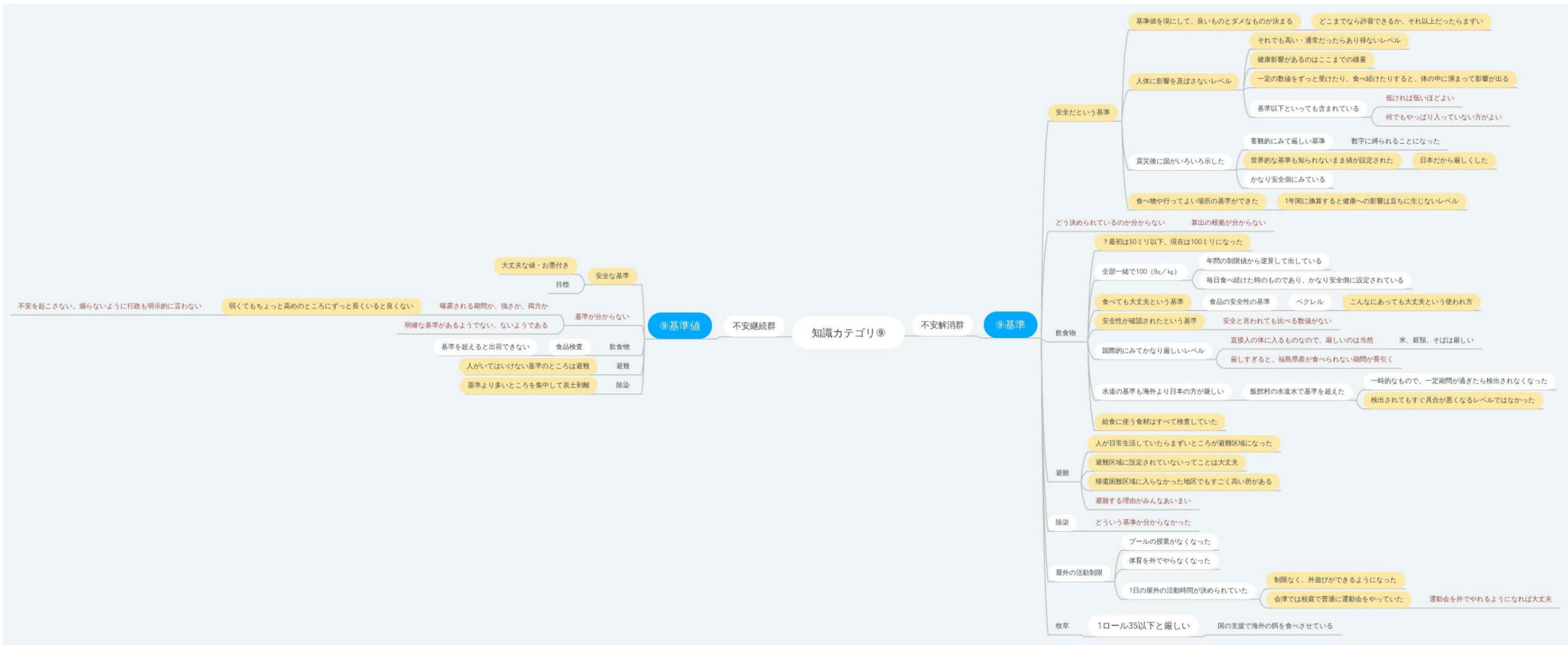


図9 不安解消群と不安継続群のメンタルモデル案の知識カテゴリ[基準値]

2) 情報提供方策の提案に関わる発話分析：発話データ全体

ここでは、今後の情報提供方策を検討する上での示唆となり得る情報提供に関わる経験、情報提供の内容や方法に対する意見や不満、提案をまとめる。なお、不安の高低にかかわらずインタビュー対象者すべての発言を集計している。

① 情報提供に関わる発言

表 7 に示す通り、事故当時の混乱状況を反映して、情報の量的質的不足や発信の遅れ、国等の情報提供不足を補うための多様な情報源の活用、様々な情報源に対する評価に関する発言があった（表中の数値は主だったものの件数で合計は一致しない）。個別の発言の詳細については添付資料を参照いただきたい。

表7 情報提供に関わる発言の集計

(件)

情報全般について	59
情報不足	10
あいまいな情報	14
現状の情報発信不足	7
情報源について	45
テレビ	9
職場や業務上の口コミ	12
説明会	5
ネット情報（混乱したとの発言も含む）	5
情報の遅れ（特に放射性物質の拡散状況や事故の進展など）	26
分からなかった情報	65
数値の意味	20
将来何が起きうるのか、何が起きうるのか	12
どこまで避難すべきか	8
知りたかった事柄	24
1F周辺や戻る基準、健康被害、現状（将来の問題も含む）	
隠されていた情報（特に SPEEDI の情報に関するもの）	20
役立てている情報（放射線量の情報や健康への影響に関するもの）	16
東京電力の情報に対する疑問や不信感	30
専門家の情報に対する評価（問題点も含む）	16
学校教育での学習経験など（経験ありは4件）	13
不安になった情報	32
不安が軽減した情報	42
気にしている情報	21
提供すべき情報	30
情報提供方法の提案	25
事前の知識に関する言及	25
情報に関連した風評被害に関する言及	24
情報を集めていない、大丈夫と判断した理由など	27
復興に関する疑問、情報発信すべきこと	11

情報に関する発言として分類したのは、684件であった。放射性物質の拡散情報の提供が遅かったこと、数値の意味が十分説明されなかったこと、対策についての情報が得られなかったことは不安要因となり、一方で、放射線量の変化や10年間健康被害が出ていないという現実には不安を軽減する情報になっている。こうした経験を踏まえて、どのような情報をどのようにして提供すべきかという提案が示されている。懸念すべきは、東京電力の情報発信に対する不信感である。事

故直後の情報提供の遅さ、特に SPEEDI 情報を東京電力が隠ぺいしたと考えている人が多い。また、最近も放射性廃棄物の管理や処理水問題でも情報提供の問題が発生したと認識されており、信頼は低下したままとなっている。

②風評被害に関わる発言

全体で 237 件の発言のうち、最も多いのは、偏見や差別に関する心理的な影響であった（表 8）。特に、若い世代では、福島の話をするのを躊躇する気持ちが強い。一方で、直接経験した人は少なく、むしろ報道等による伝聞から、県外の人々からの見られ方を気にしていた。次いで多かったのは、農作物を中心とする福島県産の市場が回復していない実態についての発言である。少数ではあるが、自分自身も福島県産を避けていることに対する申し訳なさを述べる参加者もいた。水産業に関する言及は、処理水放出問題と関連して発言が出ている。こうした風評問題の元凶や解決方法として情報発信に関する提案が寄せられている。中には、本来首都圏の電力需要を賄うための発電所の事故に対して、首都圏の人々が福島県産品を避けることへの憤りがあった。ただし、放射能による健康影響を心配する気持ちへの理解を示す発言もあった。

差別や偏見	74
いやな経験あり	18
「経験した」という報道やうわさを聞いた	13
申し訳なさや躊躇する気持ち、躊躇の経験	28
自分の経験はない	15
風評の実態	43
農産物から観光までの影響の実態	32
未だに継続	11
回復してきている	11
トリチウム処理水放出への懸念	13
避難者と残った人たちとの乖離、対話のしにくさ	17
風評の原因は情報提供不足や偏った理解	14
懸念する気持ちを認める態度	7

③今後の政策や環境省等への要望事項

政策に関連した発言は 261 件あり、最も多いのは復興の在り方や遅れ、福島県や浜通りの現状を指摘する発言である。次いで、トリチウム処理水の放出問題に関する言及が多い（表 9）。これは特に、不安解消群でも多いことが特徴である。関連して、福島第一原子力発電所の廃炉に多大な時間がかかり、計画が遅れていること、除染廃棄物問題の解決が見通せないことを懸念する発言が出ている。指摘は 3 件であるが、廃炉を担う東京電力への不信感も示されている。

政府への要望としては、長期的な健康影響を調査すること、今回の事故の教訓を明らかにし改善すること、エネルギー政策の見直しなどが挙げられている。環境省に対しては、「福島に対して何をしてくれるのか、よく分からない」との厳しい意見に加え、具体的には、

☆ 環境省は川の砂をとって、自然産卵ができる環境を整えてほしい（国の再建は元に戻すこ

としかしない)

- ◇ 土が流れないように置いてある土嚢袋の素材がナイロンで、草刈をする際に絡まってしまう
- ◇ 環境省は目先の除染だけでなく、双葉郡の人への精神的なケアをするべきが挙げられた。

表9 今後の政策や環境省等への要望の集計 (件)

漁業問題と処理水放出	38
漁業への影響を懸念	28
処理水放出の合意形成（現地の声をよく聞いて決める）	10
復興の課題	60
人口（若い人）が戻らない	15
復興の遅れや対策	45
廃炉・除染廃棄物問題	34
廃炉の長期化や遅れ	23
除染廃棄物の今後	11
情報発信の課題	16
賠償による地域の分断や対立・軋轢	17
政府・専門家への要望	29
長期的な健康影響の調査	10
緊急時対策の見直し	7
専門家活用	5
教訓の整理と反映	7
エネルギー政策の見直し	9

3) 専門家モデルと受け手モデルの特徴

受け手（不安解消群と不安継続群をあわせて）の発話内容について、インタビュー手順のベースとした専門家モデルの知識カテゴリを用いてマッピングしたものを図10に示す。専門家メンタルモデルと受け手メンタルモデルの特徴および相違点について、知識カテゴリごとに概要をまとめ、表10～表14に整理した。

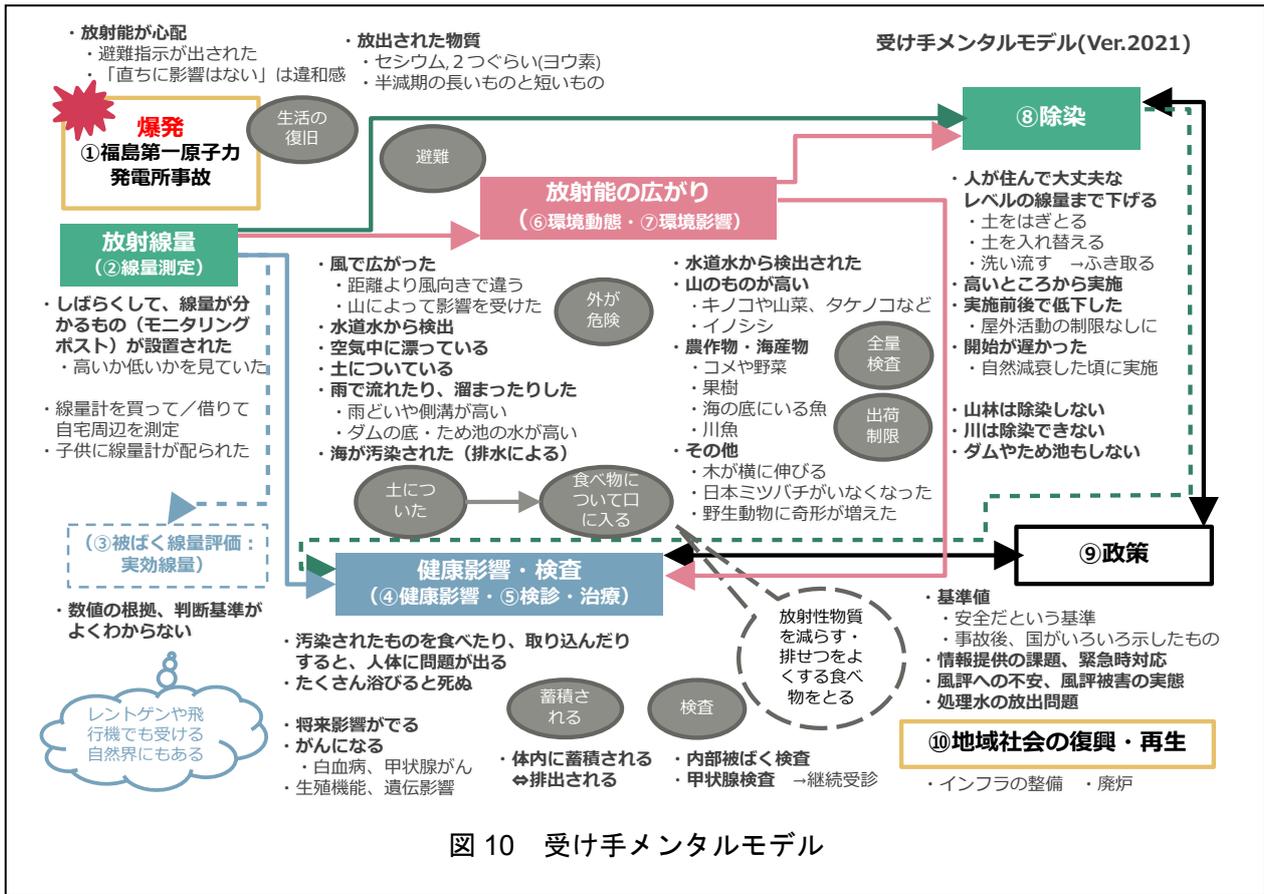


図 10 受け手メンタルモデル

知識カテゴリ① 発生源である福島第一原子力発電所事故 (表 10)

知識カテゴリ①について、専門家と受け手の両モデルの特徴を表10にまとめた。専門家モデルでは、放射性物質の発生源となる福島第一原子力発電所事故において放出された放射性物質、およびその基本的な化学的物物理的特性に関する情報が含まれる。他方、受け手インタビューからは、自然災害後の生活復旧という認知制約がある状況下で、この問題の情報が伝えられ、単なる「知識」ではなく、緊急事態に役立つ情報が必要とされた点に乖離が生じている。

2011年の被災当時、人々は、地震と津波、その後の停電や断水、家の片付け、物流停止に対応する中で、突然テレビで福島第一原子力発電所が爆発する映像を見ており、その情報のみに注視していられた状況ではなかった。その中で、水素爆発が起きて放射能が漏れたことへの恐怖、メルトダウンという予想しなかった大きな事故へ進展したこと、繰り返された「直ちに影響がない」という説明へ違和感があったこと、また、汚染の状況は伝えられず、何が起きたか、何をすればよいか分からなかったという発話が多数あった。また、避難指示が出た地域もある中で、周りの人々の様子や、先が見えない中で自らがどのような行動をとったか、殆どの方がその当時の不安な心情を語った。

放出された物質については、人体に影響を及ぼす放射能をおびた物質、ガスや粒子状のもの、セシウムという物質名、半減期の長いものと短いものがあるという専門家モデルの知識は言及された。セシウムは半減期が長いので、ずっと残る、ゼロにならないと認識されていた。ヨウ素に

については甲状腺に溜まること、そして、安定ヨウ素剤の服用・避難時の入手への言及もあった。また、最近よくニュースで見る問題として、トリチウムという物質名と、処理方法についても複数の発話があった。

この知識カテゴリにおける専門家モデルとの違いは、知識の有無だけでなく、置かれた状況による認知制約の影響が大きい。福島県の人々は地震や津波による生活復旧という危機（クライシス）の状態の中で、新たな緊急事態に直面²し、限られた情報の中で避難などの判断や対応をすることになった。だが、緊急事態に直面した人々にとって役立った知識や情報についての発話は殆どなく、記憶されていたのはメディアのライブ映像と「直ちに影響がない」というメッセージ、避難にまつわる噂（関係者は早期に避難した、避難させないために影響がないと言っているなど）であり、対応の不足を浮き彫りにした。

表10 発生源に関わる知識の違い

共通する知識	人体に影響を及ぼす放射能をおびた物質、ガスや粒子状のもの、セシウムという物質名、半減期の長いものと短いものがある セシウムは半減期が長いので、ずっと残る、ゼロにならない ヨウ素については甲状腺に溜まる 対策として安定ヨウ素剤を服用 トリチウム
専門家だけの知識や情報	放出された放射性物質および基本的な化学的・物理的特性
市民だけの知識や経験	爆発映像 直ちに影響がない 避難にまつわる様々な噂

知識カテゴリ② 線量測定（表11）

専門家モデルでは、ヒトの放射線防護を考えるうえで最優先となる環境中の放射線の空間線量率の測定に関する情報が含まれる。受け手インタビューでは、テレビや新聞で各地の放射線量が伝えられるようになり、当初はどこにあるか分からなかった放射性物質も、測定（モニタリングポスト、線量計など）が進むにしたがって、福島第一原子力発電所から北西方向に汚染が広がったこと、線量計で測定することで生活環境の中でも放射性物質が溜まりやすい場所がある状況が徐々に把握された。放射線の数値に関しては、モニタリングポストが設置された場所、表示されていた空間線量、馴染みのない単位であるシーベルトが使われていた、という知識に関する発話があった。空間線量については数値化されても基準がよくわからない、今日は上がったか下がったか程度の理解だったという発話が多い。

他方で、自身の経験知として、子どもに首から掲げる線量計やバッジ等が配られ、日常生活の中での放射線量の測定が行われていた、線量計を持ち歩き、高いところ低いところを把握して行動するなどの対策も言及された。安全基準や除染の目安として1ミリシーベルト（年間追加被ばく

² 危機（crisis）は何らかのプロセスの後に発生し、緊急事態（emergency）は予期せぬ状況に直面して対処が必要な状態（ラングレン・マクマキン著、神里訳『リスクコミュニケーション標準マニュアル』での区分を参照）。

線量)という数値は記憶されているものの、単位については、大量に浴びると影響がでるレベル(シーベルト、ミリシーベルト)と、日々の空間線量のレベル(マイクロシーベルト)で分けて理解する発話も複数あり、量とばく露期間、影響との関係は理解されにくいものと推測される

また、少数ではあるものの、線量が高いところがわかっていたにも関わらずSPEEDIが公開されなかったという誤解が生じていることもわかった。

専門家モデルとは基本的な知識として重なる部分も多く、特に、モニタリングポスト等の数値を日々確認する、測定するという経験を重ねる中で蓄積された知識や、どこが線量が高いかという理解は共有されやすい。他方で、単位の意味や数値それ自体は理解されておらず、あるいは自分なりに理解した知識の発話はあるものの、専門家の知識とは乖離がみられた。

表11 線量測定に関わる知識の違い

共通する知識	測定(モニタリングポスト、線量計など)が進むにしたがって、福島第一原子力発電所から北西方向に汚染が広がったことが分かった 放射性物質が溜まりやすい場所がある モニタリングポストで線量がシーベルトで表示される 測定するという経験を重ねる中で蓄積された知識や、どこが線量が高い線量計で被ばく線量を測定する(子どもに首から提げる線量計やバッジ等が配られ、日常生活の中での放射線量の測定が行われた) 基準は、年間1ミリシーベルト
専門家だけの知識や情報	ヒトの放射線防護を考えるうえで最優先となるのは、環境中の放射線の空間線量率の測定 目安として1ミリシーベルト(年間追加被ばく線量)
市民だけの知識や経験	テレビや新聞で各地の放射線量が伝えられるようになった 当初はどこにあるか分からなかった モニタリングポストが設置された場所 表示されていた空間線量 馴染みのない単位 数値化されても基準がよくわからない、今日は上がったか下がったか程度の理解 線量計を持ち歩き、高いところ低いところを把握して行動する 大量に浴びると影響がでるレベル(シーベルト、ミリシーベルト)と、日々の空間線量のレベル(マイクロシーベルト)

知識カテゴリ③ 被ばく線量評価：実効線量(表12)

専門家モデルでは、ヒトの健康影響を評価するために必要な実効線量をどのように計算するのかについての情報が含まれる。受け手インタビューでは、線量による影響を知りたいという知識欲は共通しているものの、被ばく線量評価や実効線量というモデルを用いて人体の被ばく線量が評価されているという知識には言及されなかった。このため、放射線の数値に対して、基準値はどのような値か、妥当なのかについて「分からない」、どのような考え方で決めているのか説明されて

ないと発話されている。

後述するように、被ばく経路として汚染した食品の摂取が健康に影響を及ぼすという発話が多く、関連して身体に蓄積されることや、内部被ばくという専門用語を使った発話が複数あった。外部被ばくの発話はなく、内部被ばくの影響が強く懸念されている点は専門家モデルと大きく異なった。被ばく線量に関して、健康影響の知識カテゴリに記載するように、殆どの方が何らかの悪影響はあると発話し、線量が高ければ死に至り、微量なものでも蓄積性があれば長期的に浴び続けると悪影響があるという懸念が読み取れた。

また、自然界にもあること（インドやブラジル、岐阜などの高線量地域、飛行機など）、レントゲンや放射線治療など医療での線量の方が高いことなどの知識は多く言及された。自然放射線や医療などで浴びる放射線の量と、事故による放射線の量の相対的な関係が認識されていた（表12）。

表12 被ばく線量評価（実効線量）に関わる知識の違い

共通する知識	自然界にもあること（インドやブラジル、岐阜などの高線量地域、飛行機など） レントゲンや放射線治療など医療での線量の方が高い 被ばく線量が高ければ健康に重大な影響を及ぼす
専門家みの知識や情報	ヒトの健康影響を評価するために必要な実効線量をどのように計算するのか 外部被ばくと内部被ばくを評価 内部被ばくより外部被ばくが問題 微量な被ばく線量の影響は（あるかどうか）分からない
市民みの知識や経験	放射線の数値に対して、基準値はどういう値か、妥当なのかについて分からない どういう考え方で決めているのか説明されてない 汚染した食品の摂取が健康に影響を及ぼす（内部被ばくのみを懸念） 被ばくより何等かの影響がある 微量でも蓄積性があれば長期的に浴びると悪影響がある

知識カテゴリ④ 健康影響（表13）

専門家モデルでは、確定的影響および確率的影響、広島・長崎の被爆者臨床データの知見、メンタルヘルスへの影響等の情報が含まれる。受け手インタビューでは、汚染されたものを食べたり、取り込んだりすると、人体に有害であるという理解から、「10年後20年後になにか影響が出てくる」という漠然とした発話からスタートし、具体的に知っていることをたずねると、「がん」「(子供の)甲状腺のがん」「白血病」が多くでてきた。殆どの人から、子どもへ影響が大きいことを懸念する発話がある（逆に、高齢者は関係ないという発話もある）。妊娠・出産を考える時に、不妊や、胎児への影響を懸念する発話が出てくる。遺伝子を損傷するという発話に加え、子供に遺伝するという発話もあった。

また、根拠になる実例として、チェルノブイリ事故、広島・長崎の原爆、東海村でのJCO臨界事故（詳しい名称を述べた人は殆どいない）で生じた健康影響について、様々な情報源から見聞き

した知識が関連付けられていた。

健康影響が起こるメカニズムについての言及は、細胞内のDNA損傷でがんが起きる確率が高まることや、甲状腺にヨウ素が集まりやすいこと、重度の被ばくで細胞が修復できなくなることなどの発話はあったが、人数は多くない。

なお、甲状腺にたまりやすい、長い間かけて発症するなどの知識が、体内に「蓄積される」という知識と結びついて、健康影響への懸念を強めていると考えられる発話もみられた。逆に、「排出する」という発話もあり、放射性物質を減らす、排せつをよくする食べ物をとるなどの自分でできる対策につながっていた。

また、影響が出てくるという懸念と実情については、発話者自身が乖離を感じていると推測され、10年経って住民に被害がないという発話がある一方で、福島での影響は専門家も十分な知識がないのではないか、実際の影響に関する情報を十分に伝えてほしいなどの要望も寄せられた。

メンタルヘルス一般に対する発話は少ないが、精神的なケアの必要性（不足）や、自身や家族が健康被害や風評などに対する精神的な不安が続いていることが発話された。

表13 健康影響に関わる知識の違い

共通する知識	チェルノブイリ事故、広島・長崎の原爆、東海村でのJCO臨界事故で健康影響が生じた 具体的には、がん、(子供の)甲状腺のがん、白血病 子どもへ影響が大きい 遺伝子を損傷する
専門家みの知識や情報	確定的影響および確率的影響 広島・長崎の被爆者臨床データの知見から、福島で明らかな健康影響が発生することはほとんどない 見つかった甲状腺がんが事故の影響とは考えにくい 遺伝的影響は人では確認されていない メンタルヘルスへの影響
市民みの知識や経験	10年後20年後になにか影響が出てくる 不妊や、胎児への影響が心配 子供に遺伝する 10年経って住民に被害がない 福島での影響は専門家も十分な知識がないのではないか 実際の影響に関する情報を十分に伝えてほしい 精神的なケアが必要 自身や家族が健康被害や風評などに対する精神的な不安が続いている

知識カテゴリ⑤ 検診・治療（表14）

専門家モデルでは、健康影響の下位のカテゴリとして、健康状態のモニタリングや福島県甲状腺検査、さまざまな健康問題への医療的対応等が含まれる。受け手インタビューでは、健康に関する調査・検査について、放射能をどれくらい浴びたのかをホールボディカウンターで測定した、

甲状腺の検査を受けた、という発話が多い。当時の高校生以下は学校で甲状腺の検査を受けており、その後進学や就職で県外に出ても定期的に検査を受けているケースもあった。ホールボディカウンターで測定を受けていても、なにを測っているか、なんの検査か覚えていない人もいた。ただ、検査を受けたことで「安心した」と記憶している人や、「心配ない」と言われても細かいところはわからなかった、継続して受診を続けるという発話も多かった。また、避難区域に入る時に問診があった、アンケートみたいな健康調査があったという発話もあった（表14）。

表14 検診・治療に関わる知識の違い

共通する知識	福島県甲状腺検査 ホールボディカウンター
専門家だけの知識や情報	健康状態のモニタリング さまざまな健康問題への医療的対応 WBCは内部被ばくの検査（食事との関係を見ている）
市民だけの知識や経験	放射能をどれくらい浴びたのかをホールボディカウンターで測定した 甲状腺の検査を受けた なにを測っているか、なんの検査か覚えていない 検査を受けたことで「安心した」 「心配ない」と言われても細かいところはわからなかった 継続して受診を続ける 避難区域に入る時に問診があった アンケートみたいな健康調査があった

知識カテゴリ⑥ 環境動態

専門家モデルでは、放射性セシウムの形態（懸濁態と溶存態）、森林や河川等環境中のどこにどれくらい存在しているのか、森林や河川等から生活環境や海への移動、チェルノブイリ事故における環境動態データとの相違点等の情報が含まれる。

受け手インタビューでは、事故当初は風向きによって汚染がどう広がるか、自身の居住地はどうか、という汚染の広がり、主な関心事として発話された。放射性物質（放射能と表現する人が殆ど）は、風に乗って運ばれるので、原子力発電所からの距離だけでなく風向きも放射線の量に関係することを殆どの対象者が認識している。山にあたって山が汚染された、雨（雪）で地上に落ちた、粒子状の物質が土についた、雨（水）で流れたり溜まったりした、という認識は専門家知識カテゴリとも共通する。物質の移動についての知識は、それにより溜まりやすい場所ができ、雨どいや側溝、ダムの底・ため池の水などの放射線量が高いところ、ホットスポットも生じた、という生活環境中での汚染状況への理解につながっていた。

また、どうやったら被ばくを避けられるかという観点から、「空気中に（放射性物質が）漂っている」という理解に紐づけて、生活の中での対策に関連する発話が多かった。具体的には、風によって広がった放射性物質を体に取り込まないように様々な形で対策がなされたことが発話された。県内外への避難はもとより、日常生活の中でも、井戸水や水道水の飲用を控えた、マスクや肌を出さない服装、窓をあけない、洗濯物を外に干さないなどが多く発話された。各地に設置さ

れたモニタリングポストは対策の目安にしていたが、②の線量測定の知識カテゴリに記載したように「数値の意味は分からない」まま高い低いを気にしていたという発話も多かった。他方、専門家は、環境中に定着した後の放射性物質の挙動から、山林や水資源・生活地域への広がりについて語っており、浮遊している状態での生活における対策は語られなかった。

環境中への汚染の広がりについては、山の線量が高いと認識されており、土から栄養をとっているキノコや山菜、タケノコ、イノシシなど具体例があげられ、線量が高いので食べられない、あるいは、毎日食べなければよいなどの発話もあった（表15）。

表15 環境動態に関わる知識の違い

共通する知識	放射性物質は風に乗って運ばれるので、原子力発電所からの距離だけでなく風向きも放射線の量に関係する 山にあたって山が汚染された 雨（雪）で地上に落ちた 粒子状の物質が土についた 雨（水）で流れたり溜まったりした 溜まりやすい場所ができ、雨どいや側溝、ダムの上・ため池の水などの放射線量が高いところ、ホットスポットも生じた、 山の線量が高い 土から栄養をとっているキノコや山菜、タケノコ、イノシシなどは線量が高いので食べられない／毎日食べなければよい
専門家だけの知識や情報	放射性セシウムの形態（懸濁態と溶存態） 森林や河川等環境中のどこにどれくらい存在しているのか 森林や河川等から生活環境や海への移動 チェルノブイリ事故における環境動態データとの相違点
市民だけの知識や経験	空気中に（放射性物質が）漂っている 県内外への避難 井戸水や水道水の飲用を控えた マスクや肌を出さない服装、窓をあけない、洗濯物を外に干さない

知識カテゴリ⑦ 環境影響

専門家モデルでは、ヒトの被ばくに関わる農作物や海産物への影響と、ヒトの被ばくにあまり関わらない山林の植物や野生生物への影響が含まれる。受け手モデルでは、影響として記憶に残っているものが発話されている。

初期に、水道水から検出されたことが記憶されており、東京でも影響があったこと、飲用水を購入したこと、井戸水は安全だと言われたこと、川やため池など水に対する影響が発話された。雨にあたることに不安を感じたという発話もあった。

土について食品が汚染されたので、コメや野菜・果樹などの農作物、水産物（川魚、海の底にいる魚）などの様々な地元や福島県産（他地域については殆ど言及されていない）の食品について発話された。同時に、家族や知り合い、新聞記事などで知った農家の方々の苦勞、復興に向け

て農家に対する風評被害やその支援が必要であることなども語られた。また、自分や家族が地元
の食品を購入したか、家庭菜園や、山のものを食べたかどうかも語られた。殆どの人が福島県内
で食品検査が実施されていることに言及し、基準より高いものは出荷できないので、それが安心
感につながっており、福島県産を積極的に購入するという発話もあった。事故後すぐは、多くが
福島県産の食品を食べていなかったが、そもそも福島県産の食品が店頭になかったことも理由と
なっていた。また、家で作った野菜や山で採ってきたものを測定する場所ができたので、利用の
有無に関わらず線量が高いものは避けられると認識されていた。試験操業をしている水産物も、
基準値を超えているのではなく、水揚げ量が少ないために、消費者の目に触れにくいという事情
を紹介する発話もあった。農業を再開した人方からは、研究機関に協力して試験栽培を重ね、事
故の翌年でも除染しない水田でつくった米から検出しなかったことや、農地の効果的な除染方法
や植物が放射性物質を吸収しないようにする方法などが紹介された。また、工業製品に対しても
風評があり生産工場が移転したという発話もあった。

自然環境への影響では、国立の研究機関が、立ち入り禁止エリアの木の成長点に異常が見られ
たことを発表したという発話もあった。松が茶色になった、ミツバチやチョウがいなくなったな
ど、身近な自然の変化が気にする発話もある一方、「事故とは関係なく、自然の異常は発生する」
という発話もあった。

海が汚染されているという発話は多かったが、汚染の経路や環境動態の発話はなく、魚がダメ、
海水浴場の閉鎖などの海を利用する際の影響について言及されていた。

専門家は、環境影響では、山林や野生動植物・生態系といった人の被ばくにあまり関係ないも
のは観察や実験など調査研究の観点からの知見、農作物・海産物など人の被ばくに関係するもの
は放射性物質の取り込みを減らす対策のための研究知見が語れた。知見の中には、生活の中での
対策として活用されたものや報道等で一般に知られたものもあった。

専門家モデルと受け手のモデルとの大きな違いは、個別知識の有無よりも、専門家は環境中に
線量が高い場所があることと、それがなんらかの影響を及ぼしているかを区別して認識している
が、受け手は汚染があるということ自体を事故による影響とみているという点であろう（表16）。

表16 環境影響に関わる知識の違い

共通する知識	川やため池などには残っている 福島県内で食品検査が実施されている／基準より高いものは出荷できない 食品が汚染された／農家に対する風評被害やその支援が必要 家で作った野菜や山で採ってきたものを測定する場所ができた 農地の効果的な除染方法や植物が放射性物質を吸収しないようにする方法がある 立ち入り禁止エリアの木の成長点に異常が見られた
専門家のみ の知識や 情報	ヒトの被ばくに関わる農作物や海産物への影響 ヒトの被ばくにあまり関わらない山林の植物や野生生物への影響
市民のみ の知識 や経験	水道水から検出された／東京でも影響があった／飲用水を購入した 井戸水は安全だと言われた 雨にあたらないようにする ミツバチやチョウがいなくなった 海が汚染されている、魚がダメ、海水浴場が閉鎖された

知識カテゴリ⑧ 除染

専門家モデルでは、主にヒトの生活環境における家屋や公共施設、田畑等の除染方法や効果に関する情報が含まれる。

受け手インタビューでは、多くの人が、学校や公園、道路、そして自宅周辺の除染作業を見て、付着した放射性物質を取り除く作業とその効果について発話があった。自身が見聞きした知見として、どういう場所で除染が実施されたか、他方で未実施の場所（山林なども含む）があるという発話も多かった。また、実施主体（国／自治体）のほか、実施方法では、剥ぎ取りだけでは十分な効果がなく、汚染されていない土に入れ替えたケースや、土だけでなく、草や落ち葉なども取り除く必要があった、高圧洗浄機での除染作業は、水の処理が問題となり、ふき取り除染になったなどの具体的な発話が多かった。除染前後で線量の低下を確認した人が殆どで、「表面だけでは不十分」と考える人、周囲に除染されない場所（山林、川、ダムやため池）があることを心配する人もいた。なお、自身が除染作業に携わった人が2名含まれ、具体的な現場の作業状況が語られた。除染の実施時期については、屋外活動の制限がなくなった、開始が遅かった、放射性物質が減った頃にやっていた、という指摘もあった（表17）。

表17 除染に関わる知識の違い

共通する知識	除染の実施場所 未実施（特に山林）の場所がある 除染前後で効果を測定
専門家のみの知識や情報	家屋や公共施設、田畑等の除染方法や効果（全体のデータや一般論として）
市民のみの知識や経験	剥ぎ取りだけでは十分な効果がなく、汚染されていない土に入れ替えた土だけでなく、草や落ち葉なども取り除く必要があった 高圧洗浄機での除染作業は、水の処理が問題となり、ふき取り除染になった表面だけでは不十分 周囲に除染されない場所（山林、川、ダムやため池）があるので心配 屋外活動の制限がなくなった 開始が遅かった／（半減期で）放射性物質が減った頃にやっていた

IV 考察

今年度は、「2011年3月の東日本大震災で東京電力福島第一原子力発電所事故や放射線リスクについてある程度関心や知識がある」という情報提供資料の想定読者のメンタルモデルを作成することを目的に、事故当時福島県に居住していた人を対象に、半構造化インタビューを実施した。合計47名の発話データから、人々が事故により放出された放射性物質が、どのように彼らの生活環境の中に広がり、日々の生活の中でどのように対処してきたのか、どのような情報や経験を得てきたのかについて整理した。

インタビュー対象者を、放射線影響に対する現在の不安の高さから「不安継続群」と「不安解消群」の2群に分けて発話内容の特徴をキーとなる知識カテゴリ（専門家メンタルモデルから示されたもの）ごとにまとめた。不安解消群は、相対的に不安継続群よりも専門家やニュース由来の座学的知識も経験知も多い傾向があるが、知識の内容は概ね両者共通しており、現在の不安の高さあるいは不安解消の理由やきっかけが必ずしも知識によらない可能性が示唆された。ただし、不安解消群においてのみ、食べ物の取捨選択や調理法について多くの発話があった。この内容は個人で出来るリスク管理であり、こういった知識やその実践が不安の解消に関連している可能性が考えられる。

3) 節では、昨年度整理した専門家モデルとの違いを考察している。ここからは、共通する知識と異なる知識および構造が浮かび上がってきた。例えば、不安継続群・不安解消群ともに、発電所事故で出た“放射能”が風に乗って山や田畑および人間の生活圏に落ち、それが身体や衣類、農作物などにつき、水や食べ物の飲食により身体の中に入るといった流れについて詳しい発話があった。健康影響については、身体の中に放射能を取り込むことによる体内（内臓）への影響と、がん、小児甲状腺がんが、具体的な事例として述べられている。一方で、具体的に何が出たのか、出た放射性物質の化学的物物理的特性とそれらが健康や環境に影響を及ぼすメカニズムに関する発話は専門家モデルのみにある。もちろん、遺伝子へのダメージや細胞へのメカニズムを話す市民もいるが、それらが生じる条件として被ばく線量は関連づけられていない。逆に、市民側は、過

去の原子力発電所関連の事故や原爆の知識から、白血病、一度に大量に浴びると死に至ることなどを想起している。このため、環境中に拡散した放射能への対応として、自宅や学校、公園、公共施設等の除染、家や地域の線量測定、食べ物の検査、検診等について、主に自身の経験や直接の伝聞による知識が多く述べられた。

被ばく線量と健康および環境影響の出現が関連づけられていない点は、放射線量や基準値の「数値」の意味が分からないとの発言とも関係している。これは、2) 節で整理した情報提供に関わる発言にも再登場しており、科学的知識の提供の課題として検討すべき事柄である。なお、情報提供に関する発言については、不安の継続や解消、安心感につながった内容などが分類されている。ここには不安解消群と不安継続群の情報の入手や理解に関わる違いが反映されていると考えられる。政策に関連した要望や風評被害に関わる言及も踏まえ、人々のニーズに応えうる情報提供方を検討する必要がある。

V 結論

本研究は、専門家の知識構造の枠組みをベースにしつつ、情報の受け手の視点から知りたい情報、不安や懸念に関わる情報を見える化して、情報提供資料の改善提案を行うことを目的としている。研究初年度（2020年）は専門家へのヒアリングから専門家メンタルモデルを作成し、2年目の今年度は、「2011年3月の東日本大震災で東京電力福島第一原子力発電所事故や放射線リスクについてある程度関心や知識がある」という情報提供資料の想定読者を対象に、メンタルモデルを作成するための半構造化インタビューを実施した。

インタビュー対象者のほとんどは事故当時は不安が高かったものの、現在ではその程度が低下している人が7~8割程度と多い。他方、未だにとても不安である人も2割程度存在しており、不安解消群と不安継続群として2パターンの受け手メンタルモデルを作成した。不安解消群は、相対的に不安継続群よりも専門家やニュース由来の座学的知識も経験知も多い傾向があるが、知識の内容は概ね両群で共通しており、専門家メンタルモデルとの違いの方が顕著であった。

専門家は放出された物質の化学的物物理的特性を踏まえて挙動や対策を考えているのに対して、市民側には個別物質の知識はなく、“放射能”として捉えられている。また、専門家は、被ばく線量と健康影響が密接につながった知識構造を有しているのに対して、市民側はこれらが結びついておらず、微量でも“放射能”が「ある」ことでなんらかのダメージを受けると理解されている。

また、受け手メンタルモデルには専門家メンタルモデルには出現しない情報提供や風評被害、政策に関する発言も多かった。情報提供に関しては、「数値」の意味が分からないなど、科学的知識の不足が示唆される一方、不安の継続や解消、安心感につながった掛かりつけ医の発言や知り合いや自分の経験知などが示された。風評被害は根強く存在し、今後の政策に対する要望も多い。次年度に情報提供方を検討する上で、メンタルモデル比較から示される知識とともに、人々の心理やニーズにも配慮した情報作成を検討する必要があることが示唆されたと言える。

環境保健行政として発信されている様々な情報は、関係する様々な分野の専門家の視点から、網羅的に知見が整理され充実したものとなっている。例えば、放射線による健康影響等に関する統一的な基礎資料などが広く人々に公開されている⁶⁾。今後新たに提供されるべき情報は、現在も放射線影響について不安や懸念のある人々が求める情報であり、その中には不安の解消に直接つながるもの、今更人には尋ねにくい放射線リスクの基礎的理解に必要なものなど、従来整備されてこなかった内容であろう。本研究で得られた、メンタルモデル・アプローチを用いた情報の受

け手の視点からの情報内容のニーズや知識の伝え方についての示唆は、今後の情報提供方策の改善を検討する際に資するものである。

また、インタビューにおいて、事故直後から現在まで知識更新がなされていない情報や対象者についても言及されており、今後重点的にアウトリーチしていく対象として検討する必要がある。例えば、健康影響を与えないための基準値の設定根拠と、実際の福島における被ばく線量では因果関係がないと説明される理由などを福島県外に向けて発信することは風評の払拭という観点でも保健行政として重要な施策といえよう。

なお、今年度のインタビューデータから得られた内容は、インタビュー対象者の個人的経験や情報環境による部分も含まれており、想定読者という母集団にどの程度一般化できるのかは、次年度の質問紙調査で確認する必要がある。次年度計画については次節VIで述べる。

VI 次年度以降の計画

令和4年度は、当初計画通り、メンタルモデルの相違点を踏まえた情報案の評価とリスクコミュニケーション方策の提案を行う。具体的な実施項目は以下の3点である。

①今年度作成した2枚の受け手メンタルモデルが、インタビューを超えて想定読者に一般化できるかどうかを確認するための質問紙調査を実施する。情報提供の対象として、不安や関心を持って放射線影響について知りたいと思っている福島県民を想定しているため、福島県在住者（成人男女600名程度）を調査対象とし、その中に現在も放射線影響に不安や懸念を持つ人を100名程度含むよう調査計画を設計する（不安や懸念を持つ人が少ない場合、調査対象者を増やして対応する）。この調査結果を踏まえて、受け手メンタルモデルを修正し確定する。

②確定した受け手メンタルモデルと、令和2年度に作成した専門家メンタルモデルの比較から抽出された相違点に基づき、福島県で使用されている既存の一般市民向け資料（既存資料A）を改訂する形で情報提供資料案（メンタルモデル資料B）を作成する。①で述べた想定する情報提供の受け手を対象としてグループインタビューを行い、既存資料Aとメンタルモデル資料Bを、内容の分かりやすさや知りたい事との対応、内容への納得感、信頼性などについて比較評価してもらう。

③実施項目①と②から、今後の情報提供方策の改善や環境省の環境衛生事業におけるコミュニケーション活動への提案をまとめる。

この研究に関する現在までの研究状況、業績
なし

引用文献

- 1) 朝日新聞 DEIGITAL. 放射性物質に不安, 66%「感じる」 福島県民世論調査.
https://www.asahi.com/articles/ASL2V451NL2VUZPS003.html?iref=pc_photo_gallery_bottom (最終アクセス日: 2022/03/28)
- 2) 小杉素子・桑垣玲子・土屋智子, 2021. 放射線リスクに関する情報発信と受け手の理解 (2), 日本社会心理学会第63回大会要旨集, pp212.
- 3) Morgan, Fischhoff, Bostrom, 他, 2002. Risk Communication. A Mental Model Approach. Cambridge University Press.

- 4) 小杉素子, 千田恭子, 三田村朋子, 土屋智子. 情報内容の抽出におけるメンタルモデル・アプローチの適用--電磁界の健康影響を題材として. 電力中央研究所報告 Y03022. 2004.
- 5) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版. 2014.
- 6) 環境省放射線健康管理関東参事官室 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構. 放射線による健康影響等に関する統一的基礎資料 東京電力福島第一原発事故とその後の推移 (省庁等の取り組み). 2009.

Information Content and Measuring Communication of Radiation Risk Using the Mental Model Approach

Motoko Kosugi,¹ Reiko Kuwagaki,² Tomoko Tsuchiya,³ Junko Ayame,⁴ Makoto Onoda,⁵ Kiyomi Kasai, Yoshihito Takeda,⁶ Hirofumi Nakamura,⁴ Michio Murakami,⁷ and Mari Harada⁸

1 Shizuoka University, Shizuoka, Japan

2 Central Research Institute of Electric Power Industry, Tokyo, Japan

3 General Incorporated Association transdisciplinary and Open Network for Risk Research and Collaboration, Tokyo, Japan

4 Japan Atomic Energy Agency, Ibaraki, Japan

5 National Institute for Quantum and Radological Science and technology, Chiba, Japan

6 Hokkaido University, Hokkaido, Japan

7 Osaka University, Osaka, Japan

8 Tamagawa University, Tokyo, Japan

Keyword: risk communication, risk of radiation, health effects, information provision, interview survey

Abstract

The purpose of this study is to present information content using the Mental Model approach. This methodology clarifies the knowledge possessed and required by a recipient of information. Specifically, this study presents recipient information in comparison to that of the scientific knowledge of radiation risk experts. In 2022, a 90 minute semi-structured interview survey was conducted to assess the knowledge and experience of 47 participants from the accident that occurred at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station in Japan to the present. The interview was based on the framework of an expert's model, as well as information obtained through media.

The utterance data was divided into two groups, according to the "current degree of anxiety about the effects of radiation," as measured in a pre-questionnaire. The utterance content was organized into the knowledge and understanding of radiation risk. Less than five participants mentioned the names and characteristics of the radioactive materials that were detailed in the expert model, but appeared to understand that pollution conditions varied, depending on the wind direction (regardless of the distance from the power plant). Regarding the behavior of radioactive substances in the environment, interviewees acknowledged the effects of soil contamination on crops, exposure to contaminated crops, and decontamination. With regard to health effects, interviewees were knowledgeable of the plausible aftereffects of childhood thyroid cancer, cancer, and of genetic damage. Conversely, there was a vague understanding of aftereffects that were not based on empirical knowledge and that adverse aftereffects may occur later. In general, there was no difference in knowledge content between the two groups' level of anxiety, suggesting that the content of knowledge and the amount of radiation risk are not directly related to current anxiety

levels. However, among the group that responded with less anxiety, there were many references to measures to avoid a negative influence on food selection and cooking methods. Immediately after the accident, even participants who presently exhibited little anxiety, were found to be very anxious. The result of health surveys after the accident indicate that it is possible that anxiety was alleviated by confirming that there were no present abnormalities and that taking measures to avoid radiation risk, as in with cooking methods, were being considered.

巻末資料

1. インタビュー協力者探しのお願い（研究協力者に配布）	- 2 -
2. 事前質問紙	- 5 -
3. インタビュアー用ガイド	- 6 -
4. 説明書（対象者に提示および配布）・同意書	- 11 -
5. 発話データ分析方針	- 13 -
6. 受け手モデル① 不安解消群	14
7. 受け手モデル② 不安継続群	15
8. 不安解消群と継続群のメンタルモデル比較表	16
9. 情報、風評、政策に関する発言集	21

1. インタビュー協力者探しのお願い（研究協力者に配布）

令和3年 月 日

環境省令和3年度放射線健康管理・健康不安対策事業
「メンタルモデル比較を用いた放射線リスク情報の提供と対話方法の提案」
放射線の影響に関するインタビューへのご協力のお願い
研究代表 小杉素子（静岡大学）

本研究では、標記のインタビューにご協力いただける方を募っております。

以下のインタビューの目的や手続きなどの説明をよくお読みになり、ご検討いただければ幸いです。

1) インタビュー調査の目的

- ▲ この調査は、環境省の「放射線の健康影響に係る研究調査事業」の委託事業の一環として実施します。
- ▲ 放射線の影響について、東京電力福島第一原子力発電所事故当時のことを含めて、日常生活上の気がかりなこと（健康、経済、教育、地域復興・・・）などに関するお考えやお気持ちをうかがいます。
- ▲ 皆さんが日常生活で放射線の影響をどう考えているか、どのような気がかりがあるかについてうかがった内容を整理し、日常生活を送る上で役立つ放射線に関する情報や、不安や懸念に対応する情報の提供方法を検討・改善するための資料として活用します。

2) インタビューでお話いただく内容

- ▲ 事故当時に考えたことやどう行動されたのかについて（～現在にいたるまで）
- ▲ 放射線の影響についてご存じのことについて
- ▲ 現在の日常生活で気がかりなことについて

3)実施時期

令和3（2021）年9月～10月

4) 所要時間

90分（事務手続きの説明等も含めて）

5) 場所

お住まいの最寄り駅近くの貸し会議室や役場などでの対面でのインタビューを考えております。（新型コロナウイルス感染症の状況等に合わせ、PCやスマホでオンライン会議に接

続しての実施も検討しております)

6) 謝礼

些少なから、謝礼をお支払いいたします。

7) 実施体制

参加いただける場合は、本状をお渡しした方（もしくは仲介した方）に連絡先をお知らせいただき、その後の日程調整などの事務手続きは、日本エヌ・ユー・エス株式会社（担当スタッフ：松永）が行います。

インタビューは、本研究プロジェクトのメンバーが行います。

8) インタビューデータの取り扱いについて

- ▲ この調査は静岡大学の倫理審査委員会の承認を受けています。
- ▲ インタビューデータを全て書き留めることは難しいので、録画もしくは録音をさせていただきますが、記録を作成したあと直ちに消去いたします。
- ▲ 分析や情報提供の検討において、個々人の意見やお考えが判別されることはありません。
- ▲ インタビューのために提供いただいた個人情報は、このインタビューの実施に必要な連絡、謝金の支払い、調査研究結果のフィードバック（希望者を対象に実施）にのみ使用し、研究終了後消去いたします。

9) 新型コロナウイルス感染防止対策について

新型コロナ感染拡大を受け、今回のインタビューにおいても、感染拡大防止対策を実施いたします。懸念や不安がある方は、ためらいなくその旨をご連絡・お問合せください。

なお、対面でのインタビューがためられる場合には、オンライン（スマートフォンやパソコンでテレビ会議を行う）での実施も準備しています。

① 当日までの対策

- ▲ 研究者等は、1週間前～当日までに発熱など感染が疑われる症状が出ないことを確認します。インタビューへの参加者も同様のご協力をお願いいたします。
 - 発熱など感染が疑われる症状がある方は、ためらわずご連絡ください。インタビュー日程の変更または中止をお願いすることがあります。
 - 1週間前～当日までに疑わしい症状が出た研究者は、インタビューには参加しません。複数の研究者がインタビューに関わっておりますが、万が一複数名に症状が出た場合には、日程の変更をお願いすることがあります。
 - 研究者の中に、感染者・濃厚接触者が発生した場合、インタビューのためにいただいた連絡先に連絡します。異なる連絡先を希望される方は事前にお知らせください。

② 当日の対策

- ▲ 研究者等は検温を実施し、マスクを着用します。インタビューへの参加者も同様のご協力をお願いいたします。
- ▲ 消毒用アルコール、飛沫防止の仕切りを設置いたします。
- ▲ 会場は、インタビュー開始前・終了後に換気と消毒を行います。
- ▲ 距離をとった配置で着席いただきます。
- ▲ インタビュー参加者は、当日の朝に検温をお願いします。発熱があった場合には、ご連絡をお願いいたします。インタビュー日程を変更または中止いたします。
- ▲ 会場に到着いたしましたら、消毒と検温をお願いいたします。発熱が確認できた場合には、インタビュー日程の変更または中止させていただく場合があります。
- ▲ 会場では、マスクを外さないようお願いいたします。

③インタビュー後（約2週間）の対策

- ▲ 研究者等が、感染者・濃厚接触者となった場合にはすみやかにご連絡いたします。
- ▲ インタビュー参加者の皆さまが、インタビュー後に感染が判明・濃厚接触者と認定された場合には以下にご連絡をお願いいたします。

その他、不安がある場合にはお気軽にお問い合わせください。

➤ 日本エヌ・ユー・エス株式会社（担当：松永）

E-mail : houshasen_interview2021@janus.co.jp

Tel : 050-3646-7898

10) 連絡先

- 研究代表： 静岡大学 小杉素子
E-mail : kosugi.motoko@shizuoka.ac.jp
- 事務局：日本エヌ・ユー・エス株式会社 担当：松永
E-mail : houshasen_interview2021@janus.co.jp

2. 事前質問紙

以下のアンケートに回答をお願いします。(みほん)

1. 年齢 ()

2. 性別 男性 女性

3. 2011年3月11日当時のお住まい(あてはまるものに○をつけてください)				
福島県 浜通り	福島県 中通り	福島県 会津	福島県外	
4. 現在のお住まい(あてはまるものに○をつけてください)				
福島県 浜通り	福島県 中通り	福島県 会津	福島県外	
5. 現在のご職業(あてはまるものに○をつけてください)				
会社員	公務員・団体職員	農業	林業	水産業
自営業	学生	専業主夫・主婦	パート・アルバイト	無職
その他()				
6. 同居のご家族: あなたご自身からみた関係をお答えください				
ひとり住まい	夫または妻	祖父母	親	子ども(小学生以下)
子ども(中学生以上)	孫	答えたくない	その他()	
7. 福島第一原発事故による影響について、あなたは 事故当時 どの程度関心がありましたか				
まったくない	あまりない	ややある	とてもある	
8. 福島第一原発事故による影響について、あなたは 今現在 どの程度関心がありますか				
まったくない	あまりない	ややある	とてもある	
9. 放射線の影響について、あなたは 事故当時 どの程度不安を感じていましたか				
まったくない	あまりない	ややある	とてもある	
10. 放射線の影響について、あなたは 今現在 どの程度不安を感じていますか				
まったくない	あまりない	ややある	とてもある	

ありがとうございました。

このアンケートは当日、受付にお渡しください。

3. インタビュアー用ガイド

インタビュアーの話の進め方

<自己紹介>

本日はありがとうございます。これから、お話をお伺いする〇〇です（名前だけ）。

このインタビューは、環境省が支援している「放射線の健康影響に係る研究調査事業」の一環として行うものです。この研究メンバーから、私と、書記が入っております。

書記をいたします△△です（書記の人も自己紹介する／傍聴者はオフラインで参加）

（傍聴者がいる場合）「ほかにも研究メンバーがお話を聞いています」

「ここからは私がお話をしていくので、他のスタッフはカメラをオフにします」

今日は 90 分ほどお時間をいただいておりますが、途中で気分が悪くなったりされましたら中断しますので、すぐお知らせください。飲み物もご自由にお飲みください。お手洗いなどに行きたくなった場合も遠慮せずおっしゃってください。

<目的>

10 年前、東京電力福島第一原子力発電所の事故が起きてから、専門家や行政から様々な情報提供が行われてきました。

この調査は、福島の皆さんが知りたかったことに、それらの情報が十分対応できていたのかについて検討することを目的としています。

皆さんが知りたかったことを伺って、専門家が提供してきた情報と照らし合わせて、放射線の影響に関する情報提供の改善方法を提案したいと考えています。

<事務的な手続き>

つぎに、このインタビューについて、事務的なことについて説明します。

■このインタビューは、研究代表者が所属する静岡大学の倫理審査委員会が審査して、静岡大学学長の承認を得ています。今日お話いただいた内容は、先ほどお話しした研究目的のためにのみ使います。

■インタビューへのご協力に同意をいただいておりますが、もしも今、あるいはインタビュー中に止めたくなった場合はすぐにおっしゃってください。中断や辞退されても不利益が発生することはありません。

<録音・録画の許可と個人情報の扱い>

■書記がメモを取りますが、全てを記録することは難しいので、補助的に録画させていただきます。

文書データの記録を作成しましたら、この録画は速やかに消去いたします。

データから、個人名やご住所など個人情報に関わる部分を削除した上で、知識や知りたいこと、不安などの内容を整理しますので、分析結果と個人が紐付くことはありませんし、個人情報が外部に出ることのないよう規定の手続きに従って管理します。

<同意の確認：必須>

いま私が口頭でご説明した内容をまとめた説明書がこれです（画面共有）。

読んでいただき、インタビューにご協力いただける場合は、「同意します」とおっしゃってください。それで同意いただいたことを確認したということにいたします。

また、インタビュー調査の結果をまとめましたら、ご希望の方には簡易版をメール添付の形で年度末に送付いたします。希望されますか？

<進め方について>

■最初に、10年前の事故からのご経験をお伺いし、次に、放射線や健康問題、除染などの対策についてご存じのことをお伺いしていきます。この場は会社の会議や面接とは違いますので、首尾一貫したことを言わなければいけないということはありません。頭に浮かんだこと、思いついたことはどんな小さなことでもおっしゃってください。

■もし、思い出したくないことや、言いたくないことなどが出てきましたら、回答を断っていただいて結構です。また、話しているうちに気分が悪くなったり、続けたくないと感じられましたら、終了しますので、遠慮なくお申し出ください。

■私たちは放射線の専門家ではありませんので、ご質問いただいてもお答えすることができません。お話の内容が正しいかどうか分かりませんし、気軽に思っておられることをお話くださいますとありがたいです。

■ここまでで、なにか分からないことや不安はありますか？
特になければ、質問に移りますね。

（必要なら → 何かご質問がありますか？）

（緊張しているようなら → 緊張していらっしゃるでしょうか？これからお話を始めるんですけど、どうぞ肩のちからを抜いて気楽にしてくださいね。）

導入時注意事項

- ・ 紙を音読しないように（緊張した雰囲気を作ってしまうので）。紙は見てもいいが、自然体で「2人でお話している」という雰囲気を作る。
- ・ 対面なら、ペットボトルの水かお茶を用意
- ・ *対面の際のコロナ対策（直前に状況をみて検討：なるべくオンラインと状況が違わないように配慮する）

■ ■ 質問セッション ■ ■

■では、最初に、10年前の東日本大震災で地震や津波があり、その後事故が発生しましたが、当時、どこにいらっやって、その後どうされたか、どんな情報を得ていたのかをお教えください。

(地震や津波で避難したか、家族とどのように連絡ととったのか、福島原子力発電所の事故はどうやって知ったのか、それについて家族と話したか・・・話を広げて聞いていく)

※放射性物質、健康影響、除染、基準など以降の質問に関連する内容が登場したかを記録する。 ※出てきた内容に応じて深掘りする。情報源と情報入手時期を確認する。

※調査参加者の言葉を使って追加質問をする。あいまいなときは「放射能」で統一。

※ () の項目は、話の中に登場した場合のみ追加質問する。

□事故で出た放射性物質／放射能で他にご存じのことがありますか？

□それは何から、いつ頃お知りになりましたか？

- I. (放射性物質：ヨウ素、セシウム、ストロンチウム、プルトニウム)
- II. (空間線量：どこで知ることができるか、気にしているか、数値、意味)
- III. (対策：線量計、洗濯物、そとで遊ばない、マスク)

□放射線／放射能の健康影響について、どんなことをご存じですか？

□それは何から、いつ頃お知りになりましたか？

- I. (がん)
- II. (がん以外：白内障、鼻血、メンタルヘルス)
- III. (健康調査・健康診断、甲状腺検査、ホールボディを受けましたか？どうだったか？)

□甲状腺検査について、どんなことをご存じですか？

□それは何から、いつ頃お知りになりましたか？

- I. (甲状腺がん、過剰診断)

□放射線／放射能の影響について、人間の健康以外に自然環境に関しては、どんなことをご存じですか？

□それは何から、いつ頃お知りになりましたか？

- I. (野生動物：イノシシ、タヌキ)
- II. (キノコや山菜)
- III. (植物、里山、森林)
- IV. (海や河川)
- V. (除染)

□除染について、どんなことをご存じですか？

□それは何から、いつ頃お知りになりましたか？

- I. (自宅)
- II. (公園や学校)
- III. (畠や田んぼ)
- IV. (行政の対応)
- V. (効果)
- VI. (仮置き場)
- VII. (政策)

□放射線／放射能に関する基準について、どんなことをご存じですか？

□それは何から、いつ頃お知りになりましたか？

- I. (食品や飲料水)
- II. (除染)
- III. (避難)
- IV. (基準値の意味)

□原子力や放射線にかかわる他の事故などについて、参考にした情報はありますか？

□それは何から、いつ頃お知りになりましたか？

□(風評被害、いじめ、副次的な影響)

□(トリチウム=排水、廃炉、廃棄物)

□今後の地域の復興や生活について、なにかお考えのことや、気になることはありますか？

□いろいろお話を伺ってまいりましたが、他に気になっていることや言い残したことはありますか？

<終了 10 分前>

□にチェックがついてない項目がないかどうか確認、話された内容について、それをどこから(情報源)、いつ頃(時期)、知ったのかを聞いたかどうか確認

□書記に聞き漏れがないかを尋ねる

<終了>

私たちが予定した内容はすべてお伺いできましたが、他に何か専門家や環境省など国の機関に対するご意見、ご要望がありますか？

もし発言を取り消したり、データとして使ってほしくないという場合は、3 日以内に事務局にご連絡ください。それ以後になると、発言と個人情報が切り離されて特定できなくなります。

貴重なお話を長時間にわたって、本当にありがとうございました。

途中の注意

- ・ 終始、傾聴態度をとる(話を興味深く聞く：視線と適度なうなづき)

- ・ 終始、にこやかに
- ・ メモは必要最低限におさえ、下を向かないようにする。
- ・ 話題テーマは明確に伝える。
- ・ 対象者がしゃべっている最中には原則口をはさまない。話が途切れたらはじめて「他に何かありませんか」 or 質問（「さっき〇〇とおっしゃっていましたが...」）。
- ・ おしゃべりをするうちに、テーマから大きく外れた時は、「ところで〇〇についてはどう思われますか？」「その時どんな情報があったらよかったですか」などと話題を戻す
- ・ 前のテーマとの区切りは明確に（例えば「はい、ありがとうございます。では次のテーマに移ります」など）
- ・ 次のテーマに移るときは「前のテーマについて何か思い出したら、途中でも構いませんので話してください」と添える（今回はできるだけ後戻りしないこと）

以上

4. 説明書（対象者に提示および配布）・同意書

福島県の放射線影響に関するインタビュー調査 説明書

【研究の目的】

この研究の目的は、これまでに専門家や行政から行われてきた放射線に関する様々な情報が、福島の皆さんが知りたかったことに十分対応できていたのかを調べることです。

皆さんが当時やこれまで知りたかったことを伺い、専門家が提供してきた情報と照らし合わせて放射線の健康影響に関する情報の改善方法を提案したいと考えています。

このインタビュー調査は、環境省が支援している「放射線の健康影響に関わる研究調査事業」の令和3年度採択研究の中で行われています。研究期間は令和3年4月1日から翌3月31日です。

【調査の概要】

2011年3月の東日本大震災や東京電力福島第一原子力発電所事故当時のことや現在の生活、放射線の影響についてどのようなことをご存じかをお話しいたします。

研究目的や事務手続きについての説明を含め、全体で90分程度かかります。

【調査へのご協力について】

調査への参加は自由です。もし今参加を辞退されたいというお気持ちなら、お申し出ください。ここで終了いたします。また、インタビュー中に話したくない質問があれば飛ばしていただいても構いませんし、話を止めたくなった場合はすぐにおっしゃってください。インタビューが中断となっても、あなたに不利益が発生することはありません（規定の謝金をお支払いします）。

このインタビュー調査は、研究代表者が所属する静岡大学の倫理審査委員会が審査して、静岡大学学長の承認を得ています。

インタビュー記録は、発言内容とお名前等の個人情報と切り離して分析しますので、結果からあなたのことが特定されることはありません。また、すべての記録は静岡大学および調査を実施する日本エヌ・ユー・エス株式会社、ネオマーケティング株式会社の情報管理規定に則って保管・破棄を行います。

インタビュー調査の分析結果は、希望される方にR3年度末までにダイジェスト版をお送りします。また、研究全体で分かったことは環境省の公式HPや、学会発表や論文発表の形で公開します。

この調査についてのお問い合わせは、下記までお願いします。

研究代表者 小杉 素子 kosugi.motoko@shizuoka.ac.jp

静岡大学大学院工学領域

432-8561 静岡県浜松市中区城北3丁目5-1 電話(053)478-1261

福島県の放射線影響に関するインタビュー調査

同意書

○私はインタビュー調査の内容について、説明書をよく読み、内容を理解しました。

ここに調査への参加を同意いたします。

年 月 日

氏名

代諾者（必要な場合のみ）

○希望される方に、令和3年度末までにインタビュー調査の結果を取りまとめた報告書ダイジェスト版をお送りします。希望される方は、宛先をご記入ください。

報告書を希望しない

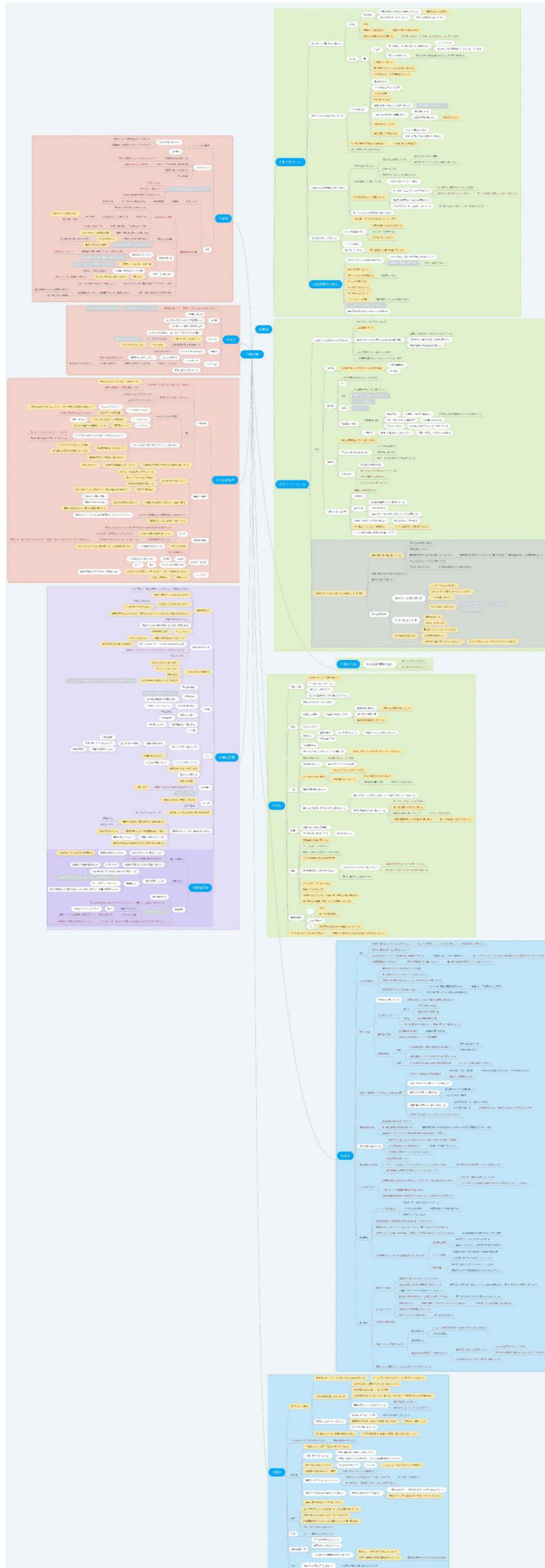
報告書を希望する

5. 発話データ分析方針

インタビューデータのクリーニング方法

1. ファイル名を、「インタビュー番号_実施日_ID 番号_初回校正者（通常は書記）のイニシャル_2回目校正者（インタビュアー）のイニシャル」とする
2. 標記のゆれ（例：事故、原発事故、原子力発電所の事故）や、誤認識（組織の名前や地名の誤りなど）はそのままOK
3. あの、その、だから、はい、で、等の取り除きは基本的には不要。ただし、それで文意が取りにくいくらい多いのははっきり切って意識を置いて可。あとは余力があればやっただくのは大歓迎！（「ああ、そうそう。放射能でやっぱりこう漏れてきてるんで、で、しかもその原発のところが会津若松で、結構近いんで、まあ言うほどすごい近いわけじゃないんですけど、比較的に近いので、ちょっとさすがにヤバイよねっていうのはやっぱりみんなずっと言ってましたね。はい」→放射能が漏れてきているということで、自分の自宅は会津若松で原発に比較的近いので、ちょっとやばいよねってみんな言ってました。くらいの意識でokです。）
4. インタビュアーの問いかけは削除する。ただし、問いかけに対する答えが対象者の発話に出てこない（「そうです」「はい」などで復唱されていないなど）場合は、対象者の発話に追加する。
5. 明らかな変換間違いは、気がついたら修正する（例：「スーパーが悪と」→「スーパーが開くと」）
6. 指示語（そういう、その時など）は、同じ段落内に繰り返して発言があればそのままでも可。なければ内容を補う。また、体言止めの発話は述語を補完する（「そういうのはあんまり気にしなかったんですけど、ああそう、ネギ」みたいなのは、「そういうの」の内容、「ネギ」がどうしたのかを補完する）
7. 蛍光マーカールがついているのは聞き取りが不明瞭な部分なので、前後の文脈から補う、もしくはまったく意味不明な場合は削除する。
8. 発話内容の区切りで改行する。エクセルで読み込む際に、改行でセルを区切るの。関連して続いている内容の発話は改行せずにひとつの段落とする（ひとつのセルには 3000 文字以上入るので、ひとつの段落の文字数が多くても気にしなくて大丈夫）。特に、追加的な短い文はひとつにまとめるのが望ましい。長い一文の場合は別段落のままだでも多分支障はない。
 - i. 最終的には、空白行はないようにする（編集途中は空白行がないと読みにくいだろうので、エクセルに読みこむための最終版で）
9. クリーニングを終了したら、保存の際に形式をテキストファイルとし、エクセルでテキストファイルを読み込む。ワークシートの名前をインタビュー番号にする。
10. 別のワークシート（「情報」タブ）に、当時の居住地、現在の居住地、当時の不安、関心、現在の不安、関心、性別を入力（これは後で松永さんに情報をもらって一括で入力の方が簡単かも）
11. *9 と 10 は小杉が担当します。

6. 受け手モデル① 不安解消群



8. 不安解消群と継続群のメンタルモデル比較表

大カテゴリ	小カテゴリ	不安解消群	不安継続群	
爆発		メルトダウン	メルトダウン	
		チェルノブイリ、原爆	チェルノブイリ、スリーマイル	
		放射能がばらまかれた	ヨウ素（剤）	
		水素爆発		
	避難	避難指示区域		国が決めた基準で強制的に避難
		放射能漏れが心配		放射能が心配
		ヨウ素（剤）>甲状腺に影響があるから必要		
	物質	実際何が出たのか分からない		
		ヨウ素		
		甲状腺にたまる／近くの方は防ぐためにヨウ素剤をとる		
		セシウム		セシウム
				土についている
				たまりやすい場所がある
		半減期		半減期
		長いのと短いがある		
ゼロになることはない			ゼロにならない	
ずっと残る			汚染が自然消滅するまで時間がすごくかかる	
			自然界のレベル	
	トリチウム（トリチウム水）			
放射線量		[単位]シーベルト、ミリシーベルト、マイクロシーベルト	[単位]シーベルト	
		空間線量	空間線量	
		モニタリングポスト	モニタリングポスト	
		原発事故前レベルに戻った	ガイガーカウンター	
	線量計で測定した結果	天井の方が床より高い／排水溝や雨樋が高い／海側や原発周辺は高い／山の物は数値が高い／海の底の方にいる魚は数値が高い		
		基準：人体に影響を及ぼさないレベル／生活できる数値		
		比較対象がない		
		どの程度まで安全なのかはっきり言わない／数値化されてもよく分からない		高い低いの基準が分からない
	自然界にもある	太陽光、飛行機		日光を浴びる
		ブラジル、インド、岐阜は高い		
レントゲン	放射線治療、CTの方が高い		放射線治療、CTの方が高い	
	年1回のレントゲンでも影響がない			
健康影響	悪影響がある	未知の物質で何かが変わってしまうという漠然とした	どういう風に影響するのか漠然としている	
		他の地域の人より病気になりやすい	病気になる、なりやすくなる	
		何年後にどうなるか分からない		
		汚染された農作物を摂取すると人体に影響がある		
	身体に蓄積される	出るものもあるが、蓄積されるものもある		放射能は蓄積されていく
		内臓に影響があるのではないか		
		やがてがんになる		
子ども	子どもががんになりやすい		子どもの方が影響を受けやすい	

や 幼 児 へ の 影 響	ダウン症になりやすい	
	自分が受けた影響が子どもに遺伝する	
甲状腺	甲状腺の検査	甲状腺検査
	甲状腺がん	甲状腺がん
	小児の甲状腺がん	小児の甲状腺がん
	放射性物質が一番たまる	放射能が集まりやすい
	ヨウ素がたまる	蓄積する
		甲状腺をバリアする：ヨウ素
	嚢胞	
がん	影響が出やすい／甲状腺異常／甲状腺肥大	
	ガンになる確率が高くなる／がんになりやすくなる	がんを誘発する
白血病	子どもが吸収しやすい	子どもや若い人にがんの影響
	白血病	白血病
生殖機能	鼻血が出る	長い間かけて発病する
	白血球が減少して免疫力が下がる	
	精子への影響	
	子どもに遺伝	
遺伝子／DNA	妊娠しづらくなる	
	細胞内の DNA 損傷	DNA/遺伝子が損傷
	細胞を壊す／細胞に影響がある	
髪が抜ける	皮膚が新しく作られなくなる	
		遺伝子の損傷が何世代かにわたって遺伝する
線量が 高ければ死に 至る	雨が降ると放射能で毛が抜ける	髪が抜ける
	はだしのゲン・原爆ドーム	東海村／チェルノブイリ事故
	代謝ができなくなる	
	細胞が分裂できなくなる	
具 体 的 な 因 果 関 係 が 解 明 さ れ て い ない	一瞬でものすごい量を浴びると身体が溶ける	
		微量なものを浴び続けたらどうなるのかデータがない
健康調査	内部被ばく	内部被ばくの検査
	ホールボディカウンター (WBC)	WBC
	自分がどのくらい被ばくしたのか	どれくらい浴びたかの検査
	体内に摂取したもの／放射能がついているものを食べると被ばくする	
	内部に蓄積されて外に出ない物があるとすれば内臓に影響を与える	
	いくつ以上だと健康に影響があるのか分からない	
	年簡の積算	
		身体の外と中を測る検査
放射能	福島医大のアンケート	
	風向き	発電所から北西に流れた
		北西方向に流れた
		距離は離れても風向きで線量が高くなる
		発電所から遠くても線量の高い場所がある
	浜風	
	流れる	
	たまる	

	ホットスポット	ホットスポット
	雨樋や側溝が高い	
	雨が降ると下がった	
	雨で樹木についているものが洗い流される	
	雨の落ちたところが線量が高くなった	
		放射能ブルーム
		雲
空気中に漂っている	子どもたちとの屋外活動が制限された／外の空気がダメ／マスク着用／ホコリを吸い込まない／洗濯物を外に干さない／なるべく肌を出さない／外の物に触らない	外に出ない／外の空気を吸わない／マスクをする／カッパを着る
	窓を開けるな／小中学校にエアコンを設置	窓を閉めても放射能が入ってくる
	なにか付着して汚染される	
		今も発電所から出続けている
		廃炉に長い時間がかかる
		線量
		被ばくしても目に見えない
水道水	水道水から放射性物質が検出された／今は検出されてない	水道は危険
	井戸水は安心という説明	
	地下水をくみ上げている井戸水を使う	
	上から(放射能が)降ってくるので川とかに入ったりする	
山の線量	山の線量がすごく高い	山の線量が高い
	キノコや山菜が高い／イノシシは高い	山のものが高い／キノコや山菜：食べると被ばくする可能性がある
	毎日食べなければよい	
	山が防いでくれる	
自然環境の変化	森林に降り注いだ放射性物質が多い	
	木が上でなく横に伸びた	
	松の木の変色／日本ミツバチが消えた／キノコが異常発生／チョウがいなくなった／鳥の声がしなくなった	
	事故前から異変は一定数ある	
		食べ物が変な形になっている
		奇形の動物がいっぱい
土についている	土に落ちたものはなかなか取れない	
	土に浸透していく	
		たまりやすい場所がある
		水たまりなどが高い
		靴底の土を払う
		草にもたまりやすい／牧草が汚染
		濃縮される
	畜産物／米／野菜／くだもの	農作物への影響：コメ／野菜／果樹／くだもの
	牛の処分／牛乳の廃棄指示	
	試験栽培・操業	
	2011年に作った玄米も基準以下	
	除染方法	
	天地返しだけでも検出なし	
	土壌検査	
海が汚染	水産物：川魚が一番高い	魚がダメ
	下の方で泳ぐ魚の数値が高い	海底にいる魚が高い
福島産	安全性を確認して販売	食べ物の放射能検査

の食べ物	全袋検査	米の全量検査	
	出荷制限	出荷停止	
	自分で採った物や育てた物は自治体で測定		
	検査してもほとんど検出されない		
		[単位]ベクレル	
	放射能がついたものを食べたら被ばくする	食べ物に放射能が付いてて口に入る	
		内部被ばく	
		蓄積される／消化器系が損傷する	
		そういうものを口にしない／水道水を飲まない	
		放射能を浴びても身体の中である程度吸収したら余計なものは流れていく：蓄積／排出	
	対策	福島県産の食べものを避ける／子どもには食べさせない／大丈夫だと分かっているが避けた	
		周辺の産地の物も念のため食べない	
		自分で判断して食べる	
		取り入れる量を減らす：ジャガイモの皮を厚くむく／土が付いている部分は食べない／鮎の内臓は食べない／生魚（刺身）は食べない／切り身に火を通す／血合いをよける	
排出をよくする：発酵食品を取る／水分をこまめにとる			
放射性物質を減らす：酢に浸しておく／とセシウムが出る／水を煮沸すればよい／お湯で二度ゆでこぼす／イノシシ肉もしっかり煮て流すとほとんど出ない			
除染	方法	洗浄：屋根や外壁、道路を高压洗浄／最初は（洗浄した水を）そのまま流していたが、問題になって拭き取りになった	水で洗い流す
		田畑ははぎとりと土の入れ替え	土を入れかえる
		表面の土を削る	土を削る
		10 cm下は大丈夫	
		木を伐採する	
		雨樋などたまりやすいところを掃除	公園や自宅：落ち葉の処理も実施、雨樋付近が高い
		学校：外で遊べるようになった、校庭に埋めていた、線量が下がったと説明	
		優先順位：線量が高いところから	計測して高いところから実施
		仮置き場を集める／田んぼ／山奥や人が近寄らないところ／除染した土は庭に埋めるか置くか	借り置き／敷地内に埋める
		除染土を持っていく先が決まっていない	
		中間貯蔵施設に運ぶ	中間貯蔵施設を集める
		未実施場所：山／ダムや池など／川	未実施：線量が高い場所では実施していない／帰還困難区域／住宅周辺にもある
		畦・畠の脇の水路	田畑
		川に雨水が流れてきて線量が上がる	
		人が生活するところは全て済んだ	
			山林は除染しない
		実施主	自治体が実施／国（環境省）

	体		地域によってやり方が違う
	効果	実施前後で線量が下がった	
		どれだけ効果があるかは業者次第	
		残留線量が 0 になる訳ではない：人が住めるレベルだから住んで良い	
		除染してもかなり高い	
		山間部や沢など日当たりの悪い場所、風通しの悪い場所は高い	
		住宅地に近い所も除染しないと線量が下がらない	周囲で出続けているので除染しても同じ
基準値	安全な基準		目標
		安全だという基準	大丈夫な値／お墨付き
		基準値を境にして、良い物とダメな物が決まる	
		基準値以下と言っても含まれている／低ければ低いほど良い	
		震災後に国がいろいろ示した	
		客観的に見て厳しい基準	
		世界的な基準が知られないまま値が設定された／日本だから厳しくした	
		かなり安全側に見ている	
	健康	人体に影響を及ぼさないレベル	
		それでも高い・通常だったらあり得ないレベル／健康影響があるのはここまでの線量	
		一定の数値をずっと受けてたり食べ続けたりすると身体にたまって影響が出る	
		食べ物や行って良い場所の基準ができた／1 年間に換算すると健康への影響は直ちに生じないレベル	
	飲食物	食べても大丈夫だという基準／ベクレル／食品の安全性の基準／安全性が確認されたという基準	食品検査：基準を超えると出荷できない
		年簡の制限値から逆算して算出／毎日食べ続けた時のものであり、かなり安全側に設定されている	
		国際的に見てかなり厳しいレベル／コメ、穀類、そばは厳しい	
		水道の基準も海外より日本の方が厳しい	
		牧草：1 ロール 35 以下と厳しい／海外の餌を食べさせている	
	避難	人が日常生活していたらまずいところが避難区域になった／避難区域に設定されていないということは大丈夫	避難：人が居てはいけない基準のところは避難
		帰還困難区域に入らなかった地区でもすごく高いところがある	
	除染		除染：基準より多いところを集中して表土剥離
屋外の活動制限／プールの授業がなくなった／体育を外でやらなくなった／1 日の屋外の活動時間が決められていた			

9. 情報、風評、政策に関する発言集

(1) 情報提供に関する発言

情報全般

- ・ 情報は出ていた
- ・ 情報がなかった
- ・ もっと情報を欲しかった
- ・ 情報が入ってこないうちは何にも分からない
- ・ もう少し情報を教えてくれているとよかった
- ・ 根拠を示して、大丈夫というのをもう少し言ってほしい
- ・ 当初は、危なそうだけど、よくわからない状況
- ・ 原発事故については、仙台にいるうちには全然情報が何も入ってこなかった
- ・ 放射能のことは頭の隅に置いてなかったので、情報不足だった
- ・ 中通りの人は放置状態で、情報がなく、結果的に県外に自主避難した
- ・ 中通りの人は結構不安だったと思うので、全体的に情報が欲しかった。情報は何もなかったに等しい
- ・ デマみたいなものが出ていた記憶がある
- ・ 噂の内容は、どれが正しいのか、正しくないのか分からない状況だった
- ・ 10年経っても放射能があるというイメージなので、日本全体に向けてしっかり情報を伝えてほしい
- ・ 日本で報道されている情報と、海外で放送されている情報が全然違っていた
- ・ 原発の状況は、海外で報道しているもの（やばい）と、日本のメディアがやっている情報（大丈夫）が違っていた
- ・ 現地にいる人のほうが正しい情報があったのではないかと
- ・ 対策が噂でも流れてきていなかった
- ・ 具体的な対策が全然なかった
- ・ 事故と対策に関する説明がない
- ・ 詳しい情報とちゃんとした情報が欲しい
- ・ 自分の地域ではないところの事実は現実味がない
- ・ いろいろな災害で知るべき情報を日本全体で共有しておくべきではないかと
- ・ 大変な思いをしたことが伝われば、つながっていくので、情報の共有は大事
- ・ どの程度、どう広がっていたか、どこに行けば避けられるかという情報が出てこなかった
- ・ 確かな情報が入らなかった
- ・ 情報が正しく出されてなかった
- ・ 具体的に、正確に、隠しても結局は後々問題になるので、嘘つかずに事実を正しく伝えてほしい
- ・ 状況を正直に伝えてほしい
- ・ 大人もよく分かっていたいなかった
- ・ 中途半端な情報しか出てこない
- ・ いろいろ調べたが、あいまいな情報しかなく、確信は何も得られなかった

- ・ はっきり言ってほしい
- ・ 多くの方は判断できないので、判断基準をはっきり示してほしい
- ・ 判断材料をほしい
- ・ 微妙な線のところが（判断材料が）不足する
- ・ 具体的な指示がなく、レベル差あり（避難指示から自主避難、希望など）
- ・ はっきりしたことは分からずに行動していた
- ・ 情報が錯そう（原発が完全にメルトダウン、東日本全体が汚染されて住めなくなる：ネット情報）
- ・ 情報に振り回された人たちがいた（飯館村など）
- ・ 大丈夫と言って避難させてくれない状況があった
- ・ 国のほうが懸念していたのは分かる（混乱するから提供を控えたんだろう）
- ・ 不安をあおらないように「大丈夫」と言っていたんだろう
- ・ 不安に蓋をするなら、対応をとる必要あり
- ・ 蓋をただけでは無責任
- ・ 不安があるから言わないというのは、人を馬鹿にしている
- ・ 見えないものには共通点があるような気がする（コロナにも通じる点）
- ・ 正しく伝わっていない
- ・ 勝手に情報が独り歩きしている
- ・ 勝手に誤解して話している人がいる
- ・ 一部分を切り取ってしか見えない
- ・ 健康への影響についての報道が全くないので、放置されていると思う
- ・ 具体的に住んでいる人たちのことや、どういうサポートを受けているかの情報が全くない
- ・ 県外に出ると福島情報は全く入らない
- ・ 関心が薄れてきているので、情報発信の仕方を工夫してほしい
- ・ 今の状況を知る機会があまりにも少ない
- ・ 最近では放射線量の話も非常に少なくなった
- ・ 理解より、情報を仕入れることをしていた

情報源

- ・ テレビがなくラジオか周囲の人の話から
- ・ テレビで見て福島第一原発の爆発の規模を知った
- ・ 原発事故の話聞いたのはテレビで
- ・ 実際何かを食べてはいけないとかはあんまりなくて、食べたらどうなるのかという情報もテレビで聞くようになった
- ・ テレビで大々的に報道したものの方が重要度が高いと捉えて優先していた
- ・ 原発の問題を指摘する特集番組を毎年繰り返し見ていくうちに、何が起きたかを知っていった
- ・ 避難や食べ物の基準についてテレビでやっていた
- ・ 放射能の汚染の範囲は、テレビで見る方があった
- ・ 放射能の数値ばかりで、テレビがあおった感じ

- ・ 環境省から出ている資料も時間を見つけて見ている
- ・ 県や東京電力の広報誌などを見てみようと思う
- ・ 電力会社の HP はあまり見ない
- ・ 東電や県の紙ベースのものに目を通す
- ・ 新聞の折り込みや自治体から配布されるものを見るようにしている
- ・ 福島を離れてからは、情報は主にネットで仕入れている
- ・ ネットは正しくない情報もたくさんあるし、大げさな情報もある、自分で判断するしかない
- ・ 自分で HP の情報から福島のことを調べた
- ・ ネットの情報も調べたが、正しい情報なのか疑いながら見ている感じだった
- ・ テレビの情報より、自分で調べる情報の方が多く、いろいろな情報があって、どれが本当の情報か分からなくなってきていた
- ・ 学校からの説明はいろいろあった（行事や給食など）
- ・ 当時、マスメディアが不安を煽っているだけという印象だった
- ・ ローカルと NHK のラジオを聞いて、原発の実況のような情報を聞いていた
- ・ テレビで爆発した映像を見て、仙台と東京の友達から福島から逃げろという電話が来た
- ・ 最初に、人づてにいろいろな情報が入ってきた
- ・ 職場に専門の人がいたので、その人の情報とニュースの情報が中心（専門家からの情報はなかった）
- ・ 職場で情報を知ったが、情報が錯そうしていた
- ・ 会社には放射線源を使っている機器があり、知識を持っている人がいた
- ・ 事故後、放射能について測定や基準値、健康影響について勉強する機会が早く多くあった
- ・ トリチウム水についての知識は、報道よりも業務の中で専門家のお話を聞いて得た
- ・ 役場職員の代表が放射能の説明会に行き、「確かに放射能は怖いものだけれども、ただ怖がるのではなく、きちんと理解して怖がってください」ということを聞いてきた
- ・ 情報共有は会社の人と話すロコミ
- ・ 近くの人を信用して、周りの人に聞いてから判断していた
- ・ 会社でも信用できる人とできない人がいるので、会社の上の人の情報を一番信用していた
- ・ 原子力業務をやっていた人が職場にいたので、空間線量の測定方法を教わったり、半減期の話も聞いた
- ・ 職場の回覧情報や新聞を見ていた
- ・ 10 年間、いろいろなことをやって、いろいろな人と付き合い、情報もそうやって教えてもらった
- ・ 新聞の中にも初めて聞く言葉も多く、用語の説明と照らし合わせて記事を読んだ
- ・ 事故から 2、3 年は、摂取制限や放射線量を新聞などで見ていた
- ・ 情報を集めることに意識がなかったが、原子力が騒がれ始めたので、1 週間分の新聞を読んで、正しい情報は何かを考えた
- ・ 新聞の情報が正しいという気がするので、新聞の情報を中心に見た
- ・ 放射線の説明会はあったような気がする
- ・ 学校で、放射線を研究している女性の講演会に参加した（内容の記憶なし）
- ・ 役場は講演会などはあまりやっていないが、事故当時放射能の影響についての説明会はあつ

た

- ・ 放射能についての冊子を何回ももらったが、全部読んではいない
- ・ 自主避難の会では、安心できる対応やここに気をつけた方がいいという情報を得た

情報の遅さ

- ・ 離れた自治体では情報が遅かった
- ・ 放射線についての情報はこなかった
- ・ 放射線の量が、テレビでも出るまでしばらくかかっていた
- ・ 放射能がどれくらい流れるというのは、3月末くらいに伝えていた
- ・ 政府が出す情報は遅れがある（いったんおいてから報道する印象）
- ・ だいぶ時間がたってから、県が作成した資料が送られてきて、中通りは大丈夫ですということが書かれていた
- ・ 地震直後に、県内だけでも原発事故の恐れがありますという情報は欲しかった
- ・ もっと早くこういう恐れがあるかもしれないとか、最悪こういう事態になるかもしれないという情報があっても良かった
- ・ （爆発の）映像から急に始まったという印象
- ・ 直後から、今こういう状況なので、こういう対策を緊急で行っていますといった情報があれば良かった
- ・ 避難しないといけないという情報が先行したので、ここまで何がくるとか、ここにいたら何があぶないとかという情報は後から
- ・ 避難の理由を知ったのは2週間ぐらいたってから
- ・ 福島県で放射線量を発表するようになった後、水素爆発後に南西方向の地域は、原発周辺より高くなった
- ・ どこが一番放射線量が高かったのかというのは、ツイッターの情報がスピード感があった
- ・ 断水のため、近くの井戸に水を汲みに行ったりして、放射能が降っているという情報もほとんど知らなかった
- ・ 落ち着いたところに、放射能の方が深刻だと聞いた
- ・ 後になってから、子供を外で遊ばせるべきではない、食べ物も気をつけた方がよいという話が出た
- ・ 月曜ぐらいに原子力発電所がまずい状況だという情報が入ってきて、水素爆発の後状況が一変、原発近くの病院の透析患者を受け入れる対応が始まった
- ・ 水をもらいに外に出ていたとき、流れに乗って放射性物質が飛んできている時だったのが後で分かった
- ・ 国も県も、爆発したときの状況や何かを、分かっていることを早めに言ってもらえれば、ある程度把握できた
- ・ 放射能が散っているという情報も後からだったので、放射能が流れてきている方に人々が逃げてきていた
- ・ SPEEDIは後から聞いた
- ・ 国、県、東京電力の情報提供が非常に遅かった
- ・ 情報が後手後手だった

- ・ 後から後から影響が来ている
- ・ マップが出てきたのは相当時間がたってから

分からなかった内容

- ・ 数値がよくわからない
- ・ どれくらいの放射線の量か、危険なのかが全然わからなかった
- ・ やたらに数値化されてもよくわからない
- ・ 校庭に放射能を測る機械があって、数値は毎日教えられてはいたが、どうだから安心とかはよくわからなかった
- ・ いわき市より福島市の放射線の数値が高く出ていた（なぜかが分からなかった）
- ・ 最初、どれくらいで危険ということが分からなかった
- ・ 線量計の数値はあんまり分からなかった
- ・ 数値が人体にとってどの程度危険なものかの知識はなかったので、漠然と上がった、下がったくらいの感じでしか捉えられなかった
- ・ 大丈夫な、具体的な数値は示されていなかった
- ・ このくらいになったら安全ですというのも示されていなかった
- ・ 現在の数値は高いけれど、今すぐ健康に被害が出る数値ではないという、それだけだった
- ・ 事故後すぐの線量は、いいのか悪いのか判断がつかない、そんなに高くはないがある程度あるので、ここに居ていいのかと思った
- ・ （食品を測って線量がいくつと言われるが）数値がわからない
- ・ 福島県内のニュースで各地の線量が出るが、説明がなく、ピンと来ない
- ・ 値だけが出てきて説明がないので、理解を得られるレベルまで周知できない（国）
- ・ 公園などに線量計が置いてあるが、何がどう大丈夫か、どうなったらダメかなどの説明が子供にもできない
- ・ 数値が上がったとか、それがどのくらいで危険なのかは、さっぱり分からない
- ・ 数字だけ示して大丈夫といっても頭に入らない
- ・ 放射能の数値が表示されるだけで、どう生かすのかは知らされなかった
- ・ 測定した数値に基づいて、高いからどうするなどの説明は記憶にない
- ・ Bqとシーベルトの関係は、何万分の1なのかよく分からない、そういう単位というぐらいの認識でしかない
- ・ こんなにあっても大丈夫という使われ方をBqはして、シーベルトは小さな値でも結構効いてくるという使われ方
- ・ 実際に事故の影響で何ミリシーベルトという被ばくの量が出たというのは全然分からない
- ・ これぐらいの距離なら大丈夫という範囲をはっきり、早めに教えてもらえれば避難しなかった
- ・ 大事な話は、今すぐ避難しなければいけないのはどこの地域の人か
- ・ 放射線の量や半径どこまでがいいのかといった数字が出なかった
- ・ どの程度までが安全のエリアなのかという区別をしてほしかった
- ・ 放射能がどのくらいきているか、どこにあるかという情報はなかった
- ・ 危険地域の周辺（郡山や会津）についての情報はあまり言っていなかった

- ・ 周辺であいまいなところはやっぱりある
- ・ どこに避難すればいいか、どこからが避難地域か、よく分からなかった
- ・ 原発があるところから自分の家まで何キロの距離があるのか分からなかった
- ・ 錠剤みたいのを吞んでどうだったのか、説明する情報も来ていない
- ・ いくつ以上で健康に影響があるというデータがあれば理解が深まるが、聞いた記憶がない
- ・ 妻を説得するだけの情報がなかった
- ・ どれくらいの確率で影響があるのかが、規模が大きすぎてよくわからない（身近に感じられない、腑に落ちない）
- ・ 当時は情報が多くなかったので、何を信じたほうがいいのか全然わからなかった
- ・ いろいろな人が大丈夫だ、大丈夫じゃないというので、どっちが本当かというのが一番分からなかった
- ・ 当時、どの情報を信用していいか全くわからない状態だった
- ・ 何年後にどのくらいの被害がくるのかが全然分からなかった
- ・ 福島に居続けることによって、他県よりどのくらい影響を受けるのかが全然分からなかった
- ・ 福島県内にずっといていいのかが、全然分からない状態だった
- ・ 当時、放射線がどのくらい影響するかというのはあまり分からなかった
- ・ 具体的にどのように危ないかは詳しく知らなかった
- ・ 測定した結果と、健康影響との関係について具体的な情報はない
- ・ 除染作業でも、昨日より高い、低いということで、それがどう自分に影響するという情報はない。
- ・ 当時、何ミリシーベルトとか言葉だけ先に走っていて、何がだめなのかとかは全然分からなかった
- ・ ネットで調べて、放射能が危ないということだけで、どういったものかというのは全然分からなかった
- ・ 食物では、どのくらいの数値でどのくらい影響があるというのは結局分からない
- ・ どのくらい食べると影響があるのか、どういう影響があるのかは実際は分からない
- ・ 値が上がったことは知っていたが、どこまで上がったら危ないという情報は分からなかった
- ・ 市から公表されている値より高かったので、できることがあるならしたかったが、何をしたらいいのか分からなかった
- ・ なるべく窓をあけないで過ごすくらいのことしかできることはなかった
- ・ 誰も経験したことがないので、当時は全然どうしたらいいか分からなかった
- ・ （被害を小さくするための）対策の情報があまり入ってこなかった
- ・ 線量の基準について、どうやって決めたのかを誰も教えてくれない
- ・ 知り合いから「どうすればいいの」と聞かれたが、放射能に関して分からなかったので答えられなかった
- ・ 最初のころは何がどこで起こっているのかが分からなかった
- ・ 放射能の影響が分からないし、発がん性があるのも科学的な根拠があるわけでもない
- ・ 放射能のバッジを調べても、別に高い数値が出るわけではない
- ・ 当時は、どの物質がどうかという話は出なかった
- ・ 何がどのくらい飛んできたかという情報はない

- ・ 将来どうなるかというところまでは何とも言えない、分からない状態
- ・ 自治体もちゃんと動いていたのかどうか、何をしていたのか全く分からなかった
- ・ 発電所自体の状況はどなっているのか、一定の収束はついたのか、また危なくなるのかというところは分からない状態だった

知りたい内容

- ・ 戻る基準を教えてもらいたい
- ・ 東電社員など、放射線を浴びた人がどうなのかは心配
- ・ 福島第1原発だけのせいで、どれだけなくなっているのか、避難しているのか、移転したのかが知りたい
- ・ 原発が停止しているのは言っているが、これ以上何か悪化したり、解体中にあるのではないかという心配がある
- ・ 放射性物質がこれ以上広がらないということが分かれば安心できる
- ・ 健康への悪影響を説明していない
- ・ どうしたら防げるのか
- ・ 毎日数値は出ているけれど、本当にどのくらいな感じなんだろう
- ・ 3.11の時の被ばく量は、飛行機に乗った時の被ばく量と比べてどのくらいなんだろう
- ・ 浜通りにいたらどのくらいなのか
- ・ 数値が出るが、具体的に何をしましよとか、食べたらいよいよとか、そういうものがあれば実践していたと思う
- ・ がん検診の手伝いで放射線量の害がないことを伝えていたが、それ以上の知識はなく、原発の事故の放射線量はどのくらいだったのか気になった
- ・ 本当に危ないラインというのを教えて欲しかった（ラインがあいまいで、全然発表されていなかった）
- ・ 高いことは分かるが、むしろ危ないとか、健康に異常をきたすといった書き方をしてもらった方がイメージできた（すごく不安になったかもしれないが）
- ・ 記事には、聞いたことのない放射性物質中のいろいろなものが出ており、どれが人体にとって悪影響があるかに関心があった
- ・ 軽度な量を浴びた自分にどういった影響があるのか、あまり自分に即したものがない、分からない
- ・ 現状、どれだけ復興されているのか、人口はどれくらいかなどを知りたい
- ・ 廃炉を進める中でなにかあったら開示してくれるのか
- ・ 原発の処理について分からないことがいっぱいあるけど、情報を開示してもらいたい
- ・ 廃炉に向けての情報はきちんと出してほしい
- ・ いいことばかりではなく、危険なことがあるかもしれないことも伝えてほしい
- ・ 10年、20年経った頃に本当は影響があったとなるのは一番怖いので、情報としてもらえたら良い
- ・ 今後大丈夫なのか
- ・ 食べ物については何が起きているか分からなかったなので、全然気をつけていなかったが、ちょっと教えてくれたらよかった

- ・ 震災後からしか調べていないので、もともと高いものなのかもしれない、なんとも言えない
- ・ 広島県も調べたらよいのにとっていた
- ・ 全国各地で調べて、その上で高いところと比較をするということがあってもよいと思うが、そういう情報はないと思う

自分で調べた内容

- ・ どれくらいの被ばく量だとどの程度まで危ないのか、どこまで避難ができていいのか、一時帰宅できるのかを細かくチェックした
- ・ チェルノブイリ事故について書かれた書籍を買って、被ばくしたときどうなるのか、どういう症状が出るのかを調べた
- ・ ネットで「安全な放射能の量はいくら」といったことを調べている
- ・ テレビで放射線の説明を見て、自分でも調べて、自分なりに納得した
- ・ 年数を追うごとに、自分でメディアから情報を仕入れて納得した

隠されていた情報

- ・ 1か月後くらいに原発も秘密にされていたと分かった
- ・ 現在でも細かいことは伏せているところがあると思う
- ・ 1年も2年も経ってわかってきたことが結構出てきている
- ・ 第一原発の周りの部分の情報は出てこない
- ・ 第1原発のそばの放射線量は、当時、正確な発表がなかった
- ・ どれくらいの人被害を受けたのか心に引っかかっている（やっぱり伏せているのかなと思う）
- ・ 国は、原発が爆発した当時とか、メルトダウンではないと言っていた
- ・ 意図的かどうかはわからないが、かくしていた部分はあるし、正直に伝わってこなかった
- ・ （メルトダウンではないと言っていた）上の方の言葉は加工してあったので、どこまで正直に出してくるか分からないところが心配
- ・ 福島でも最初は何も問題起きてませんと言ったけど、調べたら異常が起きていたのを聞いて、ちょっと怖い
- ・ 人が住めるようになるのはいつかという情報は知られていない
- ・ SPEEDI でどこの線量が高いというのは分かっていたが、公開すると人の移動に混乱が起きるからだまっていたと後から聞いた
- ・ 裏切られた感がある
- ・ 伝えたほうがよかった、伝えてほしかった
- ・ 南の方に殺到したり、大熊の人たちも線量が高い浪江の方に移動してしまった
- ・ 知り合いの伝手で那須に避難したが、後になって那須の線量が高かったことを聞いてショックだった
- ・ 最初、風の流れとかを大々的に言わなかった。言ってくれば早めに逃げる方向も分かった
- ・ 避難指示が出て、距離を確認したところ、飯館村は外れており、全然風向きという話はなく、普通に家に帰っていた
- ・ SPEEDI の情報は公表されなかったけど、風向きの影響で飯館が入っていた

- ・ 飯館は30キロ以上離れていたから直ちに影響ないって言われたけど、放射線量が高いところもあったので、政府に働きかけして最初は自主避難が呼びかけられた

信頼できる情報

- ・ メディアをうのみにするのではなく、海外を含めた専門家が言っている根拠がある情報を信用していた
- ・ 当時はニュースで言うことを信じていた
- ・ 放射線管理者の人から、管理区域の線量ではないので大丈夫という説明を聞いた
- ・ 市役所の人さえ、利害関係が入っている、都合の悪いことはなかなか言わない
- ・ 県が作ったものや東京で作ったもの（情報）をどう判断するかは人それぞれ

役立てている情報

- ・ 各地域の線量がニュースとかでやっていた
- ・ 各地の放射線量は毎日出ているし、町でも1か月まとめて情報を出しているのを見ている
- ・ 天気予報と一緒に今日の放射線の濃度をテレビで毎日放送していた
- ・ 地元新聞には、放射線量とかセシウムやヨウ素とか残留物の数値が毎日掲載されていた
- ・ 地元のローカル紙に、原発事故の専門ページがあり、線量も前日のそれぞれの場所で測った値を毎日見ることができた
- ・ マスクだけでは効果が薄いので、濡れタオルを当てると、放射性物質を吸い込む量を緩和できるという話があった
- ・ 報道機関もパニック状態にならないような意味も込めて、放射線は常日頃から誰でも受けているという話をしていた
- ・ 水は大丈夫という情報を見聞きした記憶がある
- ・ 被ばく量の限度を超えた人たちに大きい被害があったことを知った
- ・ 原発の中で、私たちの命を守るために作業してくださった人の方が危ない
- ・ チェルノブイリや福島で、作業していた人たちが数年で命を落とすとか、大量に浴びると起こりうることを知った
- ・ どのくらいだと大丈夫か、どのくらいの基準値であれば安全と言えるのかという議論がテレビで行われていて、考えるようになった
- ・ 不安に思っている人たちの目の前で議論してくれたことと、そういう過程で決まったということを見聞きした
- ・ 大熊町出身の友人は、深く調べて、根拠を出して話してくれたので、信頼性があると思っていた
- ・ 千葉にいても、福島の放射性物質の何マイクロシーベルトというのは出ていた
- ・ 葛尾村に戻る人が少なくなってしまうため、戻る人には井戸を掘りましょうという動きが始まった時に、井戸水についての説明を聞いた

不信感

- ・ 例えば汚染水の処理を、世間に気づかれないうちにこそこそやるのではないか
- ・ 大きな地震のあと大丈夫というけれど、本当に大丈夫？

- ・ 真実が知りたいが、真実かどうかの信ぴょう性も薄い
- ・ いろいろな地区の線量の情報はあり、だんだん下がってきてることも分かっていたが、本当にそうなのかという疑問はあった
- ・ 信じられそうな情報と感じるものはあまりない
- ・ 真実は隠れたまま

東電の情報提供

- ・ 東電は、現状どれだけ垂れ流しているか、どれだけの両をどうしているのかが表に出ていないような気がする
- ・ どこかの HP に乗っているかもしれないが、オープンになっていないので納得されてない、疑問が残っていると感じる
- ・ 公表されていない印象をもっている
- ・ 現状入れない場所があるとか、廃棄物保管庫を放置していたという、隠されている部分がある
- ・ いつまでに何をするというのは、後出しになっている感じがする
- ・ 東電は特に後出しの感じがする。変なものを出したくないというのはあるだろうが、そんなことを言っている状況ではない
- ・ 東京電力の HP を見ても、知りたいことは出ていなかったのもダメだと思った
- ・ 東電の情報は遅いし、後から出てくる情報が多いし、未だに 10 年たっても同じことをしていて、まだ変わらないと感じた
- ・ 東電は、何かトラブルがあった時に、情報が出てきたときには本当はちょっと前からそういうのもあったとか、ちょっと前に検査した時は大丈夫だったという感じで出してくる
- ・ 東電は、正直に情報を出してくれるような感じがしない
- ・ 東電の情報は、ぱっと出てこない（国に報告したこともちょっと遅い、また後からなんだと感じる）
- ・ 爆発の映像の解析で、爆発した本当の場所が分かったり、映像がなかったら東電はどういう発表をしていたのか
- ・ 働いている人たちは、当時も今も一生懸命やっているが、会社として出している情報が本当なのかと試してみたい
- ・ 東電関係者が避難所で説明したのは「戻るめどは立ってません」のみ
- ・ 当時（事故前の見学時）は、99.999%爆発しないという説明があった
- ・ 福島高専では特別な授業があって、東電は隠していたわけではないが、聞かれなかったから話さなかったところがたくさんあるというのを授業で知った
- ・ 東電がまだ話さないことがあるのではないかと
- ・ 震災前のラジオで、原子力は安全ですという内容が毎日朝流れていた
- ・ エネルギーフェアの手伝いをした際、東京電力のブースで安心安全をアピールしていた
- ・ 東電は、爆発する前から SPEEDI の結果では風向き次第で飯館に来るというのは分かっていた、という話を聞いた
- ・ SPEEDI の情報は公表しないで、隠し通した
- ・ 放射線が悪かったんじゃなく、東電の管理が悪かった

- ・ 東電が、爆発しなくても、試験結果くらいの情報は先に早く押してもらえれば、これほどまでひどくならなかったと思う
- ・ 東電は来て説明したが、放射能の説明ではなく、除染や補償の話だけだった
- ・ 地元の人と東電の人の差は大きい
- ・ 東電と村は補償の話が多い
- ・ 仮設住宅に居た時、東電が、現在の原発の状況を定期的に説明に来ていた
- ・ 東電が一番数値の高いデータを握りつぶした
- ・ 発表されている数値が意図的に改ざんされている（噂）
- ・ 後から検証したらやはり改ざんがあったことが判明している

環境省情報の評価

- ・ 環境省の資料には、現実的な数字が出ていてわかりやすい
- ・ 環境省資料には、復興のスピードや、どこまで開通できて、どこまで規制で戻れないかを教えてくれているところがよかった
- ・ 環境省のHPも現状どうなっているのかを知ることができる
- ・ 環境省のHPは分かりやすいし、優しいイメージ
- ・ 国も処理水の話では発信が遅い
- ・ 環境省のサイトは、最初の入り口として見た
- ・ リンクしていた双葉町長の手記に、放射線の世界的な数値と日本の基準値との比較の資料が載っていた
- ・ 環境省の廃炉に関する情報は、見ている人には伝わっている

専門家の情報

- ・ 専門家の方でもやっぱり前例がないと言い切れない部分が多かった
- ・ 爆発した段階で「ただちに影響はありません」と報道され、大学の先生などの説明で、「直ちに影響があるものではない」ということしか言わなかった
- ・ 専門家の話は、具体的にどうするのかという説明がない
- ・ 医者とか専門家が一番信頼できる情報
- ・ 生協は陰膳調査でよい取り組みをしていると思っていたが、福島大学の先生が（トリチウム水は危険という内容の）講演をしている
- ・ 正しく知ってもらうための説明会も、福島大の先生が講師をしているが、情報共有がないと感じる
- ・ ここに来たえらい先生は、放射能の影響はない、40歳以上は出ないと、ずっと言っていた気がする
- ・ 原爆病に味噌が効いたという先生がいて、発酵食品をとって免疫をあげようという話を聞いた
- ・ 医師の話はみんなに伝わると感じた
- ・ 医師が話したことは伝わったと感じる
- ・ 放射能の専門家というがちがちの人が話したのは難しくて伝わった感じはしないと思った
- ・ 医師でも、放射線の専門医の話が一番伝わった

- ・ 福島医大の先生の、広島の前爆で差別被害にあった母親たちが健康に気をつけて長寿を目指し、実際に健康長寿地域になった話はとても勇気づけられた
- ・ 福島に住んでいて、事故後避難しなくても大丈夫かをどう判断したかという話も説得力があった
- ・ 同じ体験をしたからこそ伝わってくる
- ・ 日常生活での被ばくの比較や基準値の設定の意味や説明は、どの専門家の話も同じ(ただし、分かりやすさはそれぞれ)

その他の情報源の評価

- ・ 自治体の HP でも現状を伝えていて、少しずつ復興してきていると感じる
- ・ 自治体や政府から出てくる情報は、ある程度信頼できる(それしか情報源がない)
- ・ 消費者庁が配布している Q&A は業務では説明に使うが、日常で活用したことはない
- ・ 農水省からの話はない
- ・ 市役所の話には判断がない
- ・ 役所の文書は回りくどい言い方

学校教育

- ・ 学校で放射線の授業はなく、結局謎のまま
- ・ 学校で放射線の話はなかった
- ・ 積算線量計を渡されるときに、学校で説明があった
- ・ 学校が始まると、市や国から文書が届き、小学生の子供には積算線量計が配られたり、長袖長ズボンで登下校して、体育が行われなかった
- ・ 給食で使う食材は測定したものを、基準をクリアしたものをすべて使っていきますという説明文書が届いた
- ・ 当時はみんな不安だったと思うので、学校でみんなで知ることができたら良かった
- ・ 学校で放射線の勉強は全くやってない
- ・ 放射線教育をやると聞いていたが、冊子や教本はあるものの、ただ配られるだけ
- ・ 福島県内の児童は、5年生になると、三春町のコミュタン福島に学習旅行に行っている
- ・ 中学校の授業の中で放射線について学んだ
- ・ 放射線に関する授業を受けた
- ・ 学校の教材でもらった資料(1回レントゲンをとったらこのくらい浴びる)を見ていた
- ・ 福島高専だけ、特別に放射線のコースや防災の授業があって、知識を得られた

不安になった情報

- ・ 妻から原爆の話、命にかかわる問題だからと言われた
- ・ 知り合いの東電社員に、放射線の可能性があるのではないかという人がいて、テレビの情報で出てきている
- ・ 3月11日に放送するテレビで、10年経っても避難指示のところには防護服を着ないと入れないとか、何時間以内しか行ってはいけないと聞いて、危ないと感じた
- ・ 連日テレビの欄に放射線量が載るようになって、福島はまずいと感じるようになった

- ・ 福島に残った同世代の友人たちが悪い積み重ねをしているかもしれない、どこにでてくるのか分からないのが一番怖い
- ・ 避難していく人の話を聞いて、ここには死んでしまうのか、汚らわしくなってしまうのかという印象をもっていた
- ・ 健康に対してすぐに影響が出る数値ではないと表現され、安全と言い切ってくれなかったので、不安材料になった
- ・ 上限を超えていないが、明らかに高い
- ・ 人工的に高くなっているが、将来の影響は誰も分からない（今も分からないと思う）
- ・ 汚染水を海に少量ずつ出すしかないということを聞いて、すごく不安を覚えた
- ・ 県内いたるところに線量計が設置され、ニュースで放送され、原発周辺の数値は全然レベルが違っていたので、行けなくなったと感じた
- ・ 情報が無いというのは不安だった
- ・ 全く聞いたことがない単位だったり、実際に知らないものは、やっぱり怖かった
- ・ 今回の事故は前例がないので、健康被害がどの程度、何年後にどうなるのか分からないという点で確かに不安
- ・ 一番不安を感じていたのは避難する車の中で、本当に死ぬんじゃないかというが怖くてよく覚えている
- ・ 当時、何か情報があったら、もう少し不安は取り除かれた状態でいられた
- ・ これが正しい情報だと与えられることはなかったなので、それも不安の一因だった
- ・ 濃い放射線量が高い空気が風で南下していて、それが直にいわきにぶつかって、自分の体にぶつかっているような感覚だった
- ・ 線量計が測れる限度よりも振り切れたのを見て、ちょっと不安だった
- ・ 健康影響で不安だったのは、今すぐ何が起るのか、何年後かに発症するのかなど
- ・ 「直ちに健康影響はありません」の言葉は正しいが、不安だった
- ・ 知識がなく、避難するときにはただただ怖いだけだった
- ・ いろいろなうわさが飛び交った（うがい薬を飲むといい、昆布を食べればいい）
- ・ やっと手に入れた昆布を水に浸して柔らかくして、生きるためにかじったことは忘れられない
- ・ ちょっとでもあると恐ろしいもので、少なくとも体に蓄積されるとがんになってしまうイメージ
- ・ すぐ溶けると思っていたが、テレビで見る避難者は溶けているわけではなく、イメージとは違っていた
- ・ 原発の構造に関する知識はなかつたが、一回爆発して、さらに爆発が続いて、危ないのかという気がしていた
- ・ また爆発が起きて値があがるのではないかという不安はあった（現状というより、今後どうなるのかということには不安があった）
- ・ 福島市内に落ち着いた後、もっと遠くに逃げた方がよいという情報があつて、新潟まで避難した
- ・ ヨウ素を飲んだ方がよいと言われて、飲んだからどういう効果があるかも全然分からないまま、ヨウ素を求め続けていた

- ・ 線量計で目に見えると、数字が少なくても、知らない人は不安になる
- ・ 数字の小ささとは関係なく、知らない人にとっては要らない恐怖感、不安を煽る

不安が軽減した情報

- ・ 日々放射線量の数値を見て、今日はそれほど高くないなど不安がなくなっていった
- ・ 放射線量を毎日見て、低いとなんとなく安心した
- ・ 空間線量を見ても、3、4年前から出ていない
- ・ 人体に影響が出るレベルの数値がなくて、そこまでは達しないと理解
- ・ 毎日ニュースで今日はどれくらい放射線量があるかが流れて、自宅の地区にそんなに多く来ないことが分かって戻った
- ・ 福島県産のもの印象は良くないみたいだったが、食べられることは分かった
- ・ 除染作業も進んで何キロ圏内で解除されていくという状況になって、気にしなくなった
- ・ 放射能の情報は、最初は避難について、次に食べ物などの影響としてアップデートされた
- ・ いわき市あたりはそれほど心配がないと思ったのは、ニュースと市役所の情報を照らし合わせて
- ・ 放射線の計測器の数値も下がってきているのが目に見えて分かったので危機感も薄くなっている
- ・ 検査をしていて大丈夫とか、TOKIO が米を推している安心ですよと言うようになって大丈夫と思った
- ・ このぐらいの数値なら高い、低いというはおおよそ把握できるようになった（半年後くらいに）
- ・ テレビで頻繁に伝えられなくなってきたので、だんだん影響はなくなってきたと思った
- ・ メディアで、レントゲンでどのくらいの被ばくの量があるというのは、結構安心した記憶がある
- ・ 原発内のコンビニの店員の記事を見て、現場で頑張っている人もいることを知ることができた
- ・ 勉強すると、あくまで可能性だけであり、当時心配しすぎだったのではないかと思う
- ・ 環境や健康への影響について心配していないのは、高専と大学で受けた授業がすごく効いている
- ・ 県外に避難する車の中で爆発の映像を見て、「私、死んじゃうの？」と親に聞いたら、「大丈夫だよ」と言ってくれた
- ・ 自宅に戻ってきてからは、放射線より断水の方が大変で、不安はなくなった
- ・ 不安がなくなったのは、当時の記憶が少しずつ薄れていっているため、検査を受けられること、健康に問題が出るのは大量に浴びた人ということを知ったから
- ・ 親が情報を仕入れてきて、車の除染や自分の被ばく検査と除染などの対応をしてくれていた
- ・ 今あまり何も考えずに生きているのは、当時大人がいろいろ走り回って、子供に不安を与えないようにしてくれていたのが大きい
- ・ いろいろな先生が同じ表を出して確定的影響と確率的影響と言っているのだから、影響がないというのは分かった
- ・ 体外に排出されるという知識から大丈夫と思った

- ・ 仕事で放射線量を測ることができたことと、勉強する機会ができたことが大きい
- ・ 放射線の専門医から、放射線のリスクの量と、医療などで使われている量の比較を説明され、分かりやすかった
- ・ 自治体の WBC で検査する機械があり、少し安心した
- ・ ゲルマニウム半導体検出器でいろいろなものを測ったりしていたので、出ないだろうとは思っていたが、実際 ND という結果を見ると安心に繋がった
- ・ 除染が進み、基準値を外れる食べ物がなくなってきたり、線量が低減したりしたことで不安はなくなった
- ・ 放射能のことはあまり詳しくなかったのが、だんだん知ってきた
- ・ 福島市は 80 キロ離れていて、それだけ離れていれば心配はないと専門家が書いていたような気がする
- ・ 事故当時、外にいたから具合が悪いという話はなかった
- ・ 4、5 月ごろになって、現状の状態がつづくのであれば、すぐ具合悪くなることもないだろうし、将来影響もおそらく問題はないだろうと思った
- ・ 大丈夫と思った根拠があるというわけではない
- ・ 郡山市の空間線量は低かったので、不安はなかった
- ・ 直接食べてすぐ影響が出るものでは当然ないと思っており、飲み物や食べ物について不安はなかった
- ・ 驚くような、思っていた情報と違うようなことも、そんななかった
- ・ 自分が専門家から教わって、何か食べても流れる（排出される）から大丈夫とか、直接話を聞ける機会がもっとあった方がよかった
- ・ 妹の夫が原発で働いていて、内部被ばくしているかどうか、検査して結果を教えてくれる
- ・ 内部被ばくってどれくらい何かを食べて、どれくらいあるとか、かみ砕いて教えてくれる講習会に参加した
- ・ 住んでいる人を見れば安心できる
- ・ 胎児の先天性奇形が増えると言われていたが、別に根拠がない

気にしている情報

- ・ 何かあるかわからないというのが、まだ終わったわけではないのが、怖い
- ・ 廃炉についての情報は一応出てはいるが、処理に向けての動きはあまり見えない
- ・ たまにロボットが入ってどうしたという情報が出る
- ・ まだ安全と言えるのかどうなのか、心配
- ・ 気にしていた情報は、避難者の仮住まいがどうなっているか、除染作業がどれくらい進んでいるか、食べ物の影響が戻って安心ということが分かるか
- ・ チェルノブイリで被ばくしてこういう症状が出る、放射能が流れていくから気を付けなければいけないなどのニュースがあった
- ・ 福島第一をいつまでそのままにしておくのが疑問
- ・ 福島第一が、10 年経っても特に片付く様子もないし、何も進んでないのが気になる
- ・ 当時、対策次第では防ぎようがあったのか、それとも予想しなかった被害で、どうにもならなかったのが気になる

- ・ 福島以外の地域の人たちに、どういう風に放射線のことが伝わったのかが気になる
- ・ 浜通りでも戻れるような場所の話を聞かなくなっているのも、県外などに避難している人達に伝わっているのかが気になる
- ・ 福島県人は勉強する機会があるが、県外の人にはそういう機会があるのか
- ・ 県外の人はどう思っているのかが心配
- ・ 県外の人はどう見ていたのかということは早い時点から気になった
- ・ 当時から、自分たちのいる状況と、外側で見ている状況のギャップは感じていた
- ・ 県内でも、原発事故が起きてすごく危ないという印象を持たれて物流が止まってしまっていた
- ・ ニュースを見ていると、何かすごく危険だということが流れているが、自分は原発近くについて測定もしていたので、ギャップを感じた
- ・ 工場地帯の土壌が汚染されるのではないかと、どう復旧したのかは気になった
- ・ 避難で人がいなくなったりしたので、どうやって直していくのか、治す必要があるのかということは気になった
- ・ チェルノブイリと福島は、事故の内容も取られた対策も違うが、比較ばかりなされて数字が独り歩きする問題がある
- ・ 数値だけが独り歩きすると、誤解が広まるのではないかと、意図していないような形で情報が使われるのではないかと

提供すべき情報

- ・ 福島県というだけで一緒くたになっていて、受け入れられてない部分はある
- ・ 福島以外の地域では情報に接する機会が少ないので、福島県産の野菜の生産について説明する
- ・ 数値だけではなく、地図で危険区域を表示する
- ・ 原発の具体的な、どういう処理を今していますという情報も当時より少なくなっているのも、現在進行形でやっていることや徐々に安全になってきていることの情報があると良い
- ・ このくらい時間がたてば安心とか、不安なら検査するとか、何かサポートがあったら、漠然とした不安を抱えなくても済むと思う
- ・ テレビでも何でも、特集を組んで、今こうやっている、だから大丈夫という情報発信をしている感じはない
- ・ 原発事故は、自然災害で起きたことだったので、どうしようもなかった、想定外だったということを知ってもらいたい
- ・ 10年目にして、ほぼ復興も進んでいると思うので、何ができるのかという情報提供があればよい
- ・ 経済産業省も講演会や座談会、ウェブやSNSなどやっているのも、そういう情報を知ってもらえれば分かってもらえるのでは
- ・ 最近の説明会で、事故当時小さかった学生もいるが、話を聞くと危なくないことも分かるし、だいじょうぶだって分かったという感想を書いたりするので、情報の伝達は大切
- ・ 原発のある国に住んでいるのだから、線量計が何を測っているのか、この数字の意味はどんなのかをみんなが勉強するべき

- ・ 線量計の数値をいつも見られたら目安になる
- ・ 日常の線量、浴びている放射線量はこのぐらいという感覚を持った方がよい
- ・ 原発で何かあった、普段はこうだということをみんなが感覚的にとらえられる、数字が見えていた方がよい
- ・ もう少しわかりやすく、今もこういった放射能が危ないと警告してもらえると、受け取る側もわかりやすい
- ・ トリチウムとか半減期とか、初歩的な情報を未だに理解していない人はたくさんいる
- ・ 震災前はどうかだったか、どこまで近づいているかといった情報を、少しずつでも取り上げてもらってもよい
- ・ そこで生活している人のポジティブな情報は世にあまり出てない
- ・ 現地にきて、自分の目で見て、初めてポジティブな情報を知った
- ・ ポジティブな明るい情報をもっと世にでたら、見方が変わるのではないか
- ・ チェルノブイリの人々が、帰ってはいけないところで生活している人たちの数値や健康被害があるかないかを示すとよい
- ・ いくら平易な言葉で言われても、結局数字だけでは分からない、身近な人と比べてくれると分かる
- ・ 漁業については、放射線が高くて出せないのではなく、量が確保されないため
- ・ 汚染水については情報がたくさんあるので、正確性が問題
- ・ 名称「福島事故」の使い方が問題（誤解を招く表現）
- ・ 東京電力が起こした事故であることも知られてなかった
- ・ 東京に送る電気をつくっていたことを知られていなかった（最近は改善）
- ・ 福島県全体の放射線が高いと思われている
- ・ 科学的に伝えることが必要
- ・ メリットもデメリットも現実味を帯びた情報が必要

情報提供手段の提案

- ・ テレビCMなど、見る機会を増やす
- ・ どの地域にどれくらいの放射線があつて、どれくらいいくとだめなのかのイラストや写真があるとよい
- ・ 義務教育で、教えられていればよい
- ・ 中学生の自分にも分かるように説明してもらいたかった
- ・ 情報が簡潔に入ってきた方がいいと思うので、ニュースより映画のようなわかりやすいメッセージのものがよい
- ・ 教科書に載っているような小難しい感じで、文章ばかりではなく、映画や絵本のような形で、ぱっと見て分かるような感じのものがよい
- ・ 福島フィフティーンを見ると、隠そうとするのは上部の人だけで、実際に現場で働いている人は、本当に一生懸命やってくれたことが、しっかり伝えられたらよいのではないか
- ・ サルでもわかるニュースみたいなものが欲しい
- ・ みんなにわかりやすく伝えてもらえれば、考え方も変わってくるのではないか。伝え方次第
- ・ どんな人が話すかが重要

- ・ 健康被害については最初はずいぶん言われたが、他に心配事があったら頭に入ってこない
- ・ WBC を受けて数値を聞いたところで、説明を聞いたところで頭に入らない
- ・ そうした情報を受け入れうるだけの環境が整っていなかった
- ・ 住むところや食べることの安全が確保されないと、学術的なこと、数字的なことを教えられたところで、頭に入るわけがない
- ・ 最悪のことを言われると意外に肝がすわるので、そういう風に言えばよかったのではないか
- ・ 情報提供する側は提供しているが、受け取る方が受け取れない
- ・ いかに聞く努力、知る努力をするべきかはとても大事
- ・ 新しいメディアを利用するとよい
- ・ 学校教育の中で楽しく伝えていく
- ・ 高齢になるほど、聞き入れられない、勝手に決めつけている（受け付けない人もいる）
- ・ 地域によって特徴が違う（全国一律は難しい）
- ・ 自分が伝えられるように、根拠となるような冊子があるとよい
- ・ 理屈が通る話がよかった（心配しなくてよいと感じる）
- ・ もっと分かりやすい言葉で話してほしい

事前の知識

- ・ 風向きが影響することは何となく前から知っていた
- ・ 下手に動くよりも、室内に居る方が安全だと思っていた
- ・ 福島原発のことは、親から、爆発する可能性、放射能が漏れる可能性があるのでは、いわき市は電気代が安いという話を聞いた
- ・ 学校で習った知識は、原爆の写真を使った授業で、自分も将来そうなるのかと怖かった
- ・ 担任の先生から、原爆について社会の授業で習った
- ・ 原発のおかげで、富岡や大熊町は潤っていて、原発があるところは楽しいと思っていた
- ・ 原発が何かも、福島県に東京電力の原子力発電所があることも知らなかった
- ・ 原発反対を聞いても、原発がなぜ悪いかというのが分からなかった
- ・ 事故前に放射線の知識は全くなかった
- ・ 福島県内に原子力発電所があることは全然分からなかった
- ・ 年配の人は影響が出る前に死ぬから大丈夫だとか、放射能は普段もあり、事故で高くなっている状況だが、すぐに影響が出るレベルではないというのは分かっていた
- ・ 直ちに健康状態が悪くなるという状態ではないだろうと何となく分かっていた
- ・ 原発の避難訓練で、座学的なもので過去の事故を知っていた
- ・ チェルノブイリは事例として知っているが、一概に福島と比較できないと思っている
- ・ 日常生活において、事故の前の空間線量がどのくらいを知っていた
- ・ 事故後高くなったが、海外にはもっと高い場所があり、人が住んでいることを知っていたので、大丈夫だと思っていた
- ・ 自然界にもあるという話を聞いたことはない
- ・ 原子力防災訓練の時に、大熊へ行って、発電所の場所は知っていた
- ・ 事故後に放射能の話を知ったから分かるだけで、それまでは分かっている人は分かっているという状況

- ・ 万一事故が起きた時はもう住めないのではと思っていた
- ・ 放射能汚染になりかねない、原発が爆発したら大変なことになると思っていた
- ・ 雨が降った翌日は絶対外に出ちゃいけないと言われた
- ・ 広島長崎の直後に黒い雨が降ったと聞いた
- ・ メルトダウンはパニック映画で知っていた
- ・ 放射能プルームは知らなかった

避難の弊害

- ・ 山菜採りなどを主にしていたお年寄りや、山歩きができなくなって弱ったという二次被害があった

風評被害

- ・ 検査をきちんと経た上で出荷していることが言われているにもかかわらず、汚いみたいと言われてた
- ・ 今回のオリンピックで、直後ほどではないにしても、風評被害は今後もあると感じた
- ・ アメリカのソフトボールの監督が「福島の桃がおいしかった」と言ってくれてうれしかった
- ・ 魚への影響があるし、近隣の県からも評判が悪くなるのかと思う
- ・ 福島県産を毛嫌いして食べない県民も少なくなってきた
- ・ 冷却水の処理で、漁業の組合とかももめているという話は聞く
- ・ いくら大丈夫だ、影響がないと言われても、気持ちの良いことではないと思う
- ・ 福島出身ということで、嫌なことをされたとか、嫌な気持ちになったことは一切ない
- ・ 「福島産は危ない」という人とはここ数年会ったことがない
- ・ 自分たちが被害が少なかった側なので、気を使って、帰還できない地域の人とあまり深入りした話はしない
- ・ 東京で福島県民を断るホテルがあったというニュースを見て、ショックを受けた
- ・ 母親は福島県産を率先して買っていた
- ・ ニュースで、線量を測定して厳しい基準でやってますと知って安心していたのと、福島県を応援したいという気持ちで
- ・ 県外の人に福島県民だと言いたくないという子もいた
- ・ 自分のように、言っても大丈夫というきっかけがあると言いやすくなる
- ・ 両親が、子供が食べる食材や水にもものすごく気を配っていて、その影響を受け継いだ
- ・ 汚染されたのは福島県だけではないのに、報道は福島だけと伝えていて疑問を感じた
- ・ 震災は原発だけではないのに、福島ばかり復興復興と言われているような気がする
- ・ 東京にいるときは福島県産を見なかった
- ・ 原発事故が起きた時は誰も信用できなかったのも、福島のものは何も食べてなかった
- ・ お盆に帰省した人たちが、実家でもらったコメをサービスエリアのごみ箱に捨てているというニュースがあった
- ・ 勘違いや情報が言われたのと違ったりすることも結構ある
- ・ 放射線量が高くて魚が食べられないという誤解が広まっている
- ・ 偏見を取り除くには生の情報が重要

社会の無関心

- ・ 福島から遠くなるにつれて、福島原発のこの意識が全然ない
- ・ 復興することを忘れられるんじゃないかという心配はある
- ・ (抵抗感が) 薄れていくというより、世間の人の話題がどんどん移っていくので、放射線についていう人がなくなった

帰還判断に関わる情報

- ・ もっと早くに対処してくれていれば、福島に早く戻れるきっかけができたのではないか
- ・ この辺りだったら心配がないところを太鼓判押ししていただけると、戻る基準になる
- ・ 完全な解体ではなく石棺で蓋をして、空気ももれないから大丈夫と言われれば戻ろうと思う
- ・ 医者や誰でもいいから、太鼓判押ししてもらえると、戻る基準になる
- ・ 当時は公園などにも線量計がおかれていたが、今はないし、放射線にまつわることはほとんど聞かなくなった
- ・ 放射能を測るものを設置することは聞いたが、断水していたのでしばらく戻らなかった
- ・ 試験栽培をやっていなかったら、ここに居なかったかもしれない
- ・ 農業をやれることがわかったからいるが、そんな情報も何もなかったら、ここにいなかっただろう

情報を集めていない人の気持ち

- ・ そもそも日常的に放射線の話はしていなかったし、特に何かを調べたり話したりということはない
- ・ 情報が入ってくる頃には自分の中で安心してしまって、自ら調べなかった
- ・ あきらめ、今更心配してもしょうがないみたいな気持ちもあった
- ・ 怖いから調べたくないという気持ちと、周囲が大丈夫とっていることから積極的に情報は集めなかった
- ・ 新生活で手一杯で、気づいたときにテレビをつける程度だった
- ・ 除染もされて落ち着いてきて、それほどきにしなくなった
- ・ 放射能の不安もあったが、水がでない、道路が普通に走れないなど生活の方が大変だった
- ・ 住宅ローンを組んだばかりで、住まない家に払うのか気になっていた
- ・ 放射能の影響がどれくらいあるかを自分で調べたりしなかった
- ・ 気になる人は調べて、結局ネガティブなことばかりが残った
- ・ そもそも分からないので、「安全です」というならそうなのかと (受け入れた)

安心、気にしていない理由

- ・ 避難指示も出ていないし、皆がいたので、大丈夫なんだろうと判断していた
- ・ かなり放射能の量が減ったので、防護服を着なくても入れる場所が増えているというのは見た
- ・ 中間貯蔵の場所に行くことがあるが、空間線量がどうとかは全く気にしていない
- ・ 解除されたら大丈夫

- ・ 校庭に放射線を測る機械はおいてあったが、数字はあまり見ていなかった
- ・ 10年経って、今も元気なので大丈夫だろうと思っている
- ・ 娘が小さいときにこれだけ気をつけていたから大丈夫というゆとりも出て、10年経って戻ってきた
- ・ (除染した)土を持っていってもらって安心した
- ・ 今は全然関係なく、田んぼや畑、山のもの、海のを、放射能はもう安全と言われているので、気にせず食べている
- ・ 自分で数字を見て判断したのではなく、周囲が大丈夫だから大丈夫と判断
- ・ 自分の中でも時間がたてば大丈夫という意識があった
- ・ 作業者はもっと大変なのだから、自分は大丈夫と思っていた
- ・ 自分は全然放射能をきにしていない
- ・ 今でも元気なので、キノコもちょっとぐらいならいいという考えなので、山で採ったものも食べている
- ・ 町の広報や説明会で何Bqでしたと言われるが、関心をもって気をつけるレベルではない
- ・ 人体に直接影響がなければ、聞き流すという人が多いのではないか
- ・ ずっと被災者っぽくない、中途半端だなあと感じていた
- ・ 原発反対派の存在を知ったのは事故後。自分自身には意見はなく、反対派の主張に賛同できなかった

政策

- ・ 不安を感じて自主避難した人に対して何のサポートもなかった
- ・ 除染が遅いとか、汚染水を海に流したとかは問題
- ・ 福島市は、子供のいる家庭が自主避難する際に補助していたが、成人している家庭には情報も支援もなく、自分で判断して動くしかなかった
- ・ 余分な荷物は持たない方が迷惑にならないと思ったら、避難が長期化し、自分の行政の避難所に入れず、支援を受けられなかった
- ・ 誰も責任をとれないことを、責任のとれない形でやって今に至っている

復興

- ・ 親戚から、復興が進んでいるようで進んでないという話は時々聞く
- ・ 溜まった汚染水をどうするかという問題があるので、まだ終わっていないと思う
- ・ 復興と言うが元通りにはならない
- ・ 正解は、少し大丈夫なレベルになったということ (真実をちゃんと説明してほしい)
- ・ 元通りではないが、住めるレベルまで戻したというのが真実
- ・ (復興) 県外から移住してきた人の方が何とかしようとしている
- ・ 福島県の復興は何年かかるか分からにというのが一番大きな問題
- ・ 福島県に住んでいると、価値にあまり気づけなったりするが、県外の人には魅力的に見えたりするようだ
- ・ トリチウム水に関しては生協が署名活動をしていて、危険だと思っている人が多い
- ・ トリチウム水の報道は、安全という話より、流します、決まりましたという内容

- ・ 次にどこへ持っていくのかを考えなければいけないが、その後のことは確認していない

避難指示

- ・ 積算の放射能をどれだけ受けることになるから、それ以下なら大丈夫という基準値的なものが示された中で、それよりかなり少ないというところの判断があったと思う
- ・ 日本では 30 キロ圏内に避難指示だったが、海外には 50 とか 60 という所もあるらしい
- ・ なんで 20 キロなのか、なんで 50 キロなのかという説明は全くない
- ・ 学者とかが、このくらいの線量で爆発したから何メートル飛んでいくとかの計算をした結果（間違えていたらどうするのと思った）
- ・ 村長は大丈夫だという側だったので、政府に避難しろと言われるまでは避難にならなかった
- ・ 震災 3 日後に消防の人が回ってきて、避難の話をしていった
- ・ どのくらいの量が降ってきたかという詳しい情報は全然なく、ただ避難ということだった
- ・ 国の方からきて、こうだから避難してくださいという話を何回かやった
- ・ 被害を拡大しないように、人体に影響をおよぼさないように（避難する）という説明を受けた

不安な人への対応

- ・ 不安に思っている人にはいくら言っても納得はしてもらえないだろうと思って、話すのを躊躇したことは多い
- ・ 不安な人には、話を聞いてあげるとか、寄り添ってあげることしかできない
- ・ 本当に不安な人には、線量の低い方に避難することも良いことだと思うよとか、自分が大丈夫と書いていても納得させることはしなかった
- ・ 得られた知識で友人に安全とか大丈夫とか言えるようになったのは最近
- ・ 共感してくれているかどうか大きいと思う
- ・ 先生の役割は聞くことと、きちんとした説明
- ・ あんまり知識がないのに応えてはいけないと思うので、知識のある人に説明してもらおう
- ・ 受け止め方が様々なので、同じ情報があっても、そんなにびっくりされるんだなあと思った記憶がある

その他

- ・ 帰還困難区域（避難指示区域）がテレビの情報と実際とが食い違っていた
- ・ 現実味がわからず、何が起きているんだろうという感覚だった
- ・ 地元の友達は生活に慣れて、受け入れるものは受け入れるみたいなスタンスになっている
- ・ 桜の名所があったが、手入れをしなくてダメになったところもあると聞いた
- ・ 自然に分解されていくイメージで少なくなることを期待していたが、少なくならなかった
- ・ ニュースや新聞で、だんだん減るには何万年必要といった情報も出て、あきらめの気持ちになってきた
- ・ 徐々に、とりあえず危険なもので、すぐには消えるものではなく、何十年もかかることを知った
- ・ 子供には外出をなるべく避けるようにさせた

- ・ 事故後、何か怖いことが起きている、起きそうだと感じていた時は外にもあまり行かなかったし、外の物に触らなかった
- ・ 福島に原発があるおかげで潤っていた部分もあったので、ただ被害者というよりは、いい部分もあったという複雑な思いがある
- ・ 原発は、人の生活のためにあったものであり、誰かのせいだけではないと理解している
- ・ 当時、東電の人も生活のためにやってくれたことがたくさんあったと思う
- ・ 帰還困難区域に住んでいた子や、解除されたけれど不安だから戻れないと考えている子はたくさん知っている
- ・ 帰還困難区域に住んでいた子は、諦めて開き直っている子が多いという印象
- ・ 避難して、何度も転校していた、避難所や仮設住宅が変わるごとに引っ越していたという話を聞いた
- ・ 給食は、簡易なものだったり、冷めて美味しくなかったりで、みんな弁当を食べていた
- ・ 給食センターが地震被害を受けて機能しなくなっていた
- ・ 子供たちは、水筒持参で、保護者が良いというものを飲んでいた
- ・ 原発近くの地域の方に行くことには、まだ抵抗感がある
- ・ 自主避難の会が支援して、静岡に子供をつれて保養に行った
- ・ あの事故があったからできた経験や人とのつながりなど、ダメなことばかりではなかった
- ・ 東電職員が、作業着を着て、何年も村のために保守作業から幼稚園の引っ越しの手伝いから、いろいろなことを一生懸命する姿を見てきたので、感謝しかない
- ・ 事故後放射能の不安に関する保護者アンケートでは、不安があると答えた保護者が多かった
- ・ 戻ってきている保護者の中でも不安が全くないという保護者はいなかった
- ・ 保護者の不安は今はあまりなくなった
- ・ 給食は産地がきちんとしたものを出していたが、たまに産地偽装のニュースがあると、保護者説明会をしていた
- ・ 会社の指示もだんだんあいまいになってきた
- ・ 最初、情報があいまいだったのが、だんだん会社でも情報が入るようになって、会社の判断を取り入れるようになった
- ・ 噂で、福島県庁の人たちは事前に情報を知っていて、だいぶ逃げたという話を聞いた
- ・ 病院の先生も、震災直後に突然居なくなった
- ・ 記憶がない若い人たちに経験を伝えていけないといけない
- ・ 制限をして運動能力が下がってしまうより、子供を外で遊ばせたり、福島の食べ物を食べても、将来病気に打ち勝てるような子育てをした方がよいと妻と話した
- ・ 福島にいながら福島のものを食べない姿を子供に見せることが、将来の子供たちのことを考えるとおかしいのではないかという話をした
- ・ 爆発してから、空間線量が高くなるということはあったので、測定をした
- ・ 埃や土に気を付けるようにという話があったが、具体的なことは記憶にない
- ・ 放射能の食についての説明会に参加したが、何を聞きたいのかはあいまいだった
- ・ 山菜とかが大好きなので、1キロ食べるわけじゃないからという理由で食べている
- ・ 放射線量の結果をみないと、牛も処分できるかできないかが分からないから、検査して、全頭処分をした

- ・ ここでもある程度販売できるという見通しもついでから、キノコをやりたいという会社の世話をしている
- ・ 放射能が気になる人はここにいない、遠くに行って帰ってこない
- ・ 心配する話は聞く
- ・ 心配する人ほどテレビのネタになる
- ・ 田舎なので、近所の様子（誰が避難したかなど）も全部入ってくる
- ・ 当時の自分は、心をなんとか平静に保たなければいけない、客観的に見なければいけない、家族がいれば間違っただけではないと考えて、情報を精査していた
- ・ 「大丈夫です、安心です」と「逃げてください」という真逆のことを言われた
- ・ 安心してなのに、今日は荷物をまとめてどこかへ行かなくてはならないという、情報に齟齬、矛盾があった
- ・ 川の魚に放射能でどういった影響ができるのかを内水面水産試験場と一緒にやった
- ・ 魚はどこに何がいるのかという情報を提供し、一緒に行って魚を取った
- ・ 帰還困難区域だったころ、放流する魚を運んでくるのを嫌がった業者もいた
- ・ チェルノブイリでは、淡水魚のデータが少ない
- ・ 自然繁殖の魚と放流した魚が交わらないところに、天然遡上のないものを入れたり、工夫をして検査をした
- ・ 知ろうともしないで、信用しない人もいる
- ・ 自分で考える力をつけるには、情報収集や本当にそうかという自分の経験から鵜呑みにしない態度が必要
- ・ 神奈川の知人から、いつもと違う雲を見たと言った
- ・ 東京とか広範囲に広がって、雲が流れたと言った
- ・ 専門家の役割は未然に防ぐこと
- ・ 結果論は誰でもいえる（専門家に対する不満）
- ・ 政府や官僚など知識のない人が集まってやる会議では対策ができない
- ・ 専門家が集まって被害を少なくするための活動をすれば良かった
- ・ 専門家はインタビューで解説する前に緊急対策を検討するのが優先
- ・ 専門家を招集して対策してほしい

(2) 風評被害に関する言及

差別・偏見

- ・ 福島県出身と言うと、放射能大丈夫と言われる
- ・ 近寄らない方がいいのではという言われ方もした
- ・ 避難時に、福島ナンバーあっちいけという態度をとられた
- ・ 韓国の人から「本当はもっとすごいこと」と言われる
- ・ そういう経験をしたという話をテレビでやっていた
- ・ 友人の子供が山梨の学校でいじめを受けた（「放射能、近寄るな」）
- ・ 福島ナンバーの車で県外に行くと車にいたずらされた（新聞）
- ・ 宿に泊めてもらえなかった（新聞）
- ・ 転居や避難した人がいじめにあった（新聞）

- ・ テレビで引っ越した子供がいじめにあったとか見た
- ・ 韓国は極端
- ・ テレビで子供がいじめられるという報道があった
- ・ 震災前に県外に行った人が、福島出身と言ったら結婚がダメになった
- ・ 避難した人が、学校になじめない、福島から来たと言えない、と聞いた
- ・ 福島県から転校してきた小学生がいじめを受ける DVD を視聴した
- ・ 友人がいじめられた
- ・ いとこが、福島出身といったとき「残念」と言われて傷ついていた
- ・ 友人が福島ナンバーの車を持っていったら、すごく非難された
- ・ 福島ナンバーの車で出かけるといたずらされたという報道があった
- ・ 偏見や差別
- ・ 福島を通過するのいや、荷物や食品もいや
- ・ 嫌な思い
- ・ 汚いもの扱いされている
- ・ 放射能を浴びている感染者みたいに扱われた
- ・ 自分は経験がないが、差別されたという話（うわさ）を聞いた
- ・ 車にいたずらされた
- ・ 福島ナンバーを隠した
- ・ 福島県出身ということが恥ずかしい気がした
- ・ 原発の話になると申し訳ない気持ちになった
- ・ わざわざ原発の話をしないでほしい
- ・ 福島県民として肩身が狭い
- ・ 福島県と県民は他県とは区別されている感じ
- ・ ネガティブな感情を持ってしまう
- ・ 気を使われるのも心苦しい
- ・ 嫌なイメージを持っているのではないかと想像するのも嫌
- ・ 福島に関するニュースを話題にしてほしくない
- ・ 福島イコール汚染されているみたいなイメージ
- ・ 福島イコール放射線
- ・ オリンピックで、福島県産の花を持ちたくないと聞くとショック
- ・ 日本イコール原発事故みたいになっている

経験なし

- ・ 自分の直接経験はない
- ・ 最近はない
- ・ 福島県出身というのに後ろめたさや抵抗はなかった
- ・ 福島出身を伝えると、心配してくれる人が多い（気にせず言える）
- ・ 修学旅行で大阪に行ったとき、隣のおじさんに地震を気遣ってもらって、出身地を言ってもよいと気づいた
- ・ 茨城に行った際に、学校の先生に相談したが、特に何もなかった

- ・ 他県の人から言われて嫌な思いはしたことはない
- ・ 嫌な思いをすることはなかった
- ・ 周囲から言われたことはない
- ・ 福島の悪口を言っているわけではない
- ・ 親友の地元（広野町）に行ったとき、息を止めていた自分に気づいて悲しかった

躊躇する気持ち

- ・ 福島県の人だから汚染されているイメージを持たれないか心配だった
- ・ ネット記事で、福島県出身ということでのじめを受けたという内容を読んで不安になった
- ・ 福島出身ということをお願いしなくなる
- ・ 福島県から来たことを言いつらい、冷ややかに見られるという不安があった
- ・ 自分もそういう扱いを受けるのではないかという不安
- ・ 外に洗濯物を干すことが非国民みたいな感じがかった
- ・ 避難して戻ってきた人に接するのが怖かった
- ・ 避難した側も自分は逃げたという思いもあった（お互い関わりづらくなった）
- ・ 日本の人からも福島が疎まれるという気持ちになる
- ・ 放射線に関する不安よりも風評被害の方が怖かった
- ・ 福島出身と県外の人に言いたくなかった
- ・ 県外避難で、親切にされ、汚れたものを自分たちが持ち込んでいる申し訳なさを感じた
- ・ 新幹線に乗った際、福島県出身と分かったら、みんな嫌がるかなと思って、辛かった
- ・ 娘が、あのままだらお嫁にいけなくなるのではないかと思った
- ・ 当時、友人に応えられなかった自分に対しても悔しい思いがある
- ・ 出荷できない野菜を炊き出しに使っていたことを知ったら、嫌な気持ちになるのではないか
- ・ 福島というと、みんなかわいそうと思う、そう思われているという気持ちになった
- ・ 福島に引っ越すと言うと驚かれる（良い反応ではない）

実態

- ・ 福島県産のものは過去最低価格になっているらしい
- ・ 福島県の食べ物が汚染されているイメージがつくのが心配だった
- ・ 県外で、友達にちょっと怖いと言われた
- ・ 福島県産のものはあまり売られていない
- ・ 福島県産のものが避けられていた
- ・ 知人は「福島の桃を送ってこないで」と言われた
- ・ 米をいつも買っていたのに、福島県民から「食べないことにした」と言われた
- ・ 友人も「絶対買わない」と言っていた人もいる
- ・ 同じ福島県民どおしで、悲しい
- ・ 震災前に採れた米でも、福島県産のコメが売れなかった
- ・ 線量を測って問題ないものでも、誰も買おうとしなかった
- ・ 農家が値段を下げるとさらに買わない
- ・ 親戚で農作物を作っている人から売れなくなっていることを聞いた

- ・ 個人的に取引していた先から断られた（何年かして戻ってきた）
- ・ 値段を少し下げて売っていた
- ・ 実家では事故の年に食用米を作らなかった
- ・ 野菜農家の人が野菜を作れなくなって、売れなくなって自殺した人がいたのがショックだった
- ・ 村の人も地場のコメを食べない
- ・ 年配の人も福島県産のものを避けている
- ・ 説明会で配布したコメが捨てられていた
- ・ 自分の兄弟も飯館のものは食べないといった
- ・ 自分はいいが、小さい子供さんには福島産を避ける
- ・ 孫には少しでも健康的なものを食べさせたい
- ・ 福島の農家のお嫁さんが米や野菜を食べない
- ・ 福島県産の食品食べたら病気になる／福島の食べ物が危ない
- ・ 今も根強くある
- ・ 観光業が影響を受けた
- ・ 福島県内全部が高いと思われている
- ・ 会津の野菜は九州より低い（紫外線が少ないから）
- ・ 福島産は売れない／値段が低い
- ・ 風評被害は未だになくなっていない
- ・ 国内で風評被害がどうなっているのか情報がない
- ・ 国内でも本当はないのかと言ったらよく分からない
- ・ 産地が嫌がられる、値段が下げられるというのがあるのではないかと
- ・ 関西のニュースで、風評被害があることを伝えていた
- ・ 福島の野菜などの風評被害は今も続いている
- ・ 日本全体として風評被害が少しでもなくなることが必要
- ・ 説明会で話を聞いても理解しない人もいる
- ・ 会津も、福島がついているから、全然関係ない人たちも風評被害にあった
- ・ 原子力発電所の名前に福島がついていることで、風評被害が広がった
- ・ 風評被害は簡単に消えるものではない

回復

- ・ 果物や野菜は戻ってきている
- ・ 福島県産が打撃を受けているのを見て、できるだけ買うようにした
- ・ 自分は福島のをできるだけ買っていた
- ・ 海外の国からの桃の輸入が再開されたというニュースを聞いた
- ・ TOKIO が福島県の農産物を PR してくれている
- ・ 値段を戻していったら購入してもらえるようになった
- ・ 親は、地元の食べ物を気にせず、むしろ地場のものを食べるようにしている
- ・ 最近では米を買う人も出てきて、だんだん理解してもらえるようになった
- ・ 最近では食べないという人は少なくなってきた（そういう人は戻れない）

- ・ 修学旅行などに関して、会津はかなり戻りつつあった
- ・ 商工会や観光業の人は、早く日常に戻りたいという思いがある

処理水放出

- ・ 原発の排水による海洋汚染
- ・ 魚は抵抗があって、買い手がつかない
- ・ 汚染水で、どれだけの被害が出るかは、流してみないと分からない
- ・ 処理水を流すこと
- ・ ほかの国でも実際に行われている
- ・ 漁業関係者が反対
- ・ 魚を懸念する人は一定数いる
- ・ 震災前に比べて売上が落ちている
- ・ 検査結果が高くなくても制限されている
- ・ 制限によって流通量が増えない事情もある
- ・ 放射線量が高いから食べられないと思っている（誤解）
- ・ 汚染水を流すと世界的にも非難を浴びる

避難者との乖離

- ・ 国内の人は原発や放射能に触れる人はいない
- ・ 被害を受けた人に当時の話をしないようにしていた
- ・ 原発避難者にすごい補償が出ていることを話す人に嫌な思いがある
- ・ 補償の地域差
- ・ あまり人前で話すことではない
- ・ 避難してきた子がいるところで原発の話はしにくい
- ・ 他県の人から触れてはいけないことだと思ったと言われた
- ・ 友人が石垣から戻ってきたが、大丈夫だったと言えない（嫌な思いをさせてしまうかもしれない）
- ・ 戻ってきた人と放射能の話はしないようにしている
- ・ 会津に避難したことを周囲の人に非難された
- ・ 認識の違いで何人かと連絡を取らなくなったりした
- ・ 原発に勤めていた知人は「顔を合わせられない」と言って疎遠になった
- ・ 促進住宅では、パンクさせられたり、いろいろないやな目にあった（山木屋地区だけが避難地域だったため）
- ・ 震災で親戚づきあいが疎遠になったが、他のつながりができてきた
- ・ 他の土地を借りて農業をするのはつらかった
- ・ 避難生活をするのがストレス
- ・ 金をもらったよそ者のため、嫌な思いをしたし、地域の行事には参加しても本心までオープンではない

懸念を認める

- ・ 気にする人は気にするのだろうと思う
- ・ ちょっと水はねという人もいる
- ・ 安全性を強調して食べてもらいたいとは別に思わない
- ・ 危険だと思うなら、他所から買ってもらっていい
- ・ 基準値を下回っていることは言えるが、絶対安全とは言えないし、将来病気になるかもしれない
- ・ 将来実害が出たとしてら、当時の判断は正しかったのか、悩んだりするのではないか
- ・ やっぱり若い人や子供には、かえってこいとは言えなかった

申し訳なさ

- ・ 福島県産のものを買わないことに申し訳なさを感じている
- ・ 売られているものは安全と思うが、少し抵抗がある
- ・ もし他県の人間だったら、自分も福島県産を避けるだろう
- ・ 福島県内にいる人も、県産米を食べないということがあったので、県外の人が食べないのは不思議ではない

現状は？

- ・ 今福島がどうなっているのかが気になっている
- ・ 忘れられたくないが、取り上げられることでかえってマイナスになる不安がある
- ・ 大丈夫なところは線量計もいらんんじゃないんか
- ・ そこまで興味がない人がモニタリングポストの数字を見ていっているのが、風評を生んでいるのでないか
- ・ 目に見える形で放射線量の情報があると、知らない人は不安になる
- ・ いわきを過ぎたあたりから、廃墟になった家や黒い袋の山が見えて、10年たつのに恐怖と不安をあおられた

情報の問題

- ・ 風評被害が出てしまうのは情報の提供が足りなかったため（掘り下げて説明する）
- ・ 福島県民だけではなく、日本全体で情報を共有するという意味で足りなかった
- ・ 知る機会が必要
- ・ 放射線を浴びている人に近づくとうつるというデマ・思い込みをしている人もいる
- ・ 怖さだけが伝わってしまった
- ・ 怖いものではないということを伝えてもらいたかった
- ・ 食べるのは怖いと言っているニュースを見た
- ・ 事故の翌年でも検査でひっかかった米や地区はなかった（全袋検査の結果はニュースでもやる）
- ・ 福島の食べ物はもう大丈夫というのを気付いてほしい
- ・ 影響力のある作家が「まだ福島で食べるものを作っているのか、この人殺し」と発信しているのを見た
- ・ 人の声が怖い

- ・ どこか過ぎたところから車の窓開けちゃいけないんでしょと言われた
- ・ 行ったこともない、何も知らないのに怖がっていることに驚いた
- ・ 福島の事故（本当は東電の発電所の事故）
- ・ 別の災害が起きれば忘れられる
- ・ 一部分しか切り取って見えない
- ・ 生の情報をもっと取材してほしい
- ・ 韓国選手が拒否／海外の人はよく分からない
- ・ 土壌汚染が大げさに伝えられた
- ・ 福島の風評被害に関する調査を見た（国の機関）
- ・ 風評被害の主張を正していたものもある

その他

- ・ 農家の頑張りは分かる
- ・ 野菜や解散に大丈夫という品質保証みたいなラベルを付けている
- ・ 福島県産の物に全部ラベルをつければ安心できる
- ・ 子供の不登校経験あり
- ・ 不安を感じることを子供とは話せない（どうすればよいか聞かれても答えられない）
- ・ 被災時の食事の授業があつて、嫌な気持ちになるときは退出してよいと言われた
- ・ 被災者の自覚がないことは、親世代が一生懸命守った結果と捉えていた
- ・ 土の表面も汚染されて育った植物に影響がある
- ・ 汚染したものを食べたり、取り込んだりすると人体にも必ず問題が出る
- ・ 連鎖的に影響して出荷もままならない状態になった
- ・ 県は、すべて検査して、基準（人体に影響ないと思える線量）で安全の裏付けをとって出荷
- ・ 検査して安全の裏付けがあつても、ちょっと高くても影響のない地域のものを食べたほうがいいという流れになっていった
- ・ 原発事故から1、2日で収穫したものがそんなに影響あるとは思えない
- ・ 傍観者には、中間の立場で話を繋げられると言ってもらえた
- ・ 浪江の町の中は、同じように生活している様子で、気持ちが楽になった
- ・ 海外の自動車メーカーから「製品に放射能がついてくる」という話があつて、工場を移転した
- ・ 首都圏に電力を送る会社の事故なのに、首都圏が風評被害を唱えることに反発を感じる
- ・ 東京に住んでいる人が福島県が危険というなら根拠を示すべき
- ・ 東京に住んでいる人が本来は償うべき（恩恵をうけていたのだから）
- ・ 放射線のことを考えると、避難所にペットを連れて行かない人もいた
- ・ 牛の殺処分を避けられた
- ・ 町の促進住宅に住んでいたとき、自殺を考えたこともあつた
- ・ 子供を産んだばかりの友人がノイローゼみたいになって、石垣島まで避難した
- ・ 人口流出問題に関わっている
- ・ 飯館村の環境再生事業に関わっている
- ・ 河川での釣りの解禁を目指している

- ・ 地域全体が「やっぱり故郷っていいな」と思われるようになるよ
- ・ 自分の住んでいたところは放射線の影響はなかったと説明したら分かってもらえた

政策に関する発言

- ・ 政府の対応が遅かった

漁業問題

- ・ 漁業が停滞
- ・ 海上汚染で戻る気持ちが後退する
- ・ 汚染水が安全なら東京湾に放出してほしい
- ・ 東京電力の汚染水
- ・ 安全を強調するなら、福島県沖でなくてもよい
- ・ 科学的には安全かもしれないが、放出してからの魚はいや
- ・ 理屈は分かるし、環境にも影響はないと思うが、感情的にはいや
- ・ 汚染水を流すことで、隣国ともめている
- ・ 処理水を海に流すと、せつかく漁業が普通になってきているのに、また風評被害が始まる
- ・ 反対があっても、結局は国がオッケーと言えれば処理水放出してしまう
- ・ トリチウムをどこで放出するのか、処理の方法が本当に妥当なのかがよく分からない
- ・ 基準値以下に希釈して放出するとはいえ、濃縮されることはないのか、海の生物への影響はないと言い切れるのか
- ・ 希釈して放出するのがよいのであれば、大きなため息に希釈して入れて置いたらよいのではないか
- ・ 海に流すと日本だけの問題ではなくなる（日本として責任をとれる方法がよい）
- ・ すでに流しているのであれば、それと同じ量だけ流すのではどうか。
- ・ 他の原子力発電所と同じレベルで流す
- ・ 韓国が流していることは行っているが、日本については言われていない（トリチウム以外をながしているのではないか）
- ・ 基準以下とは言いが、実際どれだけ流れているのかの情報はない（累積）
- ・ 処理水は政府の方で決めたから進めるという感じ（近くの人たちとの合意が取れてない）
- ・ 復興も処理水放出も、地元の人たちの意見を聞いて、それらを採用しながら、合意をちゃんと得てやってほしい
- ・ 処理水放出に反対する国があるので、何かあったら賠償するではなく、何かがないように、働きかけに力を入れてほしい
- ・ 個人的にはトリチウム水は流すしない
- ・ トリチウム水のタンクで森が伐採されていて、無駄（少しずつ流しておけば良かったのに）
- ・ 汚染水の流出の問題（補償するとは言っているが、他に方法はないのか）
- ・ 太平洋側の地域の人たちは気になるのではないか
- ・ 海に流して、どこまで生活を補償してくれるのか、詳しく分からない
- ・ 福島県民も処理水についてほとんど関心がなくなっている
- ・ 汚染水の海洋放出も賠償問題になっているが、科学的に海に放出しても問題がないことを証

明することが必要

- ・ 津波被害もあり、漁業が衰退
- ・ 漁業の市場に活気がなくなった

処理水理解

- ・ 汚染水タンクの問題をどのように理解してもらえるのか
- ・ 福島県だけではなく、県外の人もみんなで考えなければいけないのではないのか
- ・ 放出を決めたのなら、本当にきちんとした情報を分かりやすく出してほしい
- ・ コープ福島で反対署名活動や講演会をやっている
- ・ 国と環境省は話し合いの場を設けて、直接現地の声を聞いてほしい
- ・ 処理水問題も、皆が言っていることではなく、勝手に全然違うことをしている
- ・ すでに処理水を放出することになっている
- ・ 汚染水を海に流すと外交問題に発展するのではないのか
- ・ 海に流す以外の方法がない
- ・ 汚染水はどうするのか（世界的にも非難を浴びている）

東電不信

- ・ 汚染水がどのタイミングで何が流されたか分からない
- ・ 汚染水の不正や捨ててはいけぬものを捨てたなどの報道をみた
- ・ 東京電力が何をしてくれるのかが見えない

廃炉

- ・ 第一原発の解体に時間がかかる・できるかぎり早く片付けてほしい
- ・ 廃炉に向けた処理をしたときにどうなるかが心配
- ・ 福島第一の廃炉は未知のことでどこまでできるか分からない
- ・ 万一、もう一度小爆発したら、日常を戻しつつあるところにも影響が出る
- ・ 廃炉処理で何が起きるか分からない
- ・ 政府があと10年といっても、10年では無理だと思うので、期待していない
- ・ 廃炉に向けて、安全に着実に、お金がどんなにかかろうが、やってほしい
- ・ チェルノブイリの納棺のように、一回覆って作業することもある
- ・ 廃炉する時には主要なところに空間線量計を置いて大丈夫と目視できる体制でやってほしい
- ・ 廃炉はちゃんとしてほしい
- ・ 今の技術で無理なら研究に力を入れてほしい
- ・ いつまで関わっていかないといけないのか
- ・ 不信感がある（本当にすべて管理できているのか）
- ・ 廃炉計画がどんどん遅れているので、いつ処分が終わるのか
- ・ 廃炉を含めて、長い道のりで大変だが、やってもらいたい
- ・ 廃炉作業に時間がかかる
- ・ 自分たちが生きている時代に廃炉はなかなか難しい
- ・ 福島原発は今も動いている（廃炉にしたいけれどできないから動かしている）

- ・ 廃炉するには 50 年、60 年とかかる
- ・ 100 年計画（テレビの特集でみた）
- ・ 完全廃炉まで放射能が出続ける

除染廃棄物

- ・ 黒い袋がいっぱいおいてある、いつまで残すのか、復興に時間がかかりそう（片づける人を増やすと早く復興が進むのではないか）
- ・ 校庭の土（除染廃棄物）をどこに置くかでももめたので、時間がかかる
- ・ 除染した土はどこへ持っていくのか
- ・ 汚染土も、県内に帰還できない地域を定めて国有化して永久的な保存場所にするという選択肢もあるべきではないか
- ・ 除染で集めたものをどうするのが決まっていない
- ・ 中間貯蔵施設に運んだ後どうなるのか
- ・ 廃棄物をなくすには何十年もかかる
- ・ フレコンパックはその後どうするのか
- ・ 除染も継続中

復興

- ・ 全然復興されていない
- ・ アクセスをもう少しよくしてほしい
- ・ 生活環境を整えることが先決
- ・ 事故があったので福島県に帰りたくないという人が圧倒数いる
- ・ 若い人を呼び寄せるためのいろいろな施策を積極的に県を挙げてやってほしい
- ・ 行政の支援がないと、過疎化がいつそう進んでしまう
- ・ いつ戻れるのか
- ・ 自分の住んでいた町に帰れるのはいつなのか
- ・ 事故が起こる前の福島まで戻るのが理想
- ・ 出産や子育てが本当い大丈夫なのか、安心して過ごせる環境なのか
- ・ 出産子育て世代も安心して暮らせるような対策を進めてほしい
- ・ 福島県の人口減少が激しい
- ・ 子育て支援、就業支援、仕事の創出を考えてほしい
- ・ 高速道路や鉄道は出来上がっているが、それで本当に復興と言えるのか
- ・ 完全に戻れないなら、思い切った考えで土地を再利用する
- ・ 以前暮らしていた人たちは、新しい場所や事業の中で暮らしていける状況が復興
- ・ 課題がいっぱいある状況では復興とはいえない
- ・ 賠償も重要だが、町のために、復興のために予算を使ってほしい
- ・ 現在は国道沿いに限られているので、さらに次のライフライン（公園や学校）に予算を使ってほしい
- ・ 事故からの復興というよりも、地域として盛り上げることが必要
- ・ 相双地区に人が戻ることが必要（ただし、都会に出たかった人も多い）

- ・ お金の配分を考えて（郡山市で全部除染をやるのは無駄）
- ・ 10年の間に仕事も生活も変わってきたので、放射能の問題ではなく、簡単に戻れる状況ではなくなってしまった（元の生活に戻ることは難しくなった）
- ・ 村に人を呼ぶために、子育て支援などに力を入れている
- ・ 子供が少なく、集団遊びの経験がないため、友達がほしい
- ・ 本当の意味での復興を考えるのであれば、補償はある程度の段階で切るべき
- ・ みんなで復興、まちづくりをできたら大きく変わるのではないか
- ・ 店や診療所がないので、高齢者も帰還できなくなった
- ・ 店や医療機関がないと人はすまない、人がいないと復興にならない（楽な生活ができる状況が復興）
- ・ 農家の後継者がいない
- ・ 除染土を運ぶ際に、道路を壊さないようにしてほしい（ダンプが通る道路ではない）
- ・ 若い人がいない
- ・ 子供がいないと、人がすまなくなる。活気がない。
- ・ 米の価格が下がっているので、農業で生活するのは大変
- ・ 双葉郡に帰った人の今後の仕事や自治体が生き残っていけるのか
- ・ 戻ってきているのは65歳以上の親世代が多い
- ・ 子供の転校が大変
- ・ 双葉郡の人で自宅に戻っている割合が少ない
- ・ 若い人たちは戻りたくない（不便さ、放射能の因果関係が解明されていない）
- ・ 高速道路はできたけど、人が戻ってきていない
- ・ 生活に必要なものが揃っていない
- ・ 浜通りの北側は高速道路で仙台とつながっている
- ・ 南相馬では、子供の数が若干増えている
- ・ どこも人手不足で、求人紙が出ています
- ・ 特定の診療科が不足（産婦人科や皮膚科など）
- ・ 開業医に対する金銭的な補助はすごい
- ・ 発電所に勤めていた人の仕事がなくなり、困っている
- ・ 家に戻れない人はほとんどが土地を放棄
- ・ 発電所の周りが放置されてよいのか
- ・ バリケード内は無法地帯になっている
- ・ 土地が必要な農家は移住に反対
- ・ 今後の福島県はどうなるのか
- ・ 10年も経っているのに、未だに仮説住宅に住んでいる人がいっぱいいる
- ・ 外国に10兆円払えるなら、仮説住宅の人を助けるために使ってほしい
- ・ 福島復興、東北復興にもっと力を入れるべき
- ・ 100%の復活を目指してほしい（復興は終わったみたいな感じになっている）
- ・ 人が戻らないので震災前には戻っていない
- ・ 浜通りは事故を背負っていかないとならないから国が助けるべき
- ・ 復興が進んでいるかのような無理な印象操作をして、明るいニュースの陰で忘れ去られてい

くのが心配

- ・ 犯人捜しより、一刻も早く人が住めるように

情報発信

- ・ メディアに露出させること（安全を発信する）
- ・ 学校や企業や町が取り組んでいることをもう少し大々的に発信してほしい
- ・ 放射能の健康への悪影響の説明があまり詳しくされていない（テレビ・情報番組）
- ・ 今、福島がどういうことになっているか情報がほしい
- ・ 原発の情報が最近少なくなっている（廃炉が長引いていることだけ）
- ・ 県外でトリチウム水のニュースはあまりやっていないが、県内は毎日やっている
- ・ 他国も流しているし、その基準値も高いので、政府の伝え方をもっとやる必要
- ・ 全国版で、今日の放射線量は出ない
- ・ 正確な情報を発信してもらうことが一番大事
- ・ 継続的なモニタリングを行って、データを他の人の目に触れやすい形で見えやすい形で公表してもらいたい
- ・ 高齢者は決めつけていることが多い
- ・ それぞれの地域で特徴が違うので、全国一律は難しい
- ・ 見えないものに対する不安や恐れは共通している
- ・ 心配する話や噂話はある
- ・ 根拠となるような冊子があれば自分なりに伝えられる
- ・ 疑っている人はなかなか受け付けない
- ・ 情報の伝わり方や提供する場は大事

欲しい情報や提供方法の工夫

- ・ 溜まって危ない所や小さい子には触らせないようにする場所などが示されたガイドラインがほしい
- ・ 福島県産の食べ物の価格が元に戻るために、心配ないことを証明できるものをしてほしい
- ・ 日本の安全検査体制は世界的に遅れている
- ・ これだけ検査して、基準値を超えてないので問題ないことをもう少し発信してほしい
- ・ 商品の安全性を証明できるラベルなどが必要
- ・ 福島県産のコメや野菜の売り上げが落ちている
- ・ 未だに苦勞している農家の人に支援のお金を払うべき
- ・ 学校教育の中で放射線の情報を伝えていく
- ・ 放射線のことを、もっと授業に取り入れてもよいのではないか
- ・ この地域は大丈夫だから住んでくださいというマップがあると戻りやすい
- ・ 除染が終わって大丈夫なエリアを細かく知らせてもらえると安心できる
- ・ このエリアは住むのは難しそうという情報も知らせてもらいたい
- ・ 間違っていない情報を基に人が判断できたらよい

継続的な健康影響調査

- ・ 健康影響の研究に基づいて、健康診断や検診を続けてほしい（今後の生活の基準として考えられる）
- ・ 何十年か先にどういう影響が出てくるかを、後世の人たちにデータとして残す役割がある
- ・ 目に見えないものへの対処は専門家にやってもらうのが賢明（自分たちはデータ提供で協力できる）
- ・ 全国への調査をしてほしい（子供の甲状腺検査や線量の調査）
- ・ （半減期に基づいて）将来、どうなるかを見ておくことは大切
- ・ 長期的な影響を調べる
- ・ 統計だけでなく、個別事例も併せて分析する
- ・ 統計は部分的に抽出すれば、いかようなメッセージにもできる
- ・ 影響エリアに絞って統計をとる
- ・ 健康被害についても引き続き大事（国の避難指示遅れで被ばくした人が大勢いる）

賠償による地域の分断や対立

- ・ 仮設の人たちの方がおいしい暮らしをしている（お金をもらえるので新築の家を買った）
- ・ 避難者は補償金をもらって毎日パチンコに行っている
- ・ 中間貯蔵施設（仮置き場）として除染土を置くとお金がもらえ、それで食いつないでいた農家の人がその後離農してしまった
- ・ 浜通りの人たちにかんがりの補償が出ているがそれが定職につかない、依存してしまうということで復興を遅らせているという面もあるのではないか
- ・ 賠償の線引きで、地域に軋轢を生んだ
- ・ 双葉郡らの避難者が賠償問題で仲たがいでいる
- ・ 賠償の対象が複雑
- ・ 地域による格差がある
- ・ 平等ではない
- ・ 補償問題
- ・ 避難長者になっている
- ・ 優遇されている
- ・ 傲慢になった
- ・ 補償の線引きをしてもらいたい
- ・ 津波被害者にも支援すべき
- ・ 働いている人に対しても1人あたり月10万円の支援（働かなくなる人も）
- ・ 避難直後は被害者意識から地元の住民との感情の軋轢があった
- ・ 今は避難先の地域に溶け込もうとしている

エネルギー政策の見直し

- ・ 経産省は、電力を賄えるのかを考えた上で原発について考え直す必要がある
- ・ ここまでやったら安全に稼働できるという内容をはっきり提示してもえれば、原発に対するイメージも変わってくる
- ・ インフラ整備や原発に関して、地球温暖化対策を最優先にしたものの稼働が望まれる

- ・ エネルギー構造を見直すところから
- ・ 福島県が脱炭素宣言をしたが、どう進めていくのか
- ・ 目標は決まったが、どういう手段で行うのか、やそうとする対策に実感がなく、達成されるのかが見えない
- ・ 原発に代わるものを確立して、原発は早くなくすべき
- ・ 電力の問題で原発を使うなら、管理をしっかりさせる
- ・ 安全（しっかり管理もしている）と言っても原因である原発はなくした方がいい

原発立地の背景や反対運動など

- ・ 議員主導の損得勘定で福島県に持ってきた
- ・ 東京電力の電気は福島県で一切使っていない
- ・ 自治体の首長も原発の危険性の知識はなく、事故になって初めて知った（もう少し対策強化を求めていたら）
- ・ 原発の施工（対策）をしっかりするよう求めた知事もいたが、抹殺された
- ・ 反対運動は昔からあったが、原発がないと町の財政が持たない
- ・ 東電に就職できて、実家を離れなくてすむ
- ・ 東京並みの給料で、暮らしが裕福
- ・ 地元にとってはいいこともあって、反対って言えない
- ・ 双葉郡内は一時的に交付金で豊かになった
- ・ 郡内に仕事も増え、経済的物質的なメリットが相当あった

緊急時対策

- ・ 水や食料の支給が、避難所だけでなく、持ち家に住んでいる人にもあるようにしてほしい
- ・ サポートを必要としていた人は周辺にもいたことを分かってほしい（忘れ去られてしまう心配があった）
- ・ NAI が 600 台国から支給されたが、あたらしい機会が入って廃棄することになった（修理して工業高校に無償で譲渡する活動をしている）無駄にしないように考えられないのか
- ・ 避難者の仮説住宅や家電製品を全部捨てていてもったいない
- ・ 災害に備えた活動が不足している
- ・ 自主避難者には補償が全く一切なかった
- ・ 避難先の家賃補助は限度額があり、不動産屋の対応で違いが大きかった
- ・ （行政の緊急時対応では）優先度で、限りある資源を有効活用する考え方を採らざるをえない

環境省への要望

- ・ 環境省は川の砂をとって、自然産卵ができる環境を整えてほしい（国の再建は元に戻すことしかしない）
- ・ 土が流れないように置いてある土嚢袋の素材がナイロンで、草刈をする際に絡まってしまう。
- ・ 環境省は目先の除染だけでなく、双葉郡の人への精神的なケアをするべき
- ・ 環境省が福島に対して何をしてくれるのかよく分からない

専門家の役割

- ・ 専門家は、災害を未然に防いで、予測して対策を示す役割
- ・ 知識のない人が集まって対策をしていたようだが、専門家が被害を少なくするための活動をすれば良かった
- ・ 専門家はテレビで解説するより、緊急対策を議論するのが優先
- ・ 何か起きたら専門家を招集して対策してほしい
- ・ 専門家は研究したことを生かすのが仕事

教訓を学ぶ

- ・ 今回起きたことをレッスンとしてまとめておくことが必要
- ・ 戻っていないことは何か、それをどういう順番で、何が必要かを、後世までの事業として考えるべき
- ・ 今回の情報をまとめて将来に備える
- ・ 同じ事故を繰り返さないように、原因をつぶすこと
- ・ 全国の他の場所で起こらないようにする
- ・ チェルノブイリのときの教訓が活かされてなかった
- ・ もっと早く避難指示を出していれば、被ばくしなくてよかった人がいたのではないか

信頼

- ・ 信じられるのは近所の人
- ・ 市役所の人でさえ利害関係が入っている
- ・ 都合の悪いことはなかなか言わない
- ・ 危険については正直に伝えてほしい

その他

- ・ 未知の物質で、分解されるには何万年もかかると言われているので、今からでもできることがあるならしてほしい
- ・ お金ではなく、命を生活権を返して
- ・ 震災関連死の問題にも目を向けてほしい
- ・ 自分の健康や自分の生活を他者に委ねることの不本意さ、人生を他者に委ねる、住むところを誰かに決められる（判断ではなくお仕着せ）
- ・ モニタリングポストがあることが風評被害という意見もある
- ・ 日本は原発を廃炉にした経験がないので、モニタリングポストは残してほしい
- ・ モニタリングポストを市町村単位で、役所や学校などには残してもらいたい
- ・ 除染を早くする
- ・ 庭に埋まっている除染物を早く撤去してほしい
- ・ 定期的に何年かおきとかで除染してほしい
- ・ 除染後でも溜まる部分があるので、定期的に調査してチェックしてもらいたい
- ・ 自然災害に対してどれだけ対応できる設備を建設できるのか

- ・ 県外の方は福島の実態についてどう思っているのかを知る機会がない
- ・ 福島県の方が自虐的になっているのでは（自分たちで、汚染されているから安くなっていると勝手に思っている）
- ・ 外からの見られ方を気にしていて、子供たちが差別されないか不安
- ・ 福島第一の現場は、ほとんど防護服なしで歩ける状況になったが、作業者が作業に専念できる環境にしてほしい